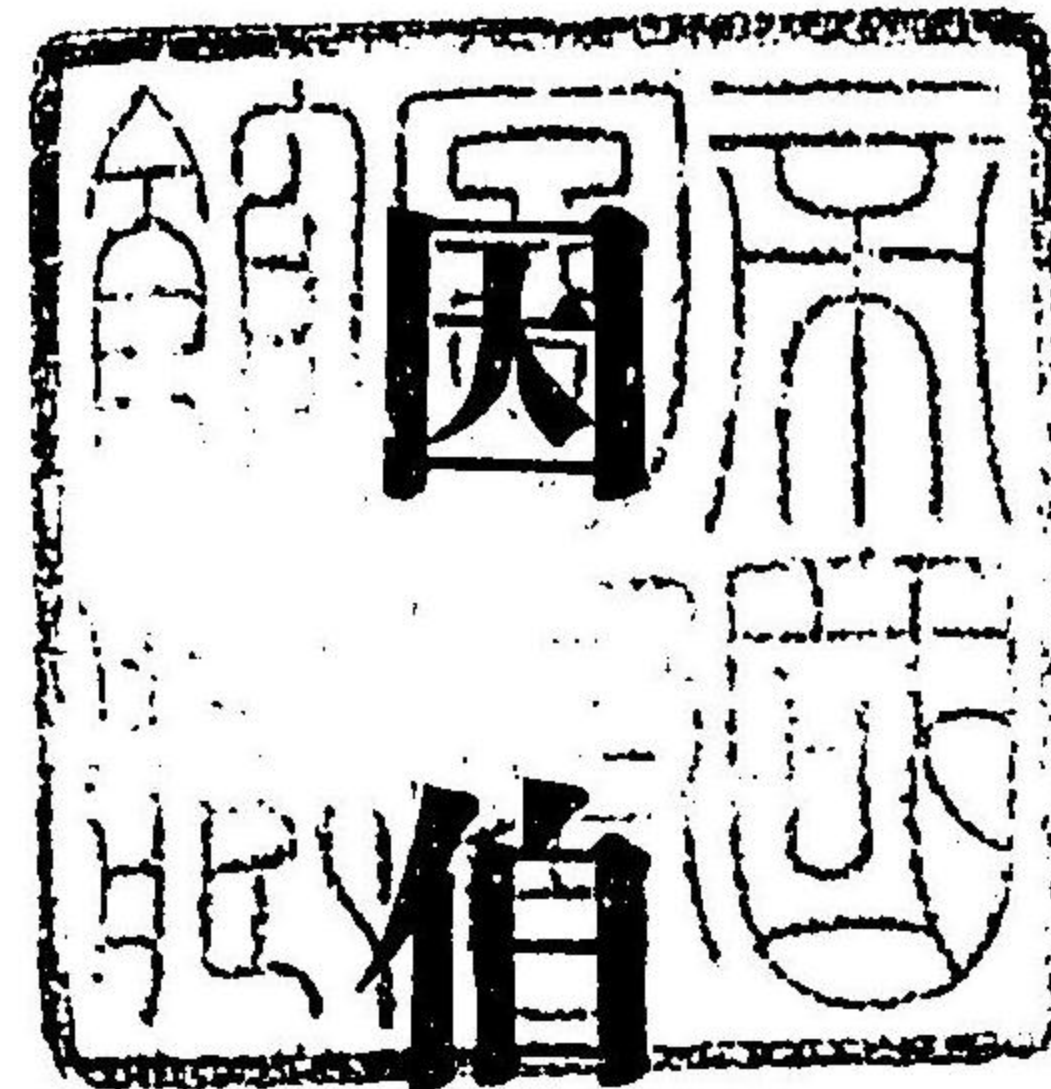


74
376

因伯記要





烏取縣
纂編

記
要

明治
40 5 18
丙交

因伯記要

凡例

- 一 本書は鳥取縣管内の大要を記したるものにして専ら簡約を主として編纂せり故に元弘の義舉の條下に名和長年の事蹟を掲げ慶長以後封土易置の條下に池田光仲の事蹟を掲げたるか如き全編概ね此類なりとす
- 一 名所舊蹟及社寺に係る事項は由來記傳説等に依れるもの多し
- 一 假名は地名人名等訓み難きものに附せり
- 一 繪畫は關係の條下に挿むと雖紙幅の廣狹に依て間々條下を逸したるものなきにあらざるべし

凡例

一 編纂の序列繁簡の取捨等其宜を得ざるものあり加ふるに誤謬脱漏なきやも計り難し是れ畢竟上梓急を要し推敲の餘日を許さざりしか爲にして極めて遺憾とする所なり

明治四十年四月

二

因伯記要

目次

第一章 沿革

第一	總説	一
第二	神代と因伯二州	三
第三	元弘の義舉	五
第四	山名時代と尼子氏	九
第五	織田豊臣時代	一三
第六	慶長以後の封土易置並池田光仲	一七
第七	維新の活動、人才の輩出並池田慶徳	二二
第八	文教沿革の概要	三二

目次

頁数

第九 武術

第十 美術

第二章 地理

第一 管轄

第二 周圍

第三 面積及地目

第四 地勢

第五 山岳

第六 原野

第七 河流

第八 池沼湖

第九 地質

六一

六六

七七

七七

七八

七九

八一

八二

八四

八五

八八

八九

第十 鑛泉

第十一 氣候

第十二 交通

第十三 通信

第十四 產業及物產

第十五 郡市區劃及戶口及公共團體並

二 地目段別

第三章 名所舊蹟

第一 鳥取市

第二 岩美郡

第三 八頭郡

第四 氣高郡

一一七

一一九

一一九

一三〇

一四八

一五七

- 第五 東伯郡
- 第六 西伯郡
- 第七 日野郡

第四章 教育、兵事並社寺宗教

- 第一 教育
- 第二 兵事
- 第三 社寺宗教

- 一七四
- 一九二
- 二二五
- 二二九
- 二四一
- 二四五

第五章 勸業

- 第一 商業及工業
- 第二 農事
- 第三 蠶絲

- 二四六
- 二四六
- 二五二
- 二五九

第四章 畜産

- 第五 漁業
- 第六 林業
- 第七 氣象

二六六

二七七

二八四

二九〇

第六章 財政

- 第一 公共團體の財政
- 第二 勤勉貯蓄

二九〇

二九一

二九七

第七章 警察

- 第一 警察區劃及配置
- 第二 司法警察
- 第三 行政警察

二九七

二九八

二九九

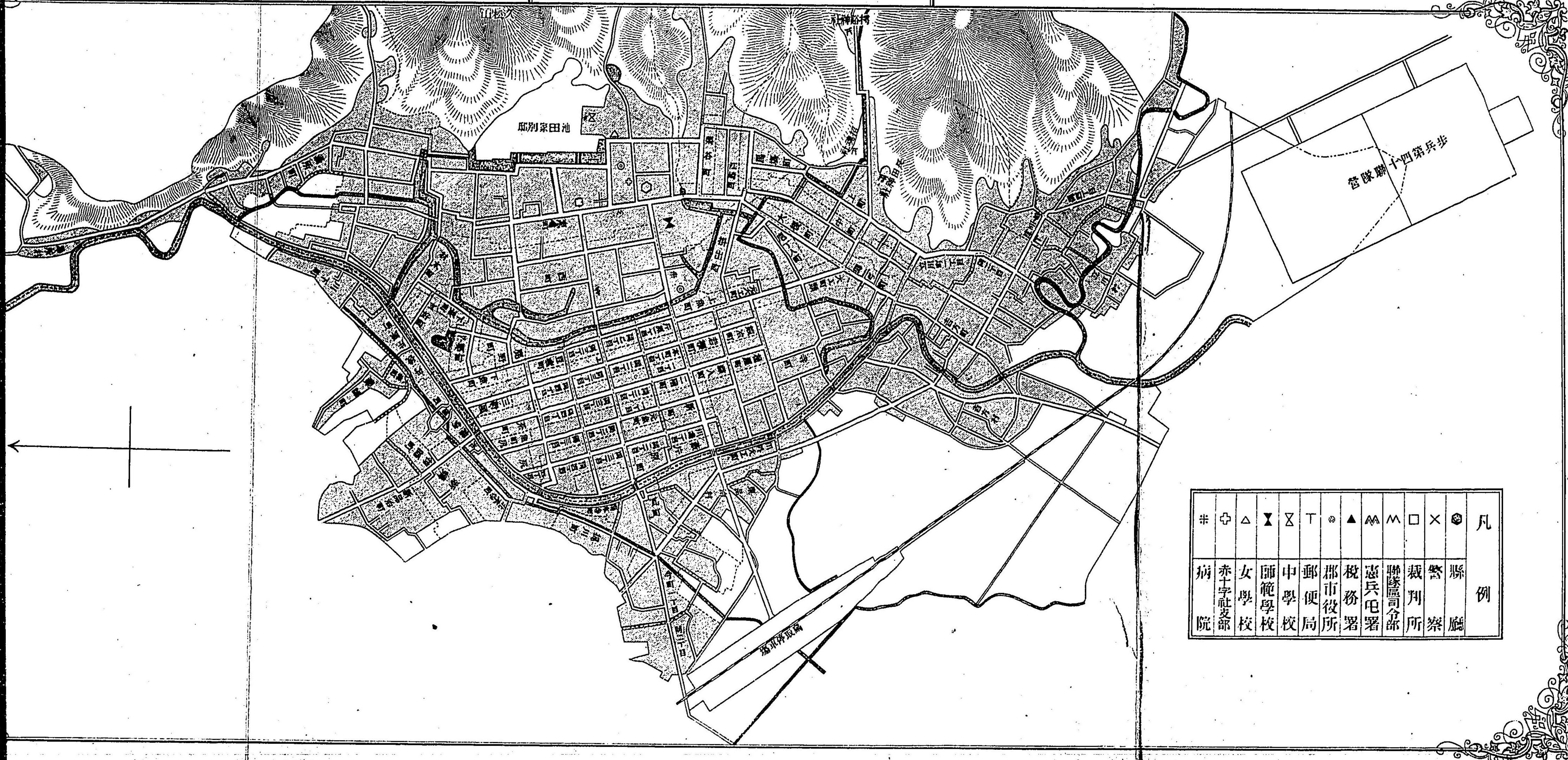
三〇一



因伯記要目次終

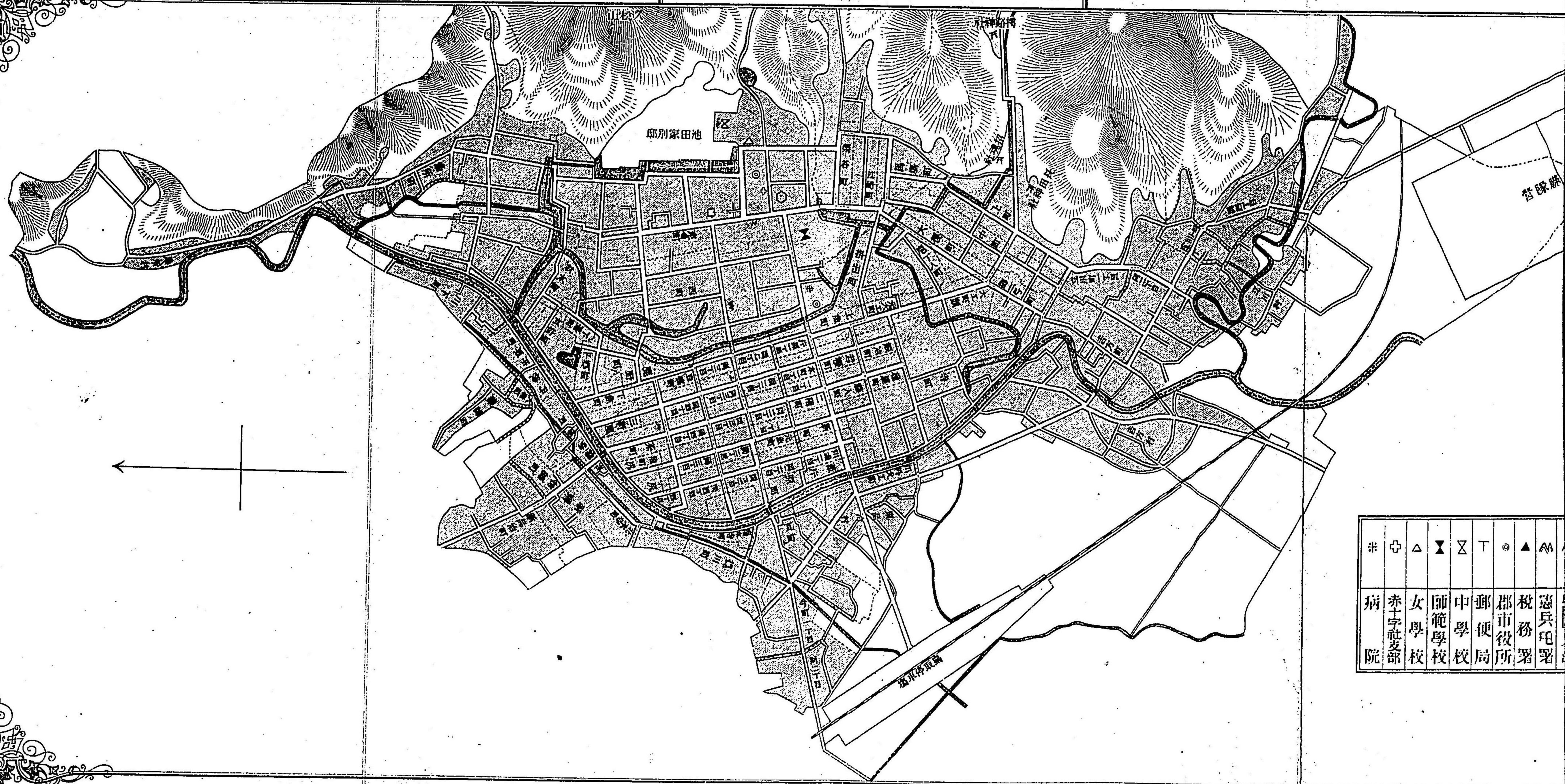
第八章	各種團體	六
第一	日本赤十字社鳥取支部	三〇五
第二	日本赤十字社篤志看護婦人會	三〇五
第三	愛國婦人會鳥取支部	三〇七
第四	鳥取縣軍人幼兒保育會	三〇八
第五	鳥取孤兒院	三〇八
第六	東伯郡橋津獎惠社	三〇九
第七	報德社	三一〇
第八	大日本武德會鳥取支部	三一三

鳥取市街圖



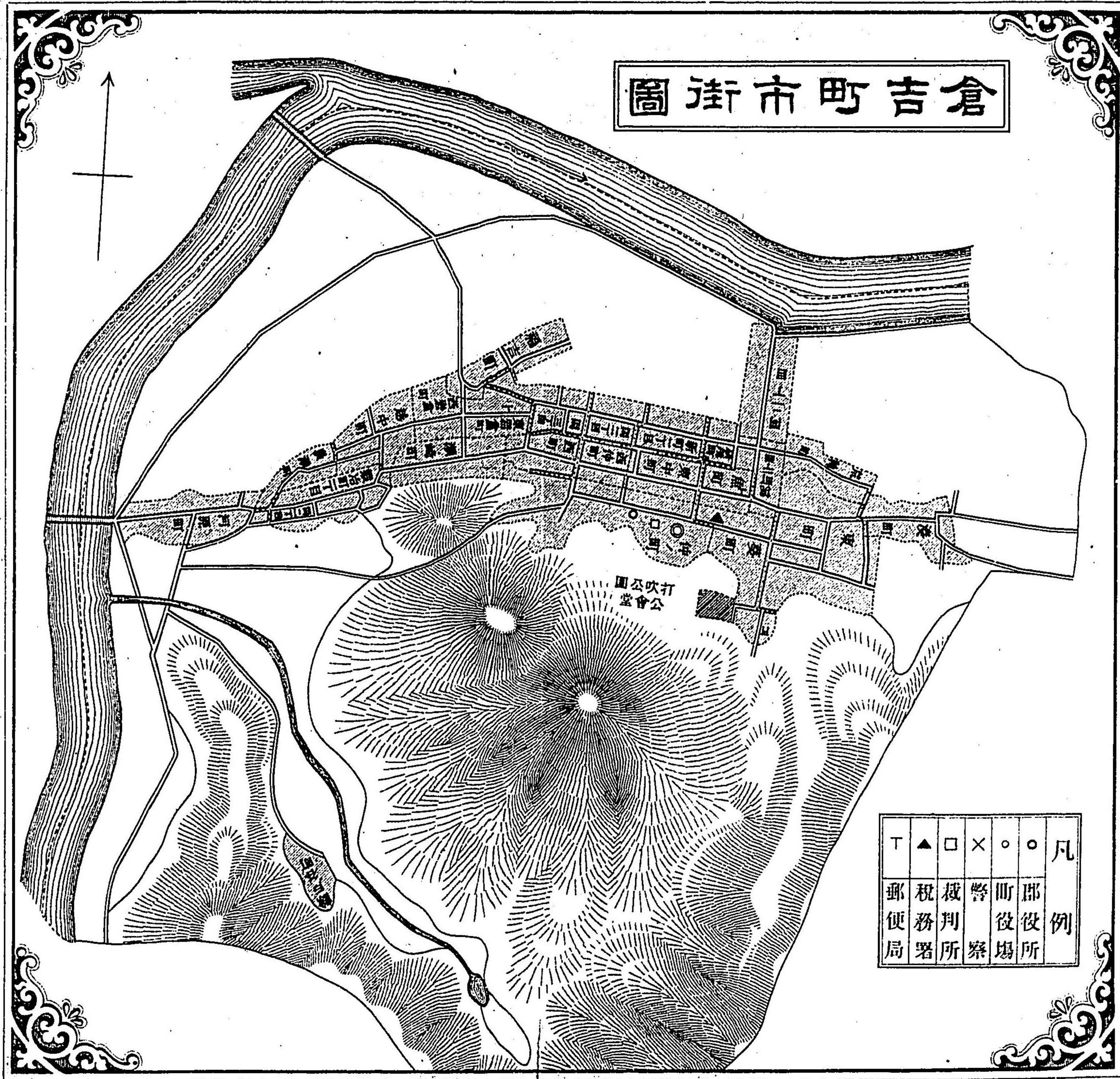
⊕	△	×	⊗	⊕	▲	⌒	⌒	□	×	⊙	凡
病院	赤十字社支部	女學校	師範學校	中學校	郵便局	郡市役所	稅務署	憲兵屯署	聯隊司令部	裁判所	警察廳

鳥取市街圖



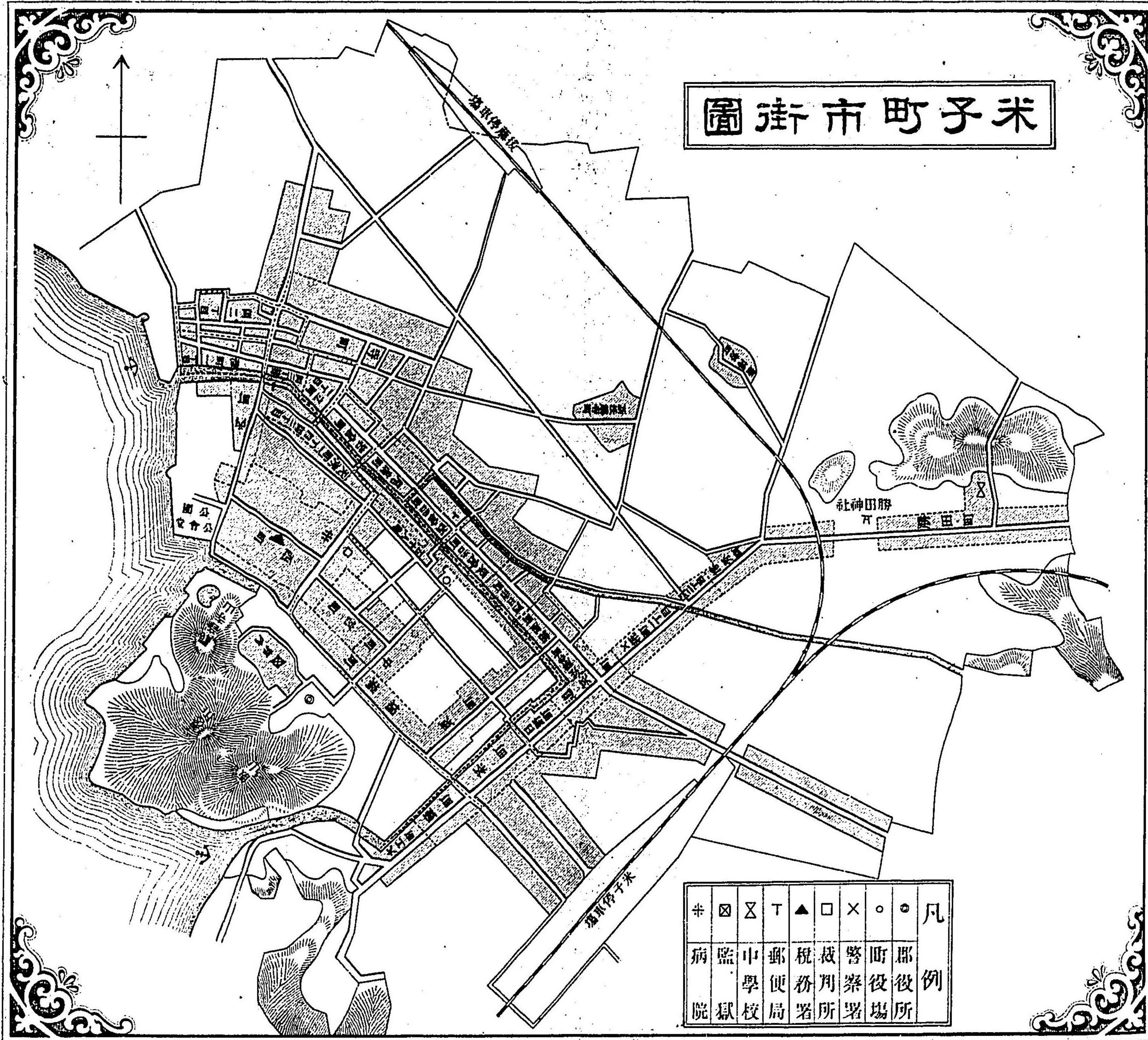
#	+	△	×	⊗	⊥	◎	▲	▲
病院	赤十字社支部	女學校	師範學校	中學校	郵便局	郡市役所	稅務署	憲兵屯署

倉吉町市街圖

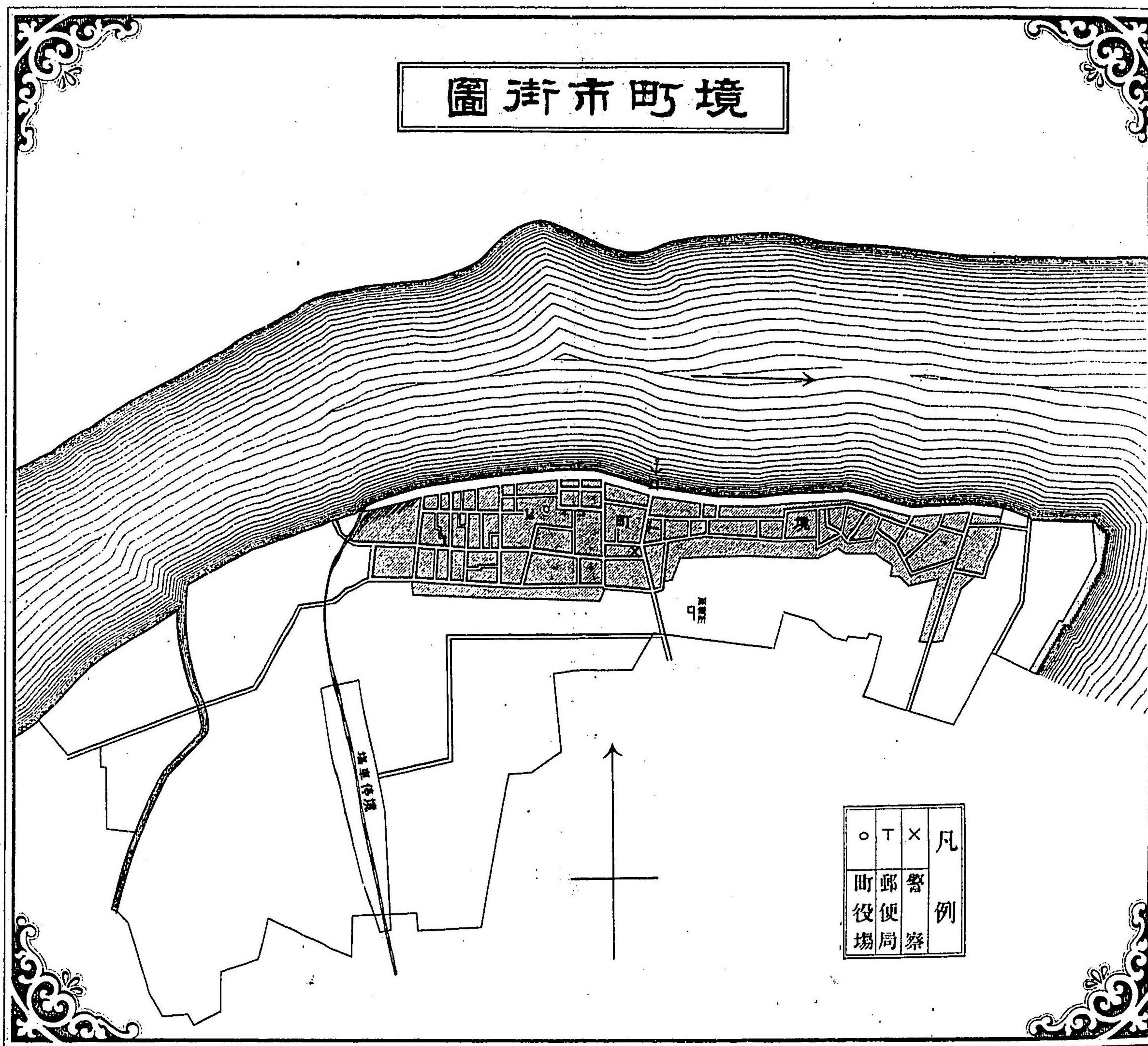


T	▲	□	×	○	○	凡
郵便局	稅務署	裁判所	警察所	町役場	郡役所	例

米子町市街圖



境町市街圖



因伯記要

第一章 沿革

第一 總説

鳥取縣は因幡伯耆二國より成り因幡は往古稻羽又は稻葉或は以奈八など
 書せり本と法美郡稻葉郷美今郡に基原して一國の總稱となれるか如し郷名
 の本義は或は稻葉より出てたりとし古事記或は稻庭ならん地名と云へり大日本
 書伯耆國は書して伯伎或は伯々岐とせり其源は書筭地名により出たる地ならん
 又母來なるへしと云へとも詳ならず古事記或説に妣國ならんとも云へり大
辭地名蓋し現今用ふる所の因幡伯耆の文字は和銅六年の改定に由れるも
 のなるへし往古山陰地方は須佐之男命天津神に排逐せられし後一時占領
 せし地なるか後又大國主神の所有に歸し居たりき景行天皇の時大八木足
 尾石川波々岐の國造に任せられ成務天皇の時彦多都彦命伊其和斯彦命と

稻葉の國造に任せられたり仁徳天皇の時に及んで武内宿禰稻葉國龜金に
 下向すとあり乃ち今に國の一宮として崇祀され居れり中世に在て國府は
 因幡には宮下村今岩美郡伯耆には國府村東伯耆郡に置かれ國の格は皆上國
 に定められたり國司の著名なるは因幡に在ては大友家持淡海三船在原行
 平橘行平等にして伯耆に在ては山上億良等とす和氣清盛亦因幡の國司に
 任せられしも來任せす中世以降國守に任せられしもの枚舉に遑あらずと
 雖も皆任國に入らず國務は介以下に於て決行せしに似たり元弘中名和長
 年功を以て因伯二州の守護に補せらる足利時代には兩州の地山名氏の領
 土となり後戰國時代及豊臣時代の變遷を歴て慶長五年徳川家康關ヶ原戰
 捷の後に及んで伯耆全國を中村一忠に與へ因幡は龜井茲矩池田長吉兩人
 の封土となれり元和三年二州の地舉て池田光政に與へらる寛永九年光政
 備前に移封せられ其從弟光仲備前より移されて因伯兩州の太守に封せら
 る爾後十二代凡二百三十六年を経て王政維新の政變あり藩主池田慶徳藩
 籍奉還後鳥取藩を置かれしか明治四年鳥取藩を廢して鳥取縣を置かれ因

伯隱の三國を管す同九年鳥取縣を舉げて鳥根縣に合す十四年再び鳥取縣
 を置かれ因伯二州を管轄し以て今に至れり

第二 神代と因伯二州

神代の事遼遠にして今詳説すへからずと雖も伊邪那岐伊邪那美兩神游能
 恭呂島に天降りたるの後十四島三十五神を生み給ひしか後伊邪那美命火
 神を生みし爲め死去せられしかは乃ち出雲伯耆兩國の界なる比婆山に葬
 り奉りたり

二神の御子須佐之男命暴悍の舉動を以て謫せられて出雲に入り暫く須賀
 の宮に治せしか後國を婿神なる大國主神に託して底津根國に隠れらる大
 國主の神は天之冬衣神の子祖御子須佐之男命にして宏量武略あり兄弟甚た
 衆く其數八十神あり當時稻葉の八上比賣美人の名高かりしかは兄弟皆之
 を得んと欲し共に稻葉に入れり大國主神は其從僕の如く袋を負て從行せ
 しか途に氣多の崎今氣高郡末に至り裸兎の苦惱を救助せしかは裸兎深く

其徳に感して必ず八上比賣を得んと宣告す八上比賣亦兄弟八十神の希望を斥けて大國主に嫁すべく明言したりき八十神之を聞て憤懣に堪へず相謀て大國主を殺害せんとす歸て伯伎の手間山下手間村に至りし時之を欺て曰く此山中赤猪あり吾等之を逐ひ出さん汝待て之を捕へよと猪に似たる大石を灼熱して之を轉す大國主身體焦爛して一たび絶命す既にして其御祖命の哀哭により鬻貝比賣鬻貝比賣の救治を得て蘇生するを得たり既にして八十神又大國主を欺きて再び之を殺さんとす御祖命の救助に由て復た免かる是に於て大國主其暴惡を怒り終に之を山河險隘の地に追究して其迫害を除き而して八上比賣を娶れり然れども比賣嫡妻須勢理比賣の嫉妬に遭ひ辭して稻葉に返れり後大國主専ら國土の經營に當りしも奏効遅々たりしか良彌少名毘古那神を得て効績を挙げたり既にして少名毘古那辭して常世國に渡る少名毘古那は即神産巢の子にして其身矮少に其常世國に渡りし時粟莖に縁て彈渡りしと云へり其地は伯耆會見郡にして今の西伯郡彦名村附近なり

大國主神か觸れたる焦石は尙ほ西伯郡天萬村の西四丁許の山麓にあり赤猪岩と稱せり鬻貝比賣鬻貝比賣蛤貝比賣蛤貝比賣の社は同郡清水川村津村にありて今於婆御前と云へり又大國主神の因幡に入りしに當り其袋を置きし地は八上郡袋河原村今八頭郡にして歸途袋を置きし地は會見郡大袋村今四伯郡なりと云ふ伯耆志

第三 元弘の義舉

元弘二年三月後醍醐天皇の隠岐に遷駕せらるゝや作州より伯耆に入り山市場及車尾郡にありに駐紮せらるゝもの數日にして海路出雲の安來を経て三保關に向はる四月一日同所にての 御製に曰く

さもこそは月日もみちぬ我ならめ

衣更せし今日にやはあらぬ

同二日隠岐に着かせられて假皇居に入らせ給ふ 御製に曰く

こゝろさす方を問はや波の上に

浮てたよふ海士のつりふね

天皇當時の御威は人をして千載の下尙ほ憤涙に咽はしむるものあり越て三年閏二月供奉成田小三郎竊に國分寺の僧某と謀り術士名和泰長を招き問ふに京畿の形勢を以てす泰長は長年の弟なり因て答ふるに天下勤王の士日に振起せるの狀を以てす小三郎乃ち泰長を延て天皇に咫尺せしむ泰長奏するに船上山の要害にして且家兄長高の頼るべきを以てす次日泰長富士名義綱を誘ひ相共に義旗を舉んことを謀る天皇近く二人を召し御盃を賜ひ勅するに伯耆潜幸の意を以てす泰長出雲に到り鹽冶高貞を誘ふ高貞應せず出雲國造の兵泰長を捕ふ泰長自殺す同月二十三日の夜天皇裝を嬪御に擬し竊に行宮を出て船に乗して出雲に上陸す到る處皆應せず國造國司等反て不利を圖る天皇乃ち船を駛せて東に向ひ伯耆の片見浦今東伯耆片見に至る既にして又西に向ふ賊船來り索む船手之を欺き間を得て大坂港又進坂に作る東西伯耆郡界に着す時に同二十八日なり天皇乃ち小三郎を遣し勅を傳て名和長高を招く長高直に旨を奉し天皇を岸に迎ふ

天皇手つから苦を掲げ船底を出つ衣冠頽然衆流涕敢て仰き見るなし長高因て族を舉て天皇を奉し船上山に據る賊の大兵來り攻む長高等擊て之を卻く天皇長高の功を賞し名を長年と賜ふ賊兵既に船上山の圍を解き退て小浪城に入り急を六波羅に告ぐ長年の第六弟氏高放數百旛を作り近國武士の紋章を煤印して疑兵を張る遠近之を見て來り應するもの衆し三月三日天皇宴を設け長年を伯耆守に任し詔して小浪城を攻めしむ長年の族行氏信貞等進んで炬火を城中に投し之を焚く城遂に陥る又伯耆守護代理糟屋重行を中山城船上山北二里に攻めて之を抜き繼て小嶋城東伯耆を陥る國中平定す長年鹽谷高貞の不逞を責め兵を出雲に出し之を討たんとす高貞大に怖れ富士名義綱を介し來り降る長年の長子義高之より先き千窟の攻圍軍にあり是に至て辭し歸る伯耆因幡美作出雲隱岐の諸名族來り會するもの相踵く天皇長年を召し勅して曰く頃日の大功は偏に卿か忠節に出てたりと乃ち源忠顯をして帆船を畫かしめ長年に賜て紋章となさしむ又手親ら繪旨及和歌を賜ふ曰く

漫々たる海上にいつくともなく漂ひて四日はかりは過ぬ二十七日の夕方にや杵築の浦にて西風はけしく吹ていかなるへきにかと心騒ませしかども風にまかせしに夜より波の上も静にて明ぬればこゝかしこも見ゆるに伯耆の湊に著ぬ楫取もいまは力つきぬと云ふをどかくして大坂といふ處につきぬこゝは荒磯にて釣船たにもまれなり此の處のあるしといふ者も都にありければよしあしにつけてこゝへきものも無しともなる人ひとりふたりはなほ人もどめにどて出ぬ楫取もにけうせぬればあやしき苦の下にたゞひとりうつもれぬたる心の中いはむかたなし直衣など引刷ていまはかきりと待居たるに船のもとに人ひとりきたりあら、鋪も無きはいかなるにやどあやしきに忠顯は尋ねて御迎のよしを奏すうれしなどはかゝるためしをそいふへかンめる中々其時は心も詞もおよふへき限にあらすおもひ出るたひことにその氣味なほむねにあり忠を致す難いつれもおろそかなるへきにあらねともさしむたりて待出たりしこゝちなむたごふへきかたそなかりし

忘れめやよるへも波のあら磯を

み船のうへにどめしこゝろは

長年か忠功後代の人にもしらせむか爲にしろし置なり未々の君にもこれを見せ奉らはいかゝたろかならむ子孫までも此の忠はかりは朽しと思へは正直を以て報國として行末久しくつかへ奉るへし

三月十三日天皇源忠顯を左近衛中將藏人に補し兵を率て京師を恢復せしむ十七日伯耆の官軍亦丹波路より進む其數二萬七千人に上りしと云ふ五月七日忠顯急使を馳せ京師の恢復を奏す天皇乃ち二十三日を以て船上山の行宮を發し長年等を従へて京師に還御す

第四 山名時代と尼子氏

大永の戦

建武中興の業半途にして敗れ足利尊氏の勢力強盛となるに及んで家臣山名時代命せられて侍所別當因伯二國の守護となれり正平八年時氏南

朝に歸順し領地數國に跨りしも尋て足利義詮に降れり守護たる故の如し時氏諸子を分封し長子師義に伯耆を八子氏重因幡に因幡を四子氏清に丹波を五子時義に但馬を與ふ師義倉吉郡東伯に治す其の子氏之外史氏伯耆の松崎郡東伯に移る元中七年將軍義滿氏之弟滿幸の譖を聞き氏之を逐ひ領土を没す滿幸誅せらるゝに及んで氏之再び本領に復す七世澄之に至り威令漸く行はれず國中頗る動搖す尼子經久出雲に崛起し勢ひ遠近に張る大永四年五月遂に大軍を將て伯耆に入り米子淀江天満尾高不動岳西伯の諸城を陥る進て東部に入り八橋岩倉堤羽衣石倉吉泊上郡東伯の諸城を攻む諸城皆陥る助土城主國府某狼狽鋒を交へすして城を棄つ國人之を徒落城と稱す此役伯耆東西の舊家行松正盛小嶋貞章山名直高山名澄之山名氏久國府親俊等皆滅さる南條宗勝亦因幡に走り布勢城主山名豊次に屬し又但馬の山名祐豐に頼る經久旬日の間を以て伯耆を略定し族國久を羽衣石に國久の子誠久を泊川口城に居らしめ東伯三郡を管せしめ以て因幡兵の來襲に備ふ又尾高を吉田光倫に八橋を其弟

左京亮に與へ西伯三郡を鎮撫せしむ是に至て山名氏守護時代の組織皆破壊し有名神社佛閣等盡く兵燹に罹り民家殘敗什器財寶掠奪幾んど盡く世に之を大永の五月崩れと稱せり

天文の戰

伯耆既に尼子氏の勢力に歸す天文九年秋晴久兵を伯耆に募り吉田兄弟を伯耆に留め國久以下を隨へ大舉安藝に入り毛利元就を吉田城に圍む此時に當り大永の敗將山名氏豊南條宗勝小嶋貞章等但馬の山名祐豐因幡の山名豊次と進衛して布勢城に會し晴久南征の虛に乗し共に起て舊地を恢復せんことを圖る曰く晴久若し能く毛利に克たは勝に乗して必ず因幡を侵さん坐して死を得んよりは進んで機先を制せんには如かずと豊次の將武田常信を推して帥となし伯耆の浮浪六千人を招聚し十月八日進んで泊村に至り河口の城を攻む誠久の留守加藤兵藏福原彌十郎等防戦終に支へず城陥る尾高八橋の守將吉田光倫急を安藝に告ぐ國久遽に兵三千を提て羽衣石に還り吉田兄弟と相合し橋津川を隔て、宗勝

常信等と戦ふ常信進て川を渡らんとす國久機を見て之を撃つ常信戦死す宗勝等敗兵と争て橋を渡る宗勝水に墜つ泗て僅に免るゝを得たり國久勝に乘し進て因幡に入らんとす會々飛報あり大内義隆大兵を帥ひ元就を來援せんとすと國久因て光倫を伯耆に留め再び兵を安藝に進む既にして晴久軍敗る次て病て歿す永祿六年晴久の子義久元就に降る因幡伯耆の地因て毛利氏に屬し大永の敗將皆舊土に復するを得たり杉原盛重尾高城にありて國內を監視す盛重勇悍驍名あり毛利氏の恩威大に行はる十二年或は云ふ五月尼子氏の遺臣山中幸盛立原之綱等誠欠の子勝久を奉して舊土を恢復せんと圖る乃ち出雲に入り富田城を攻む捷たす轉して伯耆に入る又利あらずして走る

第五 織田豊臣時代

秀吉の進軍

織田信長既に京畿を平定し進て四方を略せんと欲し明智光秀をして山

陰道を征せしむ光秀丹波を討ち戦未た終らす信長別に羽柴秀吉をして播磨に居り山陰山陽を經略せしむ天正八年正月秀吉播磨より但馬を經て因幡に入り先つ若櫻城八頭を拔て根據とし荒木平太夫をして之を守らしめ自ら氣多郡今氣多郡に出で鹿野城を取り磯部兵部大輔を智頭郡用ケ瀬景石城に居らしめ以て三方相連繫す當時鹿野城は毛利氏に屬して鳥取諸將士の質子を留め置きたりき秀吉乃ち龜井茲矩武田源三郎赤井某の三人をして之を守らしめ垣屋宗簡を巨濃郡今岩手郡浦富桐山城に置き以て海路を扼して但馬の來襲に備へしむ秀吉又布施城主山名豊國を誘致す

初め豊國天正元年を以て因幡の守護となりしか尼子勝久山中幸盛等と相結ひて同六年八月叛臣武田高信を討て之を殺す高信は常信の子にして永祿中山名氏に畔きて鳥取城を奪ひ誠通の二子を弑して殆んど國の大半を奪略せり是に於て誅せらる同三年春勝久幸盛等來て若櫻城を攻取し私郡城を略す秋に至り吉川元春因幡に入り勝久幸盛等を撃つ豊國

乃ち毛利氏に屬す是に至て豊國又秀吉の誘致に應じて毛利氏に背く重臣森下道祐中村春次等異圖を抱き豊國の常操なきを名とし豊國を逐ふ豊國但馬に走る衆議して山名豊弘を推して守護代となす毛利氏聞きて更に家臣牛尾春重をして鳥取城を鎮護せしむ春重桐山城を攻め矢に中りて戦死す九年毛利氏其族將吉川經家をして入て鳥取城を守らしむ

鳥取城の陥落

鳥取城は後方高山を負ひ西北海を控へ山下袋川あり地險に城堅く之に據る以て一國を制すへし毛利氏既に族將經家をして之を守らしむ秀吉乃ち之を攻畧せんと欲し天正九年六月兵三萬或ハ云を將て播磨を發して戸倉を踰へ八東郡今八に入り若櫻通私都に至り笑堂を経て法美郡今美三代寺に入る更に國府より岩倉の隘谷を歴て瀧山今に出て小西谷より鳥取城の東南峯に上り地形を相して陣を城側の帝釋山に張る之を本營として山頂方五十間を開拓し繞らすに防堤を以てし上に垣牆を築き空渾を山麓に鑿ち鹿柴を結へり各所には兵營を置き守衛甚た嚴なり而し

て部下の諸將をして鳥取城を包圍せしむ乃ち東は大日谷より栗谷今楠谷今雁金山今角寺今圓護寺今濱坂丸山を経て西湊川今路川に至るまで陣營葦布し幾と寸隙を剩さす而して別に杉原家次を三島に淺野長政を其西方に吉川平助を辨天島に置き湊川の港口を扼して海路敵兵の來援に備へし包圍數月十月に至り雁金山城陥り鳥取本城孤立す而して兵糧匱乏し士卒飢て起つ能はざるに至る經家以下諸將自殺し城陥る此役加藤清正年甫て十八攻圍の軍に在り頗る戦功ありしと云ふ鳥取既に陥る徳吉大崎の諸城風を望て皆降る高草郡今丸山城主吉岡定勝別に防已尾今に城つきて之に據り堅守して降らす秀吉進て三津崎今村末に陣す定勝迎へ撃て多賀文藏を殺し秀吉の馬標を奪ふ秀吉怒り急に之を撃つ利あらず因て龜井茲矩を留めて之を圍ましむること旬日城中糧盡き支ふること能はず定勝夜遁る

秀吉伯耆に入る

是より先き伯耆に在ては南條氏世々羽衣石の城主たりしか五代宗勝に

至り尼子經久の爲に滅さる天文中毛利氏の勢力を藉りて再び羽衣石に
還り制を毛利氏に受く子元續に至り尼高の城主杉原盛重と快からず織
田氏の京畿にありて其の勢日に熾なるを見て竊に謀て小嶋山名諸氏と
共に款を秀吉に通す家臣山田直方諫むれども聽かず益々城壘を修治す
天正七年七月吉川元春兵壹萬參千を率ひて來り攻め橋津馬山に陣し其
子元長をして田尻城長瀬村を抜かしめ先鋒杉原盛重と共に進て羽衣
石を攻む城兵堅に據て善く拒く元春乃ち元長をして城後の栗尾谷より
進襲せしむ元續等支へす因幡に走る八月元續等援を秀吉に請ひ兵參千
を糾合して伯耆に入り復た舊城を奪取す東伯大に擾る元春憤激八年八
月遂に大舉して又來り攻む元續等戰に利あらずして退く元春亦故あり
て軍を班す九年六月秀吉の鳥取城を攻るや其八月元春又元長盛重を遣
はし羽衣石長和田を攻めしむ元續等防戦し殺傷相當る元長退て元春の
來援を待つ會々鳥取城陥る秀吉乃ち兵三萬を率て鏡畑高に入り次て
進て伯耆に至り馬山の前面なる高山に陣し以て元春の陣勢を下瞰す元

春又進て馬山に陣す兵六千と稱す馬山は橋津にあり一名根岳と稱す山
勢平圓にして湖山を襟帶し後方大川を控へ畿に一橋を通す元春因て舟
梁を絶ち示すに必死を以てす相持すること三日秀吉時季の風雪に向ふ
を虞り元續宗清等を戒め堅守して出るなからしむ乃ち食糧器具を給し
軍を擧て播磨に歸る元春亦火を途次の民家に放ち軍を引て安藝に歸る
十年二月元春又因幡を回復せんと欲し杉原景盛をして大崎を伐たしむ
四月秀吉備中に入る六月秀吉輝元と和し東伯三郡を南條氏に屬せしむ
伯耆始て安し天正の役因伯兩州の地屢兵馬に蹂躪せられ有名神社佛
閣等爲に多く焚滅民家も亦荒殘を極む之を嚮きの伯耆の大永敗時に比
す幾と大差なかりきと云ふ

第六 慶長以後の封土易置並池田光仲

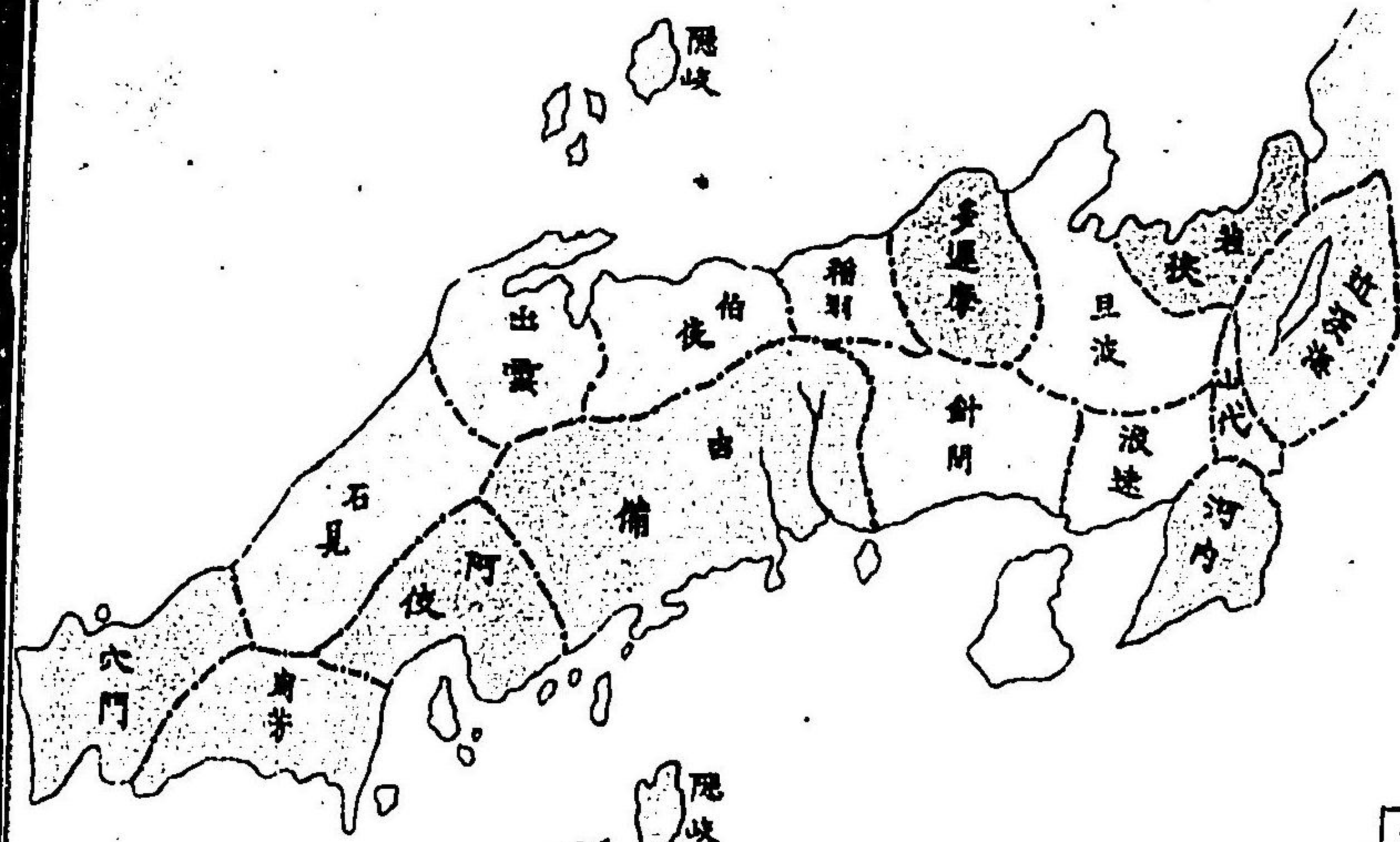
豊臣秀吉既に薨す幾くもなく關ヶ原の軍起る因伯兩州の城主宮部元房の坊
南條元忠の子元續の子小嶋元晴吉川廣家等皆西軍に應ず鹿野城主龜井茲矩の

獨り東軍に屬す關原平定後西屬の諸將皆罪を徳川家康に得て他に移さる
茲矩特に命を受けて鳥取城を鎮撫す宮部氏の遺臣等堅く城を守りて降らす
に茲矩に加賜するに高草一郡を以てし依然鹿野に居らしむ伯耆を擧げ中
村一氏に與へ以て米子城に治せしむ慶長十四年五月其の子一忠卒す子な
し國除らる翌年加藤貞泰を米子に關一政を黒坂に封す是より先き慶長七
年池田長吉に因幡の地六萬石を賜ひ鳥取に居らしむ長吉鳥取城を經營擴
張すること數年元和二年池田光政因幡二國の大守に封せらるゝに及て二
國の城主皆封を他國に轉す光政入國の後城市を新設せんとするの志あり
地を相すれども得ず仍て鳥取城を改修す寛永九年八月光政備前岡山に移
封せられ從弟光仲岡山より入りて因幡二州を領す

池田光仲

池田光仲幼名勝五郎備前藩主忠雄の長子なり系源氏に出つ頼光五世の
孫泰政始て池田氏を稱す其後裔九郎教依なる者あり楠正行遺腹の子を

上古地圖



大承年間地圖



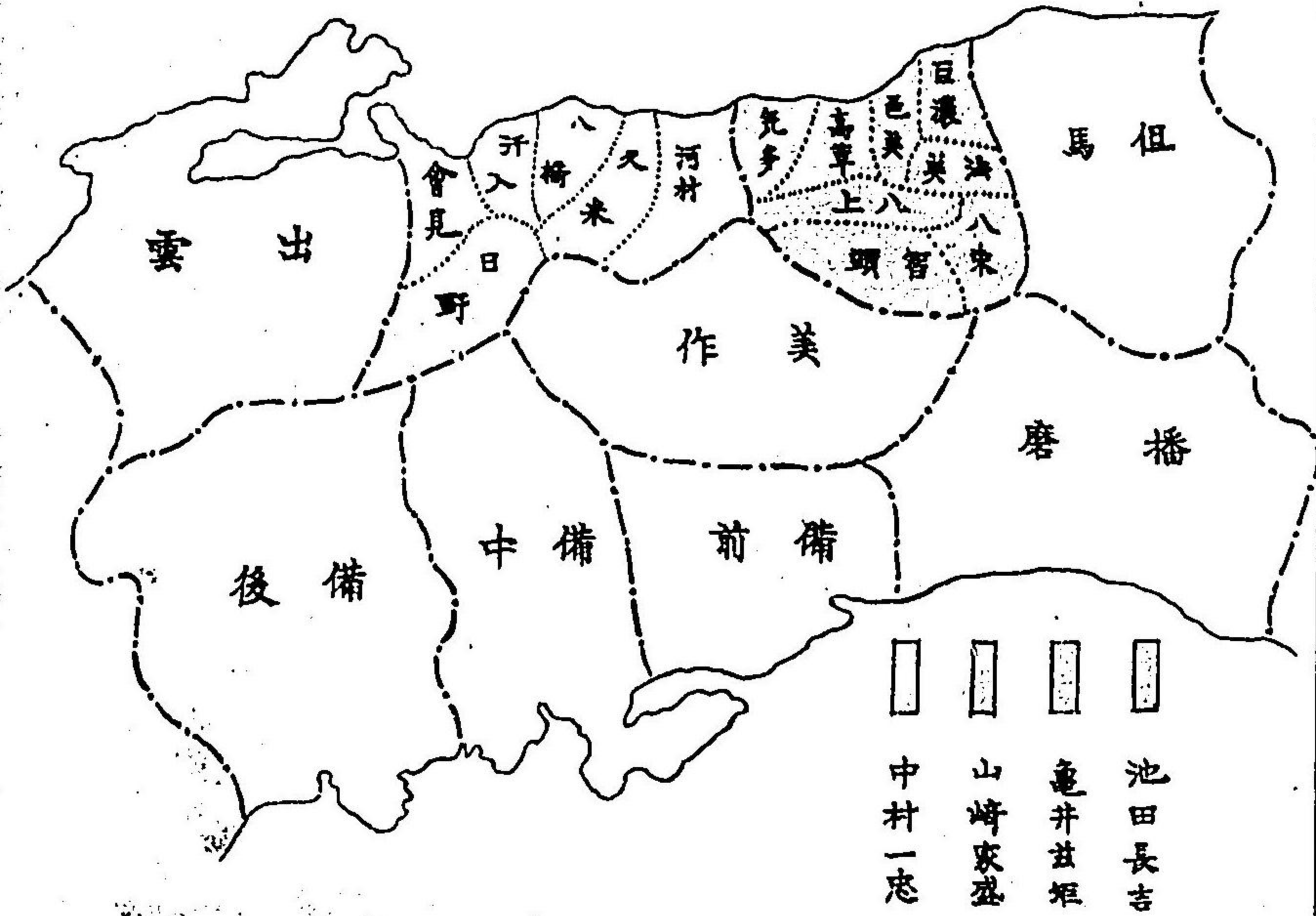
天文年間地圖



天正年間地圖



慶長移封地圖
元和以後因替替者
池田光仲領地上下



- 池田長吉
- 龜井茲矩
- 山崎家盛
- 中村一忠

養ひて嗣となす之を兵庫頭教正と云ふ世々攝津に居る數代の後恒利に至り尾張に移る其の子信輝勝入齋と號す織田信長に仕ふ豪勇倫を絶す天正中豊臣氏に屬して長湫に戦死す子輝政徳川氏に従ひ攝津に歸る家康爲に其女を妻はす後播磨淡路を領し姫路に治す武勳世を掩ふ正三位參議に進む長子利隆嗣く後二男忠繼備前に利隆の長子光政因伯二州に封せらる忠繼早世し弟忠繼繼く之を光仲の父となす光仲寛永七年六月十八日を以て江戸に生る母豊峰須賀至鎮の女なり同九年三歳にして家を嗣ぎ封を因伯二國に移さる年幼なるを以て老臣を派して國務を行はしむ十五年十二月從四位下に叙し侍從兼相摸守に任し始て封に就き以て藩政を覽る正保二年幕旨に依り徳川頼宣の二女茶々子を娶る承應二年左近衛少將に進む寛文元年軍式を定め荒尾内匠介に米子城を荒尾圓書に倉吉町を津田内記に八橋村を鞆民部大輔に浦富村を萩兵部大輔に船岡村を福田丹波に黒坂宿を守衛せしめ家老番頭物頭に統卒を配當す貞享三年國を長子綱清に譲りて退隠し泉石の間に優遊す貞享二年七

月次子仲澄に貳萬五千石後三萬石を元祿十三年三子清定に壹萬五千石を分封す之を東西兩御館と稱す元祿六年七月病を以て鳥取城に卒す年六十四法諡して興禪院殿俊翁義剛大居士と云ふ光仲身體魁偉力人に絶す深沈にして大度あり書を能くし歌道を鳥丸資愛に受く名吟少からす入國の初め紀綱未だ立たず民心猶安からざるに當りて専ら意を藩治に用ひ城閣を修め市街を整へ文教を興し武備を定め士を愛し民を養ふ恩威並ひ行はれ上下心服せり常時名臣輩出乾兵部の剛直秋田仁兵衛伴九郎兵衛の至誠岡村慈温の德行武宮嘉兵衛の武術等其の最たり光仲又心を殖産に用ふ因幡元と鯉魚を産せず光仲因て之を備前より輸して湖山池及其他の池川に放たしむ因幡の鯉魚ある此に基くと云ふ又た鳥取郊外に松樹を植へ一は以て軍防に供し一は以て洪水の豫防に充て爾後貳百餘年藩鎮の基礎光仲に由りて立ち以て慶徳に至れり今に及ぶまで國民藩祖として長く其の餘徳を仰ぐ

海邊眺望

池田光仲

海原や浪路の末をなかむれば

くもにこき入る沖のつりふね

霧 旅

峯は雲ふもとは霧のたちこめて

ゆきこそまよへ足からのやま

第七 維新の活動人才の輩出並池田慶徳

慶徳國に入て以來藩士を奨励して力を文武二道に致さしめ且つ忠孝節義を以て一藩を率ふ此に於て文武の人才輩出し従て國事に盡瘁する者尠からず初め慶徳の將に水戸を去て因幡に入らんとするや其父齊昭之に謂て曰く汝鳥取に至る宜しく荒尾小八郎を父視して諸般の施設之に諮議すべしと小八郎は志摩守なり才幹を以て聞ふ慶徳國に就くの後久からずして外交問題は天下の志士を驅て幕府の基礎を動搖せしむるの導火となり諸藩物情安からず我鳥取藩の如き亦た勤王志士の奮起に伴ひて姑息黨の對抗妨害も亦た固より尠からず此時に當て伊丹甚木夫田村貞彦羽原傳藏和

田邦之助、神戸源内、川崎政之丞、等英才を以て鳴り堀庄次郎、正城、安達、清風、宮原、景山、龍巖、佐善、元立、土肥、實匡、山内、衛等文名を以て鳴り、飯田、年平、中島、宜門、小谷、古蔭等歌名を以て鳴る志士の活動としては、仙石、隆明、か足利三世の木像を斬て幕吏と闘死したるか如き石川、貞元、尼崎、孝基、か南山の義舉に加はりて刑死せられたるか如き河田、景興、加須、屋武、文佐、善元、立瀬、谷武、貞永、見明、久新、庄貞、老奥、田信、實鹽、川知行、詮、間敬、鋪河、田政、直伊、吹正、健山、口元、次、太田、定鋪、中尾、元長、中井、正晴、大西、清太、足立、正聲、加藤、忠益、瀧谷、成年、清水、忠武、吉岡、保壽、吉田、保實の二十二人か京都本國寺なる藩主の旅館に入りて君側を清め繼て應司三條の兩卿に上書して因幡勤王の誠意を徹底したるか如き沖剛、介、増井、熊太か監察堀庄次郎を襲殺して蕃法に伏したるか如き高濱、正義、大谷、顯忠か上書事を論して自刃したるか如き村川、與一、右衛門か義兵を西伯に擧げて出雲安來の十神山に據り以て松江を攻陥せんとして同族人に殺されし等の如き之を要するに因幡藩士か毀譽利害を忘れて一死國に殉せんと欲したるの事實は歴々後人を感じしむるに餘あり明治元年伏見

鳥羽の戦既に開け京師にある我藩兵は既に官軍に加はりて戦功を建てつつあるに拘はらず我藩廳の方針未だ決せざる者あり參政姑息事に處せんとす此時に方て田村貞彦年既に老ひて事に與らざりしか報を聞て蹶起直に登城して慶徳に謁し説くに大義を以てす慶徳直に參政を斥け藩論を一定して益々力を王事に效す

貞彦通稱平四郎後甚左衛門と改め復齋と號す貞彦深沈にして寡言大度あり曾て要職に當る宿弊を除き冗費を去り百事頓に革まる大事に處し大節に臨んで毅然動かす蓋し國家柱石の材なり明治八年享年七十四を以て病歿せり

明治元年我藩兵既に幕兵と京都伏見淀の各地に奮戦して功あり二月征東の師起るに及て我兵進て江戸上野に入り黒門を攻て之を陥る追撃最も力む次て下谷徒士町の敵を掃討す河田景興總督府の參謀たり轉して野州に入り宇都宮を攻め奮戦して又之を陥る五月小田原城を攻陥し白河盤城平等に轉戦し進て會津に逼る會津陥る我藩唯武進總督府使者たり受降使と

して城に入る参謀河田景興、藩將和田信美、鞆殿長、大砲隊長近藤孝敏、愛洲貞允、天野祐治、永田定伸等、曉勇諸軍に附ゆ中、井範五郎、小田原城攻撃に奮戦して、痘る此役我藩將士殊勳あり支封池田徳定の兵亦た勇武功を樹つ官軍凱旋の後、朝廷慶徳に三萬石を加賞す以下賞功差あり景興後諸官に歴任し特旨を以て華族に列せられ子爵を授けらる明治三十年十月病に罹り特に従二位勳一等に叙せらるる十二日遂に起たす年七十

池田慶徳

池田慶徳は鳥取最後の城主なり字は子名省山と號す初名昭徳小字は五郎慶實に水戸藩主徳川齊昭の第五子なり天保六年を以て生る嘉永三年入りて池田氏を嗣ぐ慶徳幼より英邁にして勤王の志厚く學和漢を兼ね和歌に長し書に巧みなり頗る心を政事に留む非薄自ら奉し一藩を率ゆるに節儉の道を以てす藩士を奨励して文武の業に勤めしめ學費を修理し學制を更定して國學兵學禮法數學等の諸科を設け毎月十二次儒員に經書を講せしめ更に演武場を設けて藩の子弟に武技を習はしめ又小文

武場を置き卒をして文武の道を修めしむ或は養老の典を挙げ或は孝子節婦義僕を表彰し以て舊弊を改革し一藩を鼓舞す藩政大に振ふ嘉永六年米艦浦賀に来るや幕命によりて本牧を守る安政元年六月藩士に命して國政の可否海防の意見を進言せしめ投書櫃を學校に設け大に言路を開く十一月更に品川第四砲墩を守備す二年二月封内の民に貸す所の米及買牛資金の利子を減し稼穡を奨励し又土地の境界を正し其の肥瘠を検覈し郡村の盛衰を視察し凡そ民の利を興し害を除くに於て心を致さる莫し三年五月反射爐を伯耆八橋郡瀬戸村に築きて大砲を鑄る十二月左近衛少將に任す四年屢々幕府に上書して米使の登營を止めんことを請ひ且つ外交の事は宜しく之を朝廷に奏し之を大臣に諮り之を親藩列藩に問ふて而る後に決行すべきを論し更に制度を改め舊習を去り節儉を務め武備を張り以て上 皇室を尊ひ外夷を攘ふべきを論す議論剴切頗る時聽を動かす五年五月名和長年の碑を伯耆汗入郡坪田村氏殿神社洞畔に建つ六年更に命を以て大阪目標山を警衛す八月大に藩の軍制を

改革す六年正月封内海岸の要處に砲墩を築く七月屯田の制を設け諸士の子弟を募り俸を與へて伯耆久米郡明高村の曠野を開かしむ是より先き藩營尙徳館に聖廟を設け春秋釋奠を舉げしか此年十一月に至り更に武神祠を建て以て武藝植命武内宿禰を祀る文久元年江戸藩邸に更に學校を建て文武場を設く十二月左近衛中將に遷る二年薩長兩藩主朝勤す慶徳亦た入勤せんとして果さず目標山を巡視して歸國す既にして勅使東下し攘夷の期を促すと聞き幕府に忠告するに朝旨を奉し人心を一にし親藩をして入朝謝罪せしめ所司代を選任し親藩をして禁闕を守らしめ諸侯參勤の期を緩め妻孥を國に返へし人才を登庸し政綱を綜攬すへきこと等の八事を以てす十月入京す 天皇召し見る賜ふに天盃を以てし且つ諭すに勅使再び東下す因て宜しく又た東下して公武の間に周旋し以て微旨を貫徹するに力むへきを以てし且つ命するに藩兵を以て帝都を警衛すへきを以てす二條右大臣亦た關白の内旨を傳ふ慶徳乃ち先づ書を後見一橋慶喜及總裁松平春嶽に送りて須らく微旨を體認して勅

使に奉答すへく並に二人同心戮力以て將軍を輔翼すへきを説く遂に執政鶴殿大隅中老黒田日向番頭荒尾隼人をして京都を守護せしめ十一日京都を發して江戸に至り松平春嶽老中井上河内守と會して告ぐるに聖旨の在る所及關白の内旨を以てす次て東下中の兩勅使を訪ひ其間に幹旋する所あり既にして春嶽及松平容保山内容堂と會して時事を議す慶喜疾と稱して出てす慶徳行きて之に面し具さに京師の事情を陳し出て、事を視るへきを勸む聽かず慶徳乃ち春嶽容保容堂等と所々に會し幕府をして速に朝命を奉さしめんと圖る慶喜固く前議を執りて出てす慶徳復た其の邸に至りて勸告最も力むれども効なし議論頗る激烈慶徳遂に衣を拂て辭し去る後數日將軍使を遣はし強て慶喜を起たしめ以て勅旨に奉答す十二月將軍慶徳を便殿に召し勞を謝し物を賜ふ因て歸京復命す三年正月三日天皇に拜謁す天皇其の周旋の勞を賞し賜ふに御盃及物を以てす翌日勅を受けて大阪に至り其の陣營及目標山を検す又た老中小笠原圖書頭と乗船して海岸を巡視し砲臺を目標山に設け土墩を近

傍敷所に築き陣營地を増さんことを建議す特に浮浪の徒京師に集り横議暴行甚しく幕吏其の處置に苦しみ因て慶徳の入京を促かす聽かず幕吏更に臺命を傳て曰く將軍不日上洛せんす故に特に卿を召すと慶徳因て即日上京す二月朝廷に上書して投書櫃を關白邸若くは學習院に置んことを請ふ時に生麥事件あり幕府沿海の守備を嚴にす朝廷亦た英艦の大坂に來らんことを慮り慶徳を大阪海軍假總督とす因て大阪に至り軍事を督す五月又た中立賣門の警衛を命せらる六月英艦目標山附近の海岸に泊す藩兵之を砲撃す砲丸達せず英艦咎めずして去る幕府之を詰る慶徳辨するに攘夷の期既に布告せられ我亦海軍假總督の朝命を拜し居れるを以てす幕府復た詰る能はず朝廷乃ち我將士を賞勵する所あり應司關白慶徳に問ふに親征の可否を以てす慶徳對へて曰く親征は事重大なり時局に於て恐くは可ならざらん攘夷の責は専ら將軍にあり宜しく之を責むへしと且つ論つるに監察使を諸道に派し以て朝意を一般に知らしむへきを以てす慶徳既に幕府をして攘夷の實を舉げしめんと欲

す因て往復周旋太た力む之に繼て一旦親征に決せし朝議も亦た中廢し形勢の變化は七卿をして長州に走るを已むなからしめたり此時に當て慶徳國に盡すの心事益々切に自ら持する亦た頗る重し明治元年幕兵京師を犯す我藩兵薩長以下四藩と力を戮せて賊を討つ次て西園寺鎮撫使を佐けて山陰道を徇へ姫路城を略す東征の役我藩兵各所に進戦して頗る功を樹つ九月慶徳參朝天皇に謁す軍資金二萬兩を賜はる此役我藩兵を出すこと前後二千二百人大小二十餘職職死者六十五名我兵振旅の後慶徳乃ち祭を設けて戦死者を祀り且つ軍功を賞す二年正月慶徳藩籍を奉還す六月乃ち藩知事に任せらる二月權中納言に進み從二位に叙し議定職を拜す五月轉して麩香間祇候に拜せらる六月朝廷軍功を賞し慶徳に賜ふに祿參萬石を以てす三年五月招魂社を濱坂村に建つ五年五月家を子輝知に譲り病を養ふ六年皇城火あり入觀して天機を伺ひ金五千圓を献して其の造營費に充つ八年華族會館副議長となり九年華族部長局副部長となる十年西南の役起るに及び鳥取に入りて舊臣を奨勵し壯

兵を募り又た公債證書を以て國立銀行を設立すへきを諭す八月病を以て京師に薨す年四十三天皇宸悼し賜ひ正二位を贈らる

松上 藤

池田 慶徳

老松もわか紫のもとゆひと

ふしの花ふさはなかつらせり

天長節の御宴に菊滿庭といふ

ことを

君か代の八千代を千重にかさねつゝ

にはもせにさく八重のしら菊

維新の業既に成る朝廷士を諸藩に徴す鳥取藩にては門脇重綾土肥實匡松田道之宮原積北垣國道沖守固足立正聲伊王野垣等徴士として名あり重綾彈正臺の要職を経て教部大丞に至る明治六年遽に病て歿す維新後積高山縣に實匡山梨縣に垣久美濱縣に新貞老和川縣に令たり正聲亦當時濱田縣令たり後諸官に歴任し特旨を以て男爵を授けらる國道亦諸要職を経て聲

名朝野に重し早く男爵を授けらる道之京都府判事滋賀縣令を経て内務大書記官となり内務卿大久保利通の信任する所となり繼て三度琉球に航して廢藩置縣の事に功あり後東京府知事となり十五年七月病て歿す朝野之を惜む山内衛も亦維新後太政官に辦事たり

第八 文教沿革の概要

尙徳館設立前後の儒學者

鳥取藩は古來武道の隆盛を以て其の名諸藩に聞へ異能拔群の武士世々踵を接して輩出せり従て文運の興起或は武道の隆盛に及はざるの感あり然れども名家の輩出亦た尠からず抑も寛永九年池田家の封國以來三十四年間は全國猶ほ尙武氣風の旺盛なる時代に屬し文運の開發も未だ十分ならざりしに拘らず而も鳥取藩にては此の際既に小泉俊玄小泉友賢父子の如きあり伊藤丈庵富田玄真杉村壽全の如きあり何れも皆詩文の場に馳驅して絢章絢句人を驚かすに足るものあり此前後谷一齋山内

玄東共に土佐人を以て因幡藩に招聘せられしを見れば當時我藩か重きを文運の擴張に置きしを見るへし而して一齋は江戸藩邸に在りしも玄東は鳥取に入りて文學を指導す其の詩の稻葉民談記に録存せらるゝもの亦數篇に及へり此後元祿年中に至りて辻權之丞伊藤仁齋の高弟を以て藩の儒官に任せらる權之丞詩文に敏捷にして儒行高く東涯等皆之を重せり元祿九年朝鮮人か赤荷に來舶せしに當り藩廳か特に權之丞を遣はして應接せしめしのみならず其の嗣子も亦た伊藤門下の士にして儒員に列せられしを見れば此時代に於ける藩内の學風か一般に重きを堀河派に置き居りしを想知すへし然れども堀河派の徒重きを操行に置きて深く心を文墨に注かす從て當時未だ一般に文筆の燦爛たるものなかりしか如し後安藤箕山出づるに及んで其天資聰敏にして氣尚恍惚に脚朱門を躡まざるの操行を以て講經の傍ら大に力を詩文に用ひ以て後進を誘導す堀省齋伊良子大洲等皆其門に出づ鳥取藩の文學は蓋し之よりして大に觀るべきものあるを致せり箕山名は章字は文憲天明元年四

月を以て歿す生前高山彦九郎と相識れりと云ふ箕山時代と後先して箕浦靖山あり靖山名は世亮字は長孺徳高く道積み闊藩皆之を仰て宿徳とす寶曆六年鳥取藩始て學校を興す尙徳館是なり其の施設靖山の力に出るもの多しと稱す侍講となり學職を綜ふるもの三十五年享和三年八月歿す蓋し是より先き鳥取藩には既に堀河氏の學派あり箕山の出るに及て護國派の學風も亦た之よりして漸くに發牙す靖山藩費の建設に與りて力を致し以て藩學の根據を固ふせり之と前後して河田東岡出で其剛健の資博通の才明快の智を以て力を易學兵學に專にし學界の別天地を開拓して才名を天下に馳せり

河田東岡名は孝成字は子行通稱八助又關助と稱す後更に十右衛門と改む京師に遊ひて三宅尙齋に學ひ次て心を東涯に傾け又徂徠に歸向す既にして其説を疑ひ去て一家言を立つ其周易新疏を著はすや才名噴々海内推して七易學者の一となす文化中歿す著す所周易新疏の外七書正解易倚易道小成稿論語新疏孝經新疏等あり後世安藤箕山箕浦靖山河田東

岡三人を推して因幡藩の三傑となす

東岡の子希山、靖山の子節山、節山の子確乎皆學名あり繼て堀省齋、伊良子大洲、建部樸齋の三人並ひ出るに及て鳥取藩の文學は幾んど高潮の時期に入れり而て三人義兄弟の縁故あり即樸齋の妻は省齋の妹にして大洲の妻は又其妹なり

堀省齋名は徵字文献初め莊藏と稱し後玄溪と改む性聰敏にして學を好み専ら聖道を講明するを以て任となす頗る辭藻に工なり其詩淳雅敦厚六朝以上に溯る又書を能くす初め鳥取藩人中村元儀明人の所傳を得書道を以て家を成す省齋就て其法を得之を建部樸齋に傳ふ樸齋又之を明石榑溪に傳ふ省齋文化三年を以て病て歿す

伊良子大洲名は憲字は子典幼名吉太郎初め彌左衛門と稱し後中藏と改む業を安藤箕山に受け後易を河田東岡に學ぶ精を文學に專にし好て事理を論す周公仲尼の道を祖述するを以て自ら任す文を爲ぐる雄渾瑰麗にして詩も亦雄宕氣を以て行る著す所大洲集四十七士論等あり文政十

二年九月病て歿す

建部樸齋名は嘉字は豚夫又狄肉山人と號す世々支封池田氏に仕ふ人となり豪宕好て氣を以て世を凌ぎ敢て書を讀ます既にして飄然節を折て力を讀書に專にす獨學自ら勵む遂に大名を成す世省齋大洲と並稱して因幡の三大家となせり樸齋詩を善くし書に工に又書を能くす鳥取藩の南宗書ある蓋し樸齋を以て嚆矢とす其詩剛健頗る霸氣あり天保九年四月歿す蓋し省齋大洲樸齋の三人此の如く姻戚の關係あり時を同ふして並ひ出て而して省齋大洲と又同門の誼あり樸齋も亦二者の風に激せられて獨學名を成せしと雖も然れども省齋は心を宋學に寄せたるもの、如く大洲は頗る護國に傾注す而して樸齋は經義を仁齋に取りて文字を李王に倣へり趣向の同しからざる此の如くにして而して文壇に鼎立して互に文運の鼓吹に務む鳥取文學は此の如くにして大に開發せられたり

此時に先んして支封池田冠山尊貴の身を以て頗る力を文學に專にす寛

政中幕政一新して文武賢能の士彙進す而して當時柳間詰諸侯中文學の名あるもの三人冠山及毛利高標市橋長昭之なり
 池田冠山名は定常字は君倫縫殿頭と稱す人となり寡慾にして他に嗜好なし唯心を墳籍に耽けり古今和漢の書博通せざるなく尤も詞翰に長す致仕後著述を以て娛となし地理物産に至る迄研究する所あり旁ら意を佛典に注く坦懷城壁なく碩儒鴻匠より一技一能の士に至るまで貴賤を問はず之を近けて布衣交をなす聲名世に高し文政十二年七月病て江戸藩邸に歿す冠山既に儒士を重んし人を愛す樸齋の如き頗る其知を受く曾て命を奉して漢土史畧を撰し之を上る堀省齋子なし冠山其愛する所の侍臣小原金之丞をして入て堀氏を繼かしむ之を靜軒となす冠山人となり此の如し鳥取藩文運の漸次旺盛を來たせし亦偶然ならずと謂ふ

寛政中鳥取藩又谷百年たひやねんを招聘す百年諛駁の人名は世尊字は士達經典餘師の著を以て名を天下に馳す百年博學多能經史百家より曆數、輜畧、倭歌

俗諸農圃醫に至る迄通曉せざるなく書は諸體を兼ね武は衆技を綜ふ因幡藩の砲術に荻野流あるは實に百年に始れり著す所經典餘師の外校正七書正文、天朝史鑑、天朝史略、鬼神論等あり天保二年五月鳥取に歿せり此より以後藩の學職には蘆川重周あり大洲門下には柴田温あり百年門下には二宮東郭等あり其他人才興起せしも繼て池田慶徳封に入り以て尙徳館を擴張するに及んで一藩風に嚮ひ學風振起俊才英士相踵て輩出するに至れり

花外聽鐘

小泉 俊 玄

遊人從此思悠然、花外聞鐘斜日前、更向殘紅吟賞看、杵聲月白暮樓天。

山驛早行

小泉 友 賢

山驛信馬之、味爽路迷岐、殘月照三峽、曙雲掩九巖、驛亭無客過、崖樹有猿悲、幽湖多陰霧、晨報上較遲。

訪隱者

伊藤 丈 庵

諳誦黃庭經、送年閒、携青竹杖、望泉自嫌塵世汚、藤帽故向山中散髮眠。

歲旦

春雨如酥草木濃。乾坤無我亦無公。累年落魄強爲客。愛樂吹分一陣風。

聯句

山内 玄東
辻 晚庵

寺古龍峰寺橋新鹿野橋

至日

安藤 箕山

至日高樓一登望。細雨濛々萬頃波。臥病湖邊梅藥綻。憶家城上雁聲過。舊游三歲連琴酒。初服何時裁。菱荷淹留不必關。羈絆自是山河勝景多。

欠題

箕浦 靖山

城東歸去問風光。竹柏依然一草堂。堪憶前峰垂曙處。猶懸殘月照禪床。和

和伊子成

堀 省齋

衙門寂歷鎖南郊。懶向人間作解嘲。畫靜嶺頭雲出岫。夜幽林外月懸梢。溪邊自得猿兼鶴。頰上時逢由與巢。百載滄桑如大夢。虛名何若德音膠。

雜詩

伊良 子大洲

曾聞鷄口羞牛後。莫笑丈夫圖寸功。玄豹毛枯甘隱霧。大鵬翼病懶搏風。壺中有

酒時傾盡。琴上無絲獨撫桐。百歲行藏唯自識。升沈不必問天公。

琵琶湖

建部 樸齋

澤國蒼茫接帝洲。大湖渺々啣空流。雲晴北越懸山嶽。水盡東江連洛洲。雲夢秋風激昂浪。岳陽晚照去來舟。此來坐見忘機者。猶思舊居伴海鷗。

視銘

芝 田 温

石山上聳。琵琶湖下連。峰頭波底鏡影俱圓。維昔淑女。寫懷詞篇。紫泓儀得。雙月永全。

至鹿野作

二宮 東 郭

崎嶇一路冒泥行。宿雨朝來尙未晴。靈鷲峰高雲合色。跋提河漲石成聲。可知邦內鷄衣樂。已見田間鶴髮迎。今日從遊良可賦。文辭慙不似長鄉。

尙德館設立後の學政振起

尙德館設立に當り箕浦靖山が與て力ありし事は既に記せるが如し當時(寶曆六年)藩主池田重寛學風の振起せざるへからざるを察し始て學問所を江崎門内(現今師範學校地)に經始し同年七月特に支封の醫官箕浦世亮

を抽んで、文學師範役となし學館奉行を兼ね費堂設立の事務を掌らしむ翌年一月館成り二月朔日宇倍賀露二神を勸請し開館式を行ふ重寛尙徳の二字を書して之を楹間に掲げしむ尙徳館の名蓋し之より始まること云ふ同館は士列以上の子弟十三歳に達したる者自由に入學を得せしめ専ら讀書を教授し生徒の勤惰を録せしむ九月藩吏の出館開義の制を定め爾後漸次學館奉行及教授員を増加せり明和五年九月射場及禮法科を設置す明和以後學事漸く進み又山田仙藏伊藤千里等を儒臣に列するに及び儒家其員を増し侍講侍讀は皆儒臣及近臣等を以て之に充つるに至れり爾來或は教官を奨勵し或は之を拔擢して官を授け或は學士に祿米を供する等文教振起を圖るの策到らざるなく時に藩主親しく學館に臨み執政以下皆列席して經史の講義を聴くあり從て文教漸く盛ならんとせしに享保五年鳥取の大火に累せられて學館盡く烏有に歸せり災後假に讀書所を設け後文政十一年に至り構造始て舊に復せしも文教復た振はさりき嘉永三年藩主慶徳水戸より入りて池田氏を嗣くに及び弘道館

の例に倣ひて學館を修理し文場を區分して大小二場とし士列以上の子弟は必ず入學せしめ卒族は長子を入學せしむべき旨を達し又從來藩吏入館講義聽聞の制ありしを改め藩士一同入館開義の事とし演武場を増設す武場は之を分つに東西南北及番號を以てし廻廓に依りて之を連接し各師範家をして其門生を率ひ交互に入りて武技を講せしむ是に於て文教武道共に大に振起し來り生徒日に進み全く舊態を一新せり爾來尙徳館の名四方に喧傳し劍客槍人の各地に游歴するもの必ず本館に來りて武技を較するに至る此の如くにして經營數年安政の末に至り學政大に整ふ乃ち碑を建て其全備を表し且つ文武の偏廢すへからざるを示す次で萬延文久を歴て學館の設備益々擴張せられ乃ち兵學、數字、國學の數科を設け砲術、馬術の兩場を開き別に游泳場を小松原に置き本館の監督に屬せしむ其の他孔子廟及宇倍賀露の二社を改築し毎年正月始業の日を以て拜賀の式を行ふ又管理の方法を定め館内を二部に大別して大小文武場となし各部に取締役を置て之を主管せしめ大文場は庶士以上の

講習場とし學生を四大部に分ち備員一名を各大部の長とし一大部を更に六小部に分ち一小部に教授一名を置き以て授業訓諭を掌らしむ小文場は別に部を分たす備員一名の下に教授數名を置けり又萬延元年學齡兒童を八歳以上十五歳以下とし十二歳迄は文藝を主とし之に武術一藝を課し十三歳以上は二藝を修むることを許し文學篤志の者は年齢に拘らず校中に在て修業せしめ又別に舍寮を置き以て生徒の優秀なる者には公費を以て寄宿修業せしむるの制を設けたり此の如く嘉永以後の學校改正擴張に由り生徒大に増加し大小文場通學生は一千餘名に達し其の他習字、算法、習禮醫學等の諸科生徒亦一千三百餘名に上れり武場生徒は家老以下士分は大武場に徒士以下苗字の者は小武場にて修業すへき制なりしも各師範家の門弟なるを以て其の數幾くなりしや知るへからず

尙徳館設立前後に於ては鳥取藩には種々の學風あり學者各其見る所を主張して相一致せざりしも尙徳館の基礎大に定まりし以後は他の學風

次第に振はす學館の振興に伴ひて宋學の勢力大に勃興し來りしもの、如し即本館には講釋は古來の註說に依り流派異見を立て是非を争ふ間敷旨を揭示せられ流派の紛糾を防きたり慶徳か學館を擴張し文教を振起するに當り大に與て力ありしは實に堀熙明ひろあきら正瑞まさみ薰等とす

堀熙明は靜軒の子にして即省齋の孫なり字は子光敦齋と號す通稱庄次郎人となり俗達にして峻勵才氣橫溢豪氣世を壓す文を善くし詩に工に議論風生人敢て當るなし慶徳の知遇を受け擢んでられて學校奉行となり尙徳館擴張文學の振興に就て屢意見を慶徳に上る館の中興實に其功多しと稱す因幡藩二十二志士の一人中野元長其碑文を作て曰く時に學校中興の初百事多端君慨然自ら任す學寮を創しめ生徒を教育す經義史學詩文の目を建て階級等あり其志の有用に存するものを抜き以て生徒の上に列す是に於て雄才偉行異能の士森然として出つと熙明國事を以て自ら任し其信する所を決行して肯て毀譽を顧慮せず其大監察となるや慶徳に上書するに天下をして討幕の師を起さしめ而して因幡之か先

鈍たるへきの意を以てす議論慷慨事を圖る頗る詳なり而して素志未だ明白せずして勤王同志の奇禍に罹る時に元治元年九月なり元長其死を惜んで曰く嗚呼公慶徳の君を知る此の如く久ふして且つ深し而して君假蹇窮厄其志を伸るを得ず反て一議の合はざるを以て遂に人疑を取る」と男爵足立正聲亦二十二志士の一人たり敦齋遺稿の後に書して曰く之を要するに庶堂の一柱礎なり君の亡ふるを致して而して國事已む矣歎するに勝ゆへけんや」と噫勤王志士に惜まる此の如くにして而して勤王黨の爲に殺さる蓋し後進と意志の疏通を缺くものありしに由るに似たり之を要するに熙明か學政振起に與ての効績と人才教養の事蹟は尙徳館の擴張歴史と相伴て離るへからざるなり

正聲黨字は朝華^{あさか}適處^{あてところ}と號す博學にして多才頗る詩文に達す遊歴を好んで足跡海内に遍く交游亦天下に滿つ後歸て因幡藩の儒官に列せらる慶徳の學政を振起せんと欲するや黨首として學事に關する意見を上る學館擴張の事蓋し黨及堀熙明協贊の功最も多しと稱す幕末外交問題の紛

起して天下將に動かんとするや其友平野國臣竊に書を黨に寄せて内外の形勢を告く黨同志を集めて之を示す因幡藩に志士の興起を見るに至りしは實に之を以て動機となすと云ふ黨國事を憂へ頗る同志と計畫する所あり藩廳の忌諱に觸れ爲に屏居せしめらるるの屢なり勤王の志士を誘發激勵するの功實に多しとなす王政維新後意を仕途に絶ち心を風月に寄せて優游自ら樂しむ明治八年三月歿す著す所漫游詩草研志堂遺稿涙餘夢卷等あり其詩清雋渾麗雄壯の調を以て清新の意を行る海内推して詩壇の一名家となせり

明治二年藩政改革の際藩主慶徳新に藩知事に任せらる藩公廨の制を廢し政廳及七司を置き尙徳館を名けて總學局とし皇學寮漢學寮醫學寮兵學寮の四學寮を置き少參事局長として之を統督し大屬之を助け各寮長及副長を置き大教正十八員中教正九十員少教正二十八員史部三十六人を置き専ら人材を教養せしめ更に米子倉吉に分局を設置する等學政の施設大に昌盛なりしも明治三年八月二十八日朝廷の趣旨に依りて閉校

するに至れり本館の學科は初め漢學を主とせしも嘉永以後國學算法筆道禮法兵學弓術馬術劍術槍術砲術柔術拔刀游泳若甲音樂等の科を設けたり學館經費に關しては舊藩の制金穀の出納は勘定所に之を支拂ひ用度に係るものは裏判所より請渡し營繕は作事方にて引請る事と定められ居れり而して安政以前は更に定度を置かさりしか萬延元年四月より毎年度度金千兩を給し其以降年々臨時多少の増額あり明治二年には銀私三百七十八貫目に増加し同三年には更に定度五百石を給せられたり

尙徳館擴張時代に當り堀正増等と共に儒官に列して大に力を育英の業に効せしを景山龍藏佐善元立等とす龍藏道村と號し元立船山と號す共に詩を善くす元立二十二志の一人たり宮原積海宇と號す詩文和歌の諸技秀出せざるなく詩歌最も群を抽けり土肥實匡石齋と號す安達清一郎名は忠貫清風と號す共に文章を以て江湖に名あり今の信夫恕軒亦因幡藩出身たり山内衡篤處と號す渡邊恭平竹園と號す共に詩名あり

尙徳館記

人君爲治之道二曰文曰武文以修己治人武以防姦遏邪人臣之道亦文武而已故立其身行其道以竭將順匡救之職養其志氣致其精力以供國家不虞之用是以古昔聖王必正學校之政明文武之道自洒掃應對之節至禮樂射御書數之事皆建其師以教之所以使人知爲君爲臣之道也吾岱岳公之擬建尙徳館也祭宇部賀露二社之神以落之藩之有學蓋始于此矣然草創之際教政未備規模未盛時會公沒頓至百事廢廢以故公志終不果也寡人不德自水戸來繼先君之緒欲以紹述其志於是講說之堂練習之榭經之營之以聚國之子弟日夕孜孜肄業於其中聖廟已成又新築一社祭二神春秋蘋繁以表崇敬之意因記其事刻諸石欲使藩之士文事武備無所偏廢且知爲君爲臣之道不出於是二途也豈寡人之私意乎即先公之遺志也爾

萬延紀元甲申正月

從四位上行左近衛少將源朝臣慶徳撰並書

欠題

堀敦齋

南樓一雨暮雲橫。歸雁天涯叫不平。竹有餘清秋八月。燈無殘影夜三更。山城漸
節風霜重。水國早寒蘆葦輕。想起東都去年夢。孤衾愁裡聽斯聲。

游耶馬溪

正 塔 適 處

三十餘里碧溪灣。英彥之巔初發源。路斷懸崖得危棧。雲深老樹聽啼猿。隔峯幽
磬遙知寺。出竹輕烟忽認村。夜叩亭溪投一宿。泉聲頻傍枕邊喧。

初夏即事

景 山 道 村

衙門閨寂戶常扃。一鼎茶煙出曲櫺。杜宇何邊叫過去。滿園新樹雨聲青。
梅香薰袖中

佐 善 船 山

淡月黃昏淺水涯。疎梅涵影有橫枝。一雙吟袖春風穩。管領暗香浮動時。

雪 景

宮 原 海 宇

天色只茫茫。柴門人跡絕。寒鴉不定棲。踏落松梢雪。

晚 酌

山 內 篤 處

不謂居貧是樂天。唯甘窮巷自安眠。山妻善慣吾家事。又得今宵買酒錢。

漫 題

渡 邊 竹 園

一雲柳塘雨。吹窓滴々青。任地燕泥汚。人讀太玄經。

國學の振起知名の歌人

因幡藩に於ける儒學は此の如く夙に振興せしと雖も國學の發生は甚た
遅く衣川長秋の鳥取に來り徒弟に教ふるに至るまでは因幡藩には名を
留むるに足るの國學者は之れなかりしもの如し初め國本道男出てて
本居宣長に學ぶ藩の國學振起せざるを憂へ先達の士を得て後進の教導
を托せんと欲し遂に衣川長秋を京都吉田より伴ひ歸る長秋亦宣長門下
に出つ通稱宰記又直記と云ひ瓊齋と號す長秋既に鳥取に入る帷を垂れ
て教授し古學の端緒を開く歌道漸く盛なり藩主聘して國學教授となす
既にして請ふて諸國漫遊の途に就き大阪に至り病て歿す著す所百人一
首峯の栲田箋日記耶都禮箋日記等あり白井治堅等あり皆世に著る
飯田年平は秀雄の第二子なり秀雄氣多郡寺内村加知彌神社の祠官たり
粹齋と號す衣川長秋に學びたるの後更に紀伊の本居大平に遊學す詞華
雄渾にして古意あり伴林光平宮原積新貞老等其の門に出つ因幡藩國學

界の巨擘たり年平幼名を足秘と云ふ通稱七郎又た主幹と稱し石園と號す母白岩氏亦大平門人たり歌道に通す年平性聰敏強記天才あり年十四に及て紀藩の本居大平及加納諸平に就て歌學を修む諸平天才を欽し敢て門下生視せず待つに畏友を以てす諸平の叡玉集を編する年平贊助の効多しとなす既にして又伴信友に從て古學を究む才藻日に加り加納諸平石川依平と共に歌人三平の名を天下に轟かす萬延元年藩主慶徳辟して祿を賜ひ士班に列して國學所教授となす元治元年命を奉して門脇重綾等と伯耆志を編す明治二年正月徵士となり上京史官に任し尋て神祇大史神祇大録式部大屬式部寮御用掛に歷任す十九平六月病て東京に歿す著す所石園歌話石園隨筆石園集同續集其の他數種あり年平の歌記紀萬葉に本つき風調蒼勁にして典雅文は延喜式祝詞を宗とす式部に奉職すること十餘年宣命祝詞の草案其の手に出でざるはなかりしと云ふ人となり豪放磊落邊幅を修め酒を嗜み清貧自ら樂しむ蓋し因幡藩あつて以來斯道の大家となす年平の妹敏子も亦歌道に通す

年平時代に於て年平と歌壇に駢ひ馳せて名を天下に著はせしを門脇重綾とす重綾蛟園と號す西伯郡渡村の人幼より心を國學に傾け和歌に長す人となり峻峭にして性高潔慷慨大節を重んず其の徵されて朝に在る議論侃諤正義自ら持す大久保利通水戸孝允等皆之を畏敬す重綾歌道を以て門戸を張る者に非すと雖も其の歌雄岩剛勁にして古穆深純最も長歌に長す縱橫胸臆を行る明治初年大嘗會の舉行に際し重綾飯田年平八田知紀福羽美靜と共に特に擇はれて御歌掛りとなれり其の全國歌壇に於ける地位の如何に重かりしかは察知するに足る

年平重綾と先後して中島宜門小谷古陰新貞老等の諸大家あり宮原積亦其詩文を善くするの才を以て力を歌道に注ぎ名吟抄からす國本道男の苦心衣川長秋の盡瘁此に至て虚しからすと謂ふへし

因幡藩内に於ける國學の振起歌人の輩出は略は上記の如し然れども是等諸人の國學上に於ける地位は皆本居系統に屬し其の作れる和歌の流派亦所謂縣居派に屬せり因幡藩内の歌壇は實に縣居派の占領に歸せり

然るに是より先き因幡藩より香川景樹の出つるありて京都にあり縣居派以外に新旗幟を翻へして桂園の一天地を開拓したるを奇なる對照と謂はざるへからず因幡藩は縣居派の歌道に重きを有せる人物の輩出したりしと同時に亦桂園派の首領を産出せしなり

香川景樹は通稱銀之助後真十郎と改む初名は純徳桂園梅月堂東塙亭觀齋亭臨淵社等の號あり明和五年四月十日を以て鳥取に生る藩の徒士林善太兵衛の次子なり景樹幼にして聰慧奇童の名あり三歳の時文を讀み字を書し七歳にして和歌を詠す歌道を清水貞固に受く創見少かち年十五の時百人一首の注釋を試み之を其の師に示す貞固之を見卷を擲て其の輕卒早く大人を罵るの非禮を叱斥し大に將來を戒む景樹過を謝し之より師誨を服膺し終身忘れず遂に大に斯道に勵む十八九の時國を出て京都に至り刻苦勉勵す初鷹司家に仕へ去て又西洞院に仕ふ頗る卿の知遇を得歌名次第に揚る時に香川景樹子なし卿の勸めを以て入て其家を繼ぎ因て徳大寺家に仕ふ寛政八年從六位下に叙し陸奥守に任し更

に長門守に轉す後洛東岡崎に住し因て東塙亭と號す景樹既に香川家を繼ぎ盛に新説を鼓吹し詠歌亦人の意表に出つ聲名籍甚後故あり香川家を去り別に門戸を立つ然れども香川姓を冒し徳大寺家に仕ふる故の如し文化八年新學異見を作りて眞淵の説を駁する所あり文政元年江戸に遊ひ幾もなく歸京す天保十二年從五位下に叙し尋て肥後守に遷る十四年三月二十七日歿す年七十六京都聞名寺に葬る景樹既に新説を立つ毀譽並ひ臻り反對の徒口を極めて景樹を攻撃せしも景樹屈せず遂に一旗幟を縣居派以外に樹てて吾邦歌壇欽仰の中心となり今に至て桂園派の勢力雲上方を支配するに至れり亦俊傑の士と謂ふへし

前記の人々の詠歌を上くれば

落花

衣川長秋

そをたにとたもふ雲さへ吹風に散てのこらぬ山櫻かな

雨瀧紀行の歌の中に

おひ衣せはき袂にあまるまでひろひてゆかん瀧の白玉

花

大井川かへらぬ水に影見えて今年も咲ける山櫻哉

香川景樹

海邊霞

明てこそ見んと思ひし箱崎の浪間に霞む松の村立

山餘花

山さくら嶺にのこれる一本の外にはまかふ雲たにもなし

國本道男

關

逢坂の關の杉村すきゆくもかへるもいそく夕くれの空

述懐

君か代の千五百の秋の長秋にをけはかつちる露の身にして

飯田秀雄

旅泊

いかりおろすむろの泊のつくし船真かちにかけてころもほす見ゆ

花

人こころのどかなる世の春を経て咲きそふものは櫻なりけり

白井治堅

朝雪

朝からすねくらはなれしあとなれやかたへちりたる松の白雪

小石川の邊にて

飯田年平

ひとつ松芝生の末にかけさしてつゝみの夕日人たつともなし

富士山

何事もめつらしけなき世の中に見れどもあかぬ富士の神山

春の歌の中に

宮原積

花のかけの伏屋の烟末たえておほろ月夜と野はなりにけり

上杉謙信

筑摩川霧の隙もる稻妻の跡かきくらす水の音かな

雪朝

門脇重綾

大神は初雪ふれりをすすきの袂よりこそ秋はくれしか

瓜生保母

聲かれしそのこほろきのをとつれをまちよろこふはななくにまされり

富士

小谷 古蔭

五六

天皇のいてます方にありとのみきまつる富士を今日見つるかな

海上眺望

雨つつみむやひし舟の朝ひらき雲もあどなき浪の上かな

舊都

飯田 俊子

吉野川瀧津河内の高殿はここの花の上にくそ見れ

梅

霜どけてきのふ南のふくよかに外面の梅は咲初にけり

暮春川

中島 宜門

いつしかと日かす流れてさくら川きのふの春も瀬の白なみ

祝

朝夕の烟も民の心とやゆたかなる代にたちなひくらん

松上雪

新 貞老

旭さす片山松の雪しくれ烟をきりてあちそむれたつ

播磨路にて

あたになつた名やをしき浪の穂に島の愛媛はをもかくれせり

歴史家

因幡藩の歴史は小泉友賢か稻葉民談記を著はせるを以て嚆矢とす友賢備前に生る備因國替の時年市で十一父俊玄に従て鳥取に入る既にして京師に游學し年二十八に及て歸藩す後民談記を著はせり其後阿部恭庵亦因幡志を著す恭庵藩侯の侍醫たり家本と富めり因幡志著述の爲め諸處に奔走し爲に家資を減するもの夥しく書成りし頃には家屋破殘雨露の漏泄を見るに至りしと云ふ兩書は他の零碎なる幾多の著述に比して卷帙浩瀚に内容亦豊富なりと雖も然れども史料の蒐集に急にして時に玉石混淆の憾なき能はず岡島正義の出るに及んで因幡藩の事蹟を最も精確に記述研究し其の歴史は頗る信を置くに足るものあり正義通稱五郎右衛門石梁と號す鳥取藩士なり博覽強記にして性謹嚴氣節あり進て大目附となる頗る恪勤事に當りて忠實權貴を憚らす年三十

仕を致して家居す爾來専ら史籍を涉獵し著述に従事す特に力を鳥取藩の地理歴史の討究に用ふ著書甚だ多く鳥府志舊壘鑿覽因府年表等最も丹誠を凝したるの書にして引證該博記事正確先人記述の誤謬を訂し未發の卓見を加ふること多し因府年表成るに及て之を藩主に献す藩主之を珍重し座右を離さざりしと云ふ時に執政池田日向深く心を政治に留め藩政に献替すること尠からず深く正義を信頼し致仕の後と雖も大事ある毎に竊に正義に就て諮議する所ありたりと云ふ八頭郡門尾村は岡島氏の領地なり正義乃ち孝行和讃を印行し領内の子女に頒ちて念唱せしめ以て孝道を勵ます又家慶を説て慈悲倉を建て以て兇荒に備へしむ岡郷風に擣ふ遂に一藩の龜鑑となる晩年明を失ひしも猶ほ讀書を子女に課し教て誤らす安政中歿す年七十五其病革るや家人をして身を起さしめ城山を拜し了りて瞑す人其誠心に感す

其他伯者には倉吉の松岡布政か伯者民談記を著はせる如き景山肅か伯者志を著はせるか如き等あり此外兩州の間歴史に係る著述少からず

蘭學界の名譽

吾邦に於ける洋學辭書の編者は實に稻村三伯の「ハルマ」和解を以て嚆矢とす而して京都地方蘭學も亦三伯に由て開始せらるる三伯は鳥取の人なり名は筈白髭番生又白羽と號す醫を業とす少にして筑前に入り龜井南浜に從て學ぶ資性卓犖にして不羈頗る同儕を困しむ然れども奇才横逸常に南浜の嘆稱する所となる居る數年去て長崎に游び既にして歸て藩侯の侍醫たり寛政三四年の頃蘭學研究の爲め請て江戸に至り大槻玄澤の門に入る苦學數年業大に進む既にして歸藩の期迫る三伯乃蘭學辭書を編纂し持歸らんと欲す是より先き佛蘭西人ハルマなる者蘭佛對譯字書を著はす三伯乃ち其の中に就て之を叩く玄澤不明の語は乃遍く江戸中の蘭學者に就て轉々相問訊し終に悉く業を卒ふるを得たり此舉白河侯の侍臣石井恒右衛門及同門の安岡玄眞等亦與て力ありしとなす辭書既に成る三伯乃ち新意を以て洋字の木刻活字を作り辭書中の總原語三十部を印刷し語毎に譯語を記入して大冊十三卷を完成す稻村三伯の「ハルマ」

和解と稱するもの之にして吾邦洋學字書の創始とす時に寛政八年なり此後三伯一たび鳥取に歸りしか故あり藩籍を脱して京都に住し海上隨園と號して蘭學を教授す之より京都地方の蘭學始て開け小林鷗齋藤森泰輔等の英才其の門に出つ泰輔後ハルマ和解を抄出し活字を以て譯鍵と題する書二卷一百部を印行せり之を辭書出版の始めとすハルマ和解と共に蘭學界に珍重せらる三伯奇才あり苟も眼中に映せるもの一見忘れざりしと云ふ文化八年正月歳六十四を以て歿す

其後鳥取藩に於て蘭學を以て仕へたるもの村岡伊王野兩家あり今の理學博士村岡範爲馳氏は即ち此村岡家の後なりとす

大道微言跋 節略

稻村 三伯

道也者。無所不包容也。夫唯無所不包容。故能大矣。至大之德。不言而信焉。

余性奇狂。常喜曖昧之說。且嫌有目的實之事。故於此書。亦多所不取也。

第九 武術

鳥取藩は古來武道を以て立國の本となす從て歷世尙武の氣風熾にして勇武の士其の名を後世に留むるもの尠からす今一々之を列擧するに違あらず唯二三の士を擧げて豹の一斑を窺はしむるのみ

羽生郷右衛門 其出生の地を詳かにせず慶安中漂游江戸に居る由非正雪の變あるに及て幕府悉く江戸在住の浪士を評定所に召喚す郷右衛門も亦與かる對て曰く吾不肖と雖も平生の志天下の爲に難を除き害を防かんとするにあり何ぞ正雪輩に與みし以て天下を擾さんや若し梃丁の棒端寸毫たも吾身に觸るゝあらは多數の人と雖も畏るゝ所にあらず必らず之に報ひんと舉動從容應對明晰にして瀟乎犯すへからす評定所員擧て感歎せざるなく以て糺問浪士中第一等の人物なりとす評定所留役鈴木某は因州侯に因故あり因て侯に語るに此事を以てす侯乃ち有司に命して急に之を辟さしむ郷右衛門藩邸に至る有司問て曰く卿何の藝かある郷右衛門對て曰く臣別に藝とする所なし唯飯粒を以て糊を作るを能くするのみと因て其

與へられし所の推糊板に依りて飯粒を練る其の妙を極む有司驚き更に問て曰く推糊の藝は既に見るを得たり卿武藝に於て能くする所なき乎と郷右衛門笑て曰く武士の武藝を能くす是れ當然の事のみ閣下故さらには臣か藝を問ふ臣故に解して遊藝の事となし以て推糊の技を對へしなり武藝に至ては弓馬刀槍各一斑に通せざる莫し其の能否の如きは乞ふ傍評に任せんのみと乃ち命して其の技を試みしむるに各奥妙を極む即日藩士に列し三百石を給して一藩に師範たらしむ當時武藝修業者の鳥取城下を經過するもの必ず郷右衛門を訪はざるなし郷右衛門之に對して輸贏を争ふもの前後二十餘回未だ曾て敗を取らざりしと云ふ貞享二年病て鳥取に歿す慶福寺に葬る辭世の歌に曰く世の中をめぐりく因幡路にしはらく足を引白となると遺囑して石臼狀の墳墓を作りて之を刻せしむ其墓猶ほ存す深尾角馬 本姓河田氏初め喜六重義と稱せしか後姓名を改めたり井蛙流劍法の開祖にして祿二百石を食み池田日向の組士に編せられ後神戶總殿の組士となる天和二年十月故あり死を賜はり嗣絶ゆ年五十餘東品治村本

淨寺に葬る抑も井蛙流は寛文以後天和に至る迄専ら鳥取藩中に行はれ爾來休て維新の後に及へり初め池田氏猶備前に在るの時浪士篠六左衛門なるもの岡山に來り丹石流の劍法を教ふ角馬の父理右衛門獨り其印可を得たり角馬亦た其劍法を父に受て奥妙を極む池田氏封を鳥取に移るに及び亦從ひ來りて丹石流を以て子弟に教授す晩年に至り丹石の諸流を兼て刀法繁多に失するを察し其根本たる一刀法のみを取て習練する一流を開き號して井蛙流となし其極意を驪龍劍と稱せり蓋し新陰流の極意鈎極と其旨を同ふして其の趣を異にせり角馬自ら言ふ多年工夫を凝らしたるの極遂に軍神摩利支天の靈示を受けたりと免許を與しの高弟十三人石上八兵衛寺島四郎左衛門奥田又右衛門鈴置四郎兵衛小泉七左衛門白井源太夫河野孫之丞高原市兵衛等にして其親族石河四方左衛門も亦其の免許を得たり角馬の印可を與ふるや井蛙流に加ふるに丹石流の傳書をも並ひ附授したりと云ふ角馬人となり軀幹短少而して意氣人を壓す嘗て江戸に祇役す一日少壯の士輩藩邸の一室に相會し互に身長を較論して鴨居に達するの有無

を權かる角馬其刃刀を抜て頭上に樹て、曰く身の長短武士に於て何かあらん性來の不足は帶劍を以て之を補ふべきのみ見よ余が身長は鴨居に達して餘りあるにあらずやと衆爲に默然相顧て苦笑するのみなりしと云ふ幾田右門及武雄 幾田右門伊俊と稱す本と備中高松の藩士たり種田流の槍法を善くす故あり國を去て鳥取に來り池田侯に仕ふ右門曾て鳥取郊外を過きる衆譁然野水の橋側に集る蓋し剛鼠あり橋臺の石隙にあり數々首を出して人を弄す衆之を殺さんと欲して得ざるなり右門携ふる所の槍を舉げ把弄一番剛鼠其下に壓せられて復た動かす衆乃ち之を擒ふ之より人喚て「イタチ」先生と云ふ「イタチ」先生の名一時に高し又曾て知る所の村人に伴ひ獵猪に赴く種田流の鎗鋒極て短少なり村衆其鎗外に復た武器を携へざるを見て頗る之を危む野猪果して突き到る右門鎗を取り翻轉十數回野猪輒ち斃る村人唯た槍の回旋を見て其衝擊を視す怪て之を檢す猪面十數創あり大に驚て神技となせりと云ふ武雄は其長子なり天保元年六月を以て伯耆米子に生る名は伊載通稱武之進後武雄と改む武雄幼より槍法を學

ひ刻苦練習晝夜を分たす右門喜て曰く嗣業兒ありと嘉永三年父に従て江戸に游ひ業を村上某に受く術益精に遂に其印可を得たり某曾て武雄をして一日千鎗を試みしむ武雄場に入り技を闘はす銳鋒當るへからず觀者驚嘆せざるはなし安政五年九月右門歿す因て業を繼ぎ徒を教ふ文久元年十二月學校武場監督役となり三年三月小武場槍術師範役を兼ね元治元年徒士頭に進む明治二年二月槍術師範役となり十二月武學家槍術教師に改めらる武雄人となり長眉隆準辭氣活達停力あり酒を嗜む明治十八年三月歿す年五十七

其の他猪多伊織あり疋田豊五郎の高弟にして備因轉封當時より鳥取に來り子弟を教授す因幡藩に於ける疋田流の始祖なり柴山免山あり免山軀幹長大停力人に絶す曾て江戸に上る當時出雲出身の力士稻妻横綱大關たり免山と相識る深く免山の強力に驚き居たりしと云ふ免山流の始祖たり神刀免山流の開祖に淺田主計あり其他武技特達之士に係る遺聞逸話尠からず

第十 美術

刀劍

刀劍は獨り吾邦特有の美術品たるのみならず亦國民の心魂を代表せる精華たり古來我鳥取縣下に大原安綱父子の如き因幡小鍛冶景長の如き名匠の出でたるは因幡兩州の名譽なり

伯耆刀匠 大原安綱以來伯耆の地には刀匠の出づる妙からず安綱名は三郎太夫又太郎太夫と稱す一稱神子伯耆國大原刀匠の祖にして古今屈指の名工なり孝謙帝の天平勝寶元年を以て生れ天應延曆大同弘仁の間刀を鍛ふ源氏の鬼切利仁將軍の越前氣比宮に奉獻の太刀及坂上田村麿の伊勢神宮に奉獻の太刀何れも安綱の作に係れりと云ふ嵯峨天皇の弘仁二年六十三を以て卒せり太平記鬼切の事を記して曰く源賴光より傳へたる新田義貞朝臣の鬼切といふ太刀は伯耆國會見郡に大原五郎太夫安綱といふ鍛冶一心清淨の誠を致し鍛ひ出したる劍なりと然れども今會見郡今西伯大原の地名なし伯耆民談記には安綱を以て河村郡今東伯

大原の者とし鍛冶屋敷とて今に在り此處に住居せしなりと記せり今得て審かにすへからず安綱の子眞守と云ふ眞守桓武帝の延曆十四年を以て生れ即ち河村郡大原村に住せり其刀を鍛ひしは嘉祥の間若くは弘仁天長承和の交なりしと云ふ嵯峨帝の命を蒙りて十四の宮の寶劍を作りて奉獻し又平家重代の名刀抜丸を造る平忠盛嘗て晝寝す巨蛇來り視ふ刀自ら室を出て、蛇を追ふ因て此名あり忠盛後之を次子頼盛に傳ふ都芳門の戦に頼盛が八町二郎の鈎柄を斫て逸去するを得たりしは即此刀なりとす眞守所作の刀銘は或は月卿雲客とし或は勝の一字を題せりと清和帝の貞觀三年歿す年六十七子眞繼繼く亦名匠なり眞守以後伯耆の地刀匠輩出し名工少からず就中承元の頃に於る宗隆は番鍛冶二十四人の内たり又建武の頃相州眞宗の弟子に元重あり古刀の末代には廣賀守廣等あり彬々として盛と謂ふへし

因幡刀匠 因幡小鍛冶景長あり其鍛刀の地數所に存せり傳へ云ふ本と法美郡上野今岩に居る次で高草郡小山今風高に移る其後同郡味野の

竹成にあり世に竹成小鍛冶と呼へり後更に八東郡小畑に赴く世に寺垣
打と呼へる者は此地の鍛刀に係り上野は國府村宇部野山即因幡山上
平垣の處を云ふ稻葉民談記に曰く今其處をゼ、カ澤と云ふそこにアフ
ミカ墓と云ふ古塚あり是小鍛冶か墓と云と後世まで其地を鑿つ往々鐵
滓を得たりと云ふ又小鍛冶か刃を淬したりし石製の湯舟は幅二尺長四
尺許りにして其の地に残り居りしか池田長吉鳥取に在城の時之を城内
に移して水舟となしたりと小山小畑皆其遺跡あり按するに鑑刀諸書に
「因幡小鍛冶因州住景長と銘打三代あり」とあれは其諸處の屋敷跡なる者
は一人の轉居せしものに非ずして乃ち代を易へての轉居なりしなるへ
し新刀時代には壽格忠國兼光等あり世に現はる
當今の刀匠 當今因幡の刀匠には日置兼次あり伯耆の刀匠には宮本包
則あり共に移て東京に住せり兼次包則嘗て同しく伊勢神宮及熱田神宮
に奉獻の寶刀を鍛ひ又内務省社寺局内造神宮司の命を受けて寶劍矢鏃等
を作り又宮内省圖書寮の命を以て奈良正倉院の寶劍を造る包則は現に

帝室技藝員たり

繪畫

元祿以來文化の普及と共に各藩に於ける諸般の美術は非常に發達し來
り十一代將軍家齊の時代に及ては益々其度を嵩め天下の無事平穩と共
に諸侯は競て藩内美術の振興に勤め互に特有の技を發達せしめて天下
に誇示するの傾向ありき片山楊谷は此時代に於て因幡藩に聘用せられ
因幡繪畫振起の源泉となりし者の如し
片山楊谷 本と長崎の産なり通稱宗馬名は貞雄楊谷又畫禪窟と號す寶
曆十年を以て生る同地の醫士洞雄敬の胤なるを以て初め洞觀と稱すと
云ふ或は傳ふ清人某の子母は乃ち日本人なりと四歳にして父を喪ひ寛
政四年亦母を失ふ楊谷乃ち父母親姻の法名を刻せる一靈牌を背にし畫筆を
携て飄然長崎を去り諸國を巡遊して鳥取に來り足を法美郡(今岩美)杉崎
村の醫中山東川の家に住む因幡の支封池田冠山其畫の精妙凡技に非る
を觀て其の復た去て他國に赴かんとするを惜み侍臣に諮りて茶道家片

山宗把の家を繼かしむ時に寛政五年二月二十七日なり楊谷畫技の師傳
今得て知るへからすと雖も精麗巧緻真に入神の妙あり花鳥に於て最も
得意なり書も亦雄渾勁逸にして藏寶するに足る人となり體軀少齋肩齟
目傲岸の氣自ら溢る風姿尋常ならず常に紫絲を以て頭髮を束ね大道を潤
歩す人爲に目を屬す性甚た酒を嗜み豪飲自ら喜ぶ嘗て攝津池田に至り
酒肆の前を過る醜香鼻を衝て來る楊谷與大に發す因て入りて四斗入の
火酒一椀を購ひ杯を舉げ連飲すること一升後を顧みずして去る主人其
常人ならざるを察し人をして追尾せしむ楊谷徐行郊外に佇立し暮景を
戀賞す仍て意を致し伴ひ歸る主人其楊谷なるを知り款待頗る至る楊谷
爲に屏風一雙を書きて去る又嘗て江戸に在り狸々會に臨みて第一位を
占む狸々會は當時の豪飲會なり將軍家齊其畫を善くして且酒量の大な
るを聞き引見酒を賜ふ當時召を同ふせしもの九州人某あり某一斗二升
を飲み盡くせしも辭し歸るの際雙脚踏踵頗る醉態を極む楊谷飲み盡せ
るの酒量一斗舉止整然少しも飲酒の態なし時評楊谷を以て酒量勝れり

となす後ち楊谷湯治に托して藩許を得京師に遊びて西本願寺に寓し大
に彩筆を揮ひて畫名滿都を傾く寛政七年五月妙法院親王の召を以て逃
下鯉魚の圖を描く旨に愜ふ法親王携て仙洞御所天光格に獻す上皇觀て亦
之を賞し複寫して奉らしむ時從五位下に叙して拜謁を賜はり旨を奉し
て揮毫するもの數十幅爲に石王寺硯一面を賞賜せらる楊谷感佩終生身
を離ささりき一畫工を以て知を將軍に受け金枝玉葉の門に出入し終に
拜謁を天子に賜わるに至る無上の光榮と謂ふへし蓋し此の異數の知遇
を得たる所以の者抑も以て楊谷の手腕非常なるものありしを推知する
に足るへし享保元年八月二十四日楊谷但馬に在り湯村温泉入湯中卒に
疾を發して歿す年四十二鳥取興禪寺域内に葬る

土方稻嶺 因幡藩歴代の畫家中名最も高し鳥取の人にして本姓後藤初
め名を廣邦と云ひ後廣輔と改む稻嶺は其號なり又臥虎軒と稱す幼より
畫を嗜む長して藩老荒尾小八郎に事ふ後故ありて仕を辭し畫技を窮め
んと欲し感齋京に上ほり圓山應舉を訪ふ應舉其手腕の非凡に驚く或は

傳ふ稻嶺京にあり應舉禮せず門人怪んで其故を問ふ應舉曰く稻嶺をして京に留らしむ我か名乃ち落ちん彼を禮せざるは早く去らしむる所以なりと京に在る久しからず稻嶺去て江戸に上り谷文晁を訪ふ文晁其座側に在る所の金屏風を出して揮毫せしめ以て其技を試む稻嶺平然硯中の墨滲を繖へして屏上に散點す而して徐々に筆を揮て染加山水となす生氣活動文晁驚嘆舌を巻く既にして清人宋紫岩の弟子宋紫石に就て明畫の秘蘊を究め其妙所を得聲名一時に高し荒尾氏聞て之を本藩に薦舉す藩主池田齊邦召して近侍に加ふ稻嶺之より専ら本藩の畫事に任し手腕靈活筆墨精雋花鳥山水人物寫して妙を極めざるは莫く特に鯉魚を寫すに巧みなり游泳跳躍の態眞に逼る其筆を執る一點一畫をも苟くもせず精緻綉麗にして而して氣格高趣風韻人に絶す是其特有の技たり稻嶺常に曰く席畫は名聲を街ひ小利を得んと欲する者の業たり大家の屑とせざる所なりと其自ら畫かんとするや必ず先づ靜堂に入りて香を薫し神を澄ましめ然る後筆を下す是を以て其畫逸態あり大畫伯の稱を博せし所以

なり藩内の畫風一時大に興る文化四年三月二十四日歿す年七十三鳥取景福寺末周源院に葬る其子稻林孫稻洋相繼て畫名あり弟子黒田稻嶺最も入室の名あり稻嶺替身と稱せらる

子得海江田信義會て元老院議官を以て獨逸に游ひ博士スタインを訪ふ談技術に及ぶスタイン其傍にある雙鯉一幅の掛軸を手指して曰く是は御國の畫工廣邦の描きし者なり其潑刺として身を繖したる首尾の氣勢唵鳴して口を張りたる面頰の形狀より鱗鱗濃淡の墨色等寫眞油繪より

一層の精神ありて眞に迫るを覺へたりと宮内省藏須多因讀義筆記

嶋田元旦 稻嶺時代にあり年齒稍若きの身を以て名を畫壇に寄せ稻嶺と拮抗して背て下らざりし者を島田元旦となす元旦通稱は季允後寛輔と改む相傳ふ本と江戸の人谷文晁の弟なりと寛政中鳥取藩士島田圖書の養子となり其女に配し池田侯に事へて五百石を領す人となり容姿閑雅甚た畫技に長す筆力俊健自ら一家を成せり天保十一年六月十三日享年六十三を以て歿す慶福寺に葬る元旦丹青に巧なるの故を以て前後思

命に接せしこと尠からず又數々河渠の修築に従事して効績あり曾て殿中にあり稻嶺と相會す從容謂て曰く足下の描くか如き銀硯輪の鯉魚は何れに栖むやと稻嶺爲に苦笑せりと云ふ蓋し元旦の稻嶺に於ける後輩なりと雖而も藩藉の資格遙に其上にあり畫名稻嶺の後に居るを甘んせさりしものゝ如し

黒田稻臯 稻嶺の衣鉢を受けて之を死守せず其天性の高手腕の靈を以て師法以外に更に一機軸を出し別乾坤を開拓して後世の賞贊を集めたる者之を黒田稻臯となす稻臯名は文祥通稱六之丞藩士林源三郎の弟なり幼にして畫を好み土方稻嶺の門に入りて其秘奥を受く遂に一代の畫伯となれり稻嶺常に曰く我弟子中我畫法を傳ふるに足る者あらは與ふるに稻の一字を以てせんと其初め稻葉と稱し後稻臯と改むる所以のもの皆師の認許に出づるを見るへし藩主稻臯の伎倆を愛し之をして畫師たらしめんと欲す憚る所ありて果さず偶々支封池田家の士籍黒田某家絶え因て其家を繼ぎ以て池田仲雅の近習たらしむ是より屢江戸に來往

し公務に勤む武技に長し騎射水練馬術等精通せざる莫し仲雅卒去の後致仕して専ら力を畫事に注ぐ家に應を伺ひ又池に鯉魚を放て其翺翔飛躍の狀を視察し以て潜心之を寫生す故に其畫筆に生動す凡そ人物花卉鳥獸に至る迄技神に入らざるなしと雖も特に鯉魚に至つては其の師に超乘せんとす稻臯性嚴にして寡言妄に人に接せず漫遊の畫家來り訪ふ毎々多く辭して而せず弘化三年十一月六日病て歿す年六十玄忠寺に葬る法諡して響流軒海外稻臯居士と云ふ甥稻觀を養て子となす稻觀亦畫を善くし父の筆意を得山水に於て殊に妙境を見る年三十三にして歿す小知稻升亦稻臯の衣鉢を受く

沖一峨 鳥取藩の畫員たり名は貞字は子仰又子仰初め淵泉と稱し又探三と云ふ薙髮して靜齋と號す一作江戶の人兒玉某の子にして丹青を善くするを以て鳥取藩の畫員沖探沖の家を繼ぐ沖氏は初代清信より狩野派の畫を以て著はれ池田光仲に仕て畫員となり江戸藩邸に住し五人口を給せらる其後清友探陵探玉相繼ぎ百三十年間畫道精勤の故を以て

歳米二十俵を加賜せらる後探高を経て探沖に至る探沖初の名探容家法を受けて夙に出藍の稱あり士格に昇さる一峨天保八年を以て養父に代りて業を繼ぎ文久元年六月或は安政二年八月十一日江戸に歿す一峨殊に極彩の密畫に巧みに畫名一時都下に喧傳す鳥取に住すると久しからず畫幅多く流傳せざるも其の存するもの皆秀逸人を驚かす長子探三名は守固九郎と號す又畫を善くす文久三年正月歸國を命せらる維新の際國事に努めて功あり男爵を授けられ現に貴族院に議員たり

根本幽峨 鳥取の人雜商砂田屋某の長子にして幼より畫技を嗜み春初古武將を紙鸞に描き之を販くを以て業とせり長して江戸に出て沖一峨に就て狩野派の畫法を學ぶ幽峨天性畫才あり筆數本を口に啣み數筆を手にして同時に揮寫す精巧の致を極む一峨常に歎賞措かず居る數年にして歸郷す時に摸寫の名畫數幅に滿てり弘化四年十二月藩の畫用を命せられ安政五年四月藩の畫師に任せらる幽峨夙に出藍の譽を得技能大に進み名聲日に高しと雖も敢て自ら矜持せず需めあれば輒ち揮寫して

與ふ是を以て世間傳ふる所の筆蹟頗る多し慶應二年十一月十一日歿す年四十三慶安寺に葬る弟雪峨亦畫を善くし其業を嗣く

南宗畫 因幡藩に於て南宗畫は建部撰齋其博學宏才の餘力を以て筆を之に染めしことあり降て維新前後に至り正増適處の如き山内篤處の如き牧野芝石の如き筆態淋漓頗る神韻の縹緲たるものあるを見ると雖も亦何れも詩文の緒餘を以て胸中の雲煙を吐きしに外ならず未だ專門畫家として名を江湖に馳せし者あるを聞かず

第二章 地理

第一 管轄

鳥取縣は山陰道の中央に在り之を分ちて鳥取市岩美郡八頭郡氣高郡以上因幡國東伯郡西伯郡日野郡以上伯耆國の一市六郡とす明治二十二年邑美法美の二郡より鳥取附近の地を割て鳥取市を組織す明治二十九年邑美法美及び岩井の三郡を合して岩美郡を置き八上八東智頭の三郡を合して八

頭郡を置き氣多高草の二郡を合して氣高郡を置き久米河村及八橋の三郡を合して東伯郡を置き會見汗入の二郡を合して西伯郡を置く日野郡は舊の如し明治元年以後に於ける沿革は左の如し

鳥取縣管轄地の沿革

國郡市名	自十五年 至四十年	十四年	自十三年	九年	自八年	四年	自三年	明治元年
因幡國								
鳥取市								
岩美郡								
八頭郡								
氣高郡		九月十二日鳥取縣		八月二十日鳥根縣		十一月十五日鳥取縣		
伯耆國								
東伯郡								
西伯郡								
日野郡								鳥取藩

第二 周圍

鳥取縣は東は但馬國美方郡及播磨國宍粟郡に接し南は播磨國宍粟郡美作國英田郡苦田郡真庭郡備中國阿耆郡及備後國奴可郡に境し西は出雲國仁多郡及能義郡に接し北は一面日本海に瀕し而して西北部は深く海中に斗出して半島をなし一衣帶水を隔て、島根縣に對す

第三 面積及地目

鳥取縣は東西三十二里二丁南北十五里二十七丁にして其極東の地は八頭郡池田村極西は日野郡多里村極北は岩美郡東村極南は日野郡福榮村とす面積は左表の如し

國郡市の面積及廣袤

國郡市名	面積	廣				袤
		極東	極西	里程	極南	
全管	三九八・八四	八頭郡池田村	日野郡多里村	三三・〇二	日野郡福榮村	三九・二八
因幡國	一七五・二二	八頭郡池田村	氣高郡勝浦村	一三・〇九	八頭郡那岐村	一八・〇七
鳥取市	〇・八八	東町	新島治町	〇・三〇	立川村	一・〇三
						岩美郡東村
						福所村

岩美郡	三五三〇	上舟村	中ノ郷村	五二九	三戸古村	東村	五二二
八頭郡	一〇四七八	池田村	上佐治村	一一三四	那岐村	下私郡村	七三五
氣高郡	三二四二五	千代水村	勝部村	六一三	小鷲河村	賀慶村	四二二
伯耆國	二二三・六三	東伯郡神中村	日野郡多里村	二一〇四	日野郡福榮村	四伯郡境町	一三三〇
東伯郡	九二・七九	神中村	古布庄村	一一〇四	源村	下中山村	七三四
四伯郡	四八・七四	大山村	渡村	八二四	上長田村	境町	八三二
日野郡	八二・二〇	米澤村	多里村	一〇・二三	福榮村	吉海村	六二八

管内の總反別は二十四萬三千七百二十八町步餘にして各地種目の面積は左の如し

地種目別の面積

地目	官	民	合
田	〇・六九一六	三四、四一四、五九三二	三四、四一五、二九〇八
畑	二二、四〇二	一三、八八八、二二三	一三、八九〇、二六〇五
宅地	〇・三三三四	三、三三九、一三一	三、三三九、四七〇五
森林	三三、四四六、九四二	七六、〇五七、二九一三	一〇八、五〇四、二三二五
原野	五、三九六、一一三	六〇、三九一、〇二一	六五、七八七、二二四
兵營敷地其他附屬地	四六・二五二三	—	四六・二五二三

第四 地勢

社寺	地	面積
社	地	一九四・九五二二
收	場	四、七八七・〇四二二
道	路堤塘	二、八七三・五九〇六
河川	溝渠	四、六二四・九一〇〇
池沼	湖	一、六二八・五五一六
雑地	地	二、七四七・六三〇四
合	計	五四、七四九・二八〇〇

地形は東西に長く南北に狭く南は一帶に陰陽兩道を阻隔する中國山脈を以て限られ東は高峯を以て但馬と境し山岳重疊し地勢は南に高く北に低し従て河川は總て南に發し北流して日本海に注ぐ西南部は深く美作備中備後出雲の間に突入し西部は山岳を以て出雲に堺し而して西北端の海中に斗出せる地は全く水の沈澱作用に依て運積せる砂粒より成り以て中海と日本海とを遮斷す而して其北端には境水道ありて兩海を聯絡せり日本海に面せる沿岸は約三十里にして崎岬の突出若くは數里に亘る砂丘を以

て水陸を境界す

第五 山岳

大山並に鷲峯山等に連なる巒峯及其他の諸山岳起伏連亘せるを以て管内には平地少なく鳥取市附近千代川流域北條附近天神川流域及箕崎屋附近(日野川流域)と弓ヶ濱半島に於て之を見るに過ぎず

大山は山陰山陽兩道に於ける最高峯にして高さ五千六百五十三尺伯耆富士又は出雲富士の稱あり其山麓火山山彙に特有なる荒蕪たる原野あり其他蛭山大倉山船通山菅の山扇の山氷の山等は管内に於ける高峯にして火山石よりなるもの多しと雖も總て死火山に屬す

重なる山岳の名稱其高さ及所在地名並に造成岩石は左の如し

山岳名稱	海面ヨリノ高さ	地	質	所	在
久松山	八七一	石英粗面岩及花崗岩		鳥取市、岩美郡中ノ郷村	
摩尼山	一〇二九	安山岩		岩美郡中ノ郷村、同郡服部村、同郡元鹽見村	
扇ノ山	四三三二	安山岩		岩美郡上井村、八頭郡赤松村、但馬國美方郡	

三國ヶ山	四・一三二	安山岩	八頭郡明治村、同郡上佐治村、東伯郡神中村、美作國吉田郡
陣休山	四・〇〇三	安山岩	八頭郡赤松村、同郡菅野村、但馬國美方郡
菅ノ山	五・四七五	安山岩	八頭郡菅野村、同郡池田村、但馬國美方郡
大通山	三・五〇四	安山岩	八頭郡池田村、播磨國美粟郡
池田山	四・四八一	安山岩	同上
沖ノ山	四・三五二	安山岩	八頭郡上井村、同郡池田村、美作國英田郡
龍ノ山	二・九八八	古生層	八頭郡宮澤村、同郡社村
那岐ノ山	四・〇九三	安山岩	同郡那岐村、美作國勝田郡、美作國吉田郡
頭巾山	一・七〇三	花崗岩	同郡用瀬村、同郡大村
毛無山	一・八八三	安山岩	氣高郡吉岡村、同郡鹿野町
鷲峯山	三・〇三九	安山岩	同郡小鷲河村、同郡鹿野町
美徳山	二・九七〇	安山岩	東伯郡三徳村
下姫山	三・六三二	安山岩	同郡山守村
中姫山	三・七〇三	安山岩	同上
上姫山	三・九五九	安山岩	同上
船上山	二・〇三一	安山岩	同郡以西村
打吹山	六八六	花崗岩	同郡倉吉町

大 山	五・六五三	安 山 岩	同郡古布庄村、同郡上中山村、四伯郡大山村、日野郡吉野村、同郡金岩村、同郡金澤村、同郡米原村、同郡米澤村
手 間 山	一・〇六九	石 英 粗 面 岩	四伯郡手間村、同郡賀野村、同郡天濠村
湊 山	二・九七	石 英 粗 面 岩	四伯郡米子町
鎌 倉 山	二・四一二	花 崗 岩	四伯郡上長田村、日野郡黒坂村
權 現 山	一・三三三	花 崗 岩	四伯郡東長田村
大 倉 山	三・六七〇	花 崗 岩	日野郡石見村、同郡福成村
高 麗 山	二・五三一	安 山 岩	四伯郡高麗村、同郡宇田川村、同郡大山村
船 通 山	四・〇〇〇	花 崗 岩	日野郡多里村、島根縣仁多郡島上村

第六 原野

火山岩より成る山塊に於ては其山麓流れて原野を成す地質は概ね火山噴出物より成り其表面には腐植物を覆ふもの多し
 重なる原野の名稱其面積地層及其所在は左の如し

原野の名稱	面積	面積	地層	所在
廣 富 野	一〇・〇〇〇町	一〇・〇〇〇町	一〇〇町	火山凝灰 八頭郡赤松村

天 神 野	六・〇〇〇	一〇〇・二四	二六二	洪積粗腐植層	東伯郡小鴨村、上小鴨村、南谷村、北谷村
仙 隱 野	三・〇〇〇	一〇・〇〇〇	三六〇	同	同郡南谷村、上小鴨村、北谷村、山守村
千 目 野	五・二〇〇	二・三三〇	一四	同	同郡瑞穂村、常盤村
八 橋 野	一・六四〇	一・〇三〇	七五〇	同	同郡榮村、伊勢崎村、下郷村、由良村
羽 田 井 野	一・一〇〇	三・三〇〇	四三三	同	同郡上中山村
牧 野	二・五〇〇	二・九〇〇	八七三	同	四伯郡大山村
泉 野	一・一三六	一・〇三〇	一四六	同	同郡大和村、大高村

第七 河流

管内の河川は悉く日本海に注ぐ其主なるものは因幡國に在りては千代川
 河内川日澄川及蒲生川とす千代川は源を八頭郡に發し岩美氣高二郡を貫
 流して日本海に注ぐ河口に賀露港あり伯耆國にありては天神川加勢蛇川
 山良川佐陀川日野川を主なるものとす天神川は東伯郡蛭山及人形山に發
 するの二流倉吉町の東に於て相會し日本海に注ぐ其東方に橋津港及東郷
 湖あり日野川は日野郡に源し西伯郡を貫流して日本海の一部なる美保灣
 に注ぐ其本支流沿岸は雲伯鐵の産地にして砂鐵の採集盛なるを以て河水

概ね濁れり之れか爲めに年々海中に漂積せらるゝ砂の量頗る夥しく爲めに美保灣を淺くし且つ其深淺所を變すること甚しく漸次海中に沖積土層を増成す中海の如きは全く此類の運積砂粒の爲めに日本海より別れて一の湖形をなしたるものと推測せらる

重なる河川の名稱水源地名流末地名及管内經過地名及里程は左表の如し

名	水源地名	流末地名	管内經過地名	里程
千代川	上流は智頭川と稱す	八頭郡山郷村大字駒蹄宿	岩美郡八頭郡	二、〇〇
北股川	同郡山井村大字八河谷村	八頭郡大内村大字郷原村	岩美郡八頭郡	二、〇〇
土師川	同郡那岐村大字河津原村	同郡智頭村大字智頭宿	同郡	二、二五
新見川	同郡宮澤村大字波多村	同郡同村大字同宿	同郡	一、三〇
佐治川	同郡上佐治村大字柿原村	同郡用瀬村大字用瀬宿	同郡	五、〇〇
曳田川	同郡明治村大字北村	同郡曳田村大字曳田村	同郡	三、二八
八東川	同郡池田村大字吉川村	同郡國英村大字片山村	同郡	八、〇〇
支	同郡大茅村大字雨瀬村	岩美郡中ノ郷村大字濱坂村	岩美郡	六、〇〇
支	同郡岩坪村	岩美郡大和村大字長谷村	岩美郡	二、〇〇

名	水源地名	流末地名	管内經過地名	里程
大留川	岩美郡三古村大字越路村	岩美郡美保村大字古市村	岩美郡	二、〇〇
有坂川	岩美郡福富村大字高路村	同郡浦野部村大字吉浦村	岩美郡	二、〇〇
野山川	同郡明治村大字河内村	岩美郡海徳村大字古海村	同郡	三、〇〇
湖生川	同郡湖山村	同郡賀露村	同郡	〇、三〇
支小田川	岩美郡浦生村大字島越村	岩美郡大岩村大字岩本村	岩美郡	三、二八
支内川	同郡高野村大字大坂村	同郡本庄村大字太田村	同郡	二、〇〇
天神川	上流は火鴨川竹田川と稱す	岩美郡寶木村大字寶木宿	岩美郡	三、〇〇
支三徳川	東伯郡源村大字大谷村	東伯郡長瀬村大字長瀬宿	東伯郡	八、一八
支三徳川	同郡三徳村大字倭原村	同郡賀茂村大字本泉村	同郡	三、二〇
支三徳川	同郡山守村大字野添村	同郡上瀬村大字巖城村	同郡	四、一八
支三徳川	同郡桑村大字東高尾村	同郡山真村大字由良宿	同郡	三、〇〇
支三徳川	東伯郡古布庄村大字野井倉村	同郡蓬束村	同郡	四、一八
支三徳川	同郡上中山村大字羽田井村	同郡下中山村大字下甲村	同郡	三、〇〇
支三徳川	四伯郡大山村大字大山村	四伯郡庄内村大字大塚村	四伯郡	三、〇〇
支三徳川	同郡同村大字同村	同郡大和村大字佐陀村	同郡	四、〇〇
支三徳川	日野郡多里村大字上萩山村	同郡福生村大字皆生村	日野郡	二、〇〇
支三徳川	同郡新屋村	同郡車尾村大字觀音寺村	四伯郡	四、〇〇
支三徳川	同郡上長田村大字大木屋村	同郡江尾村大字江尾宿	日野郡	二、一八
支三徳川	同郡米澤村大字下坂屋村			

支	武庫川	根雨川	印賀川	石見川	小原川	二部川	派米川
同郡神奈川村大字俣野村	同郡根雨村大字板井原宿	同郡阿良津村大字阿良津村	同郡福成村大字神戶上村	同郡山上村大字笠木村	同郡二部村大字福岡村	同郡二部村大字福岡村	同郡二部村大字福岡村
同郡神奈川村大字武庫村	同郡根雨村大字根雨宿	同郡菅福村大字福長村	同郡霞村大字生山村	同郡同村大字同村	同郡旭村大字中祖村	同郡旭村大字中祖村	同郡旭村大字中祖村
同郡	同郡	同郡	同郡	同郡	同郡	同郡	同郡
二、〇〇	二、〇〇	三、一八	二、〇〇	三、〇〇	三、〇〇	三、〇〇	五、〇〇

第八池沼湖

管内の主なる池沼湖は多餘池湖山池水尻池東郷池日光池障池等にして孰れも前世紀に於ては日本海の一部たりしも海成沖積層及砂丘のためには陸地に包まれたるものと推測せらる前記の池沼は孰れも冬季に於ては其水量を増し夏季に於ける稲田は變して池沼の一部をなす其の然る所以は冬季に於ては風力及海水或は波濤の爲めに砂堆積して河口を塞くを以てなり

主なる池沼湖の名稱所屬地及大きさは左表の如し

池沼湖の名稱	所屬地	周囲	面積	廣	袤
多餘池	岩美郡中ノ郷村	三、〇	二五	六、一〇	七、〇〇
湖山池	氣高郡湖山村松保村 大郷村末恒村	三、二六	六七二	三三、〇〇	三三、〇〇
水尻池	同郡笠木村	二、二	一六	二、四六	四、四九
東郷池	東伯郡金入村松崎村東郷村 花見村淺津村	二、一〇	六三二	二〇、〇〇	三〇、〇〇

第九地質

因伯二州の地を構成する地質の主なるものを類別すれば左の如し
水成岩にありては

結晶片岩

古生層

中生層

第三紀層

洪積層

沖積層

噴出岩にありては

花崗岩及石英斑岩

閃綠岩

石英粗面岩

安山岩及玄武岩

火山岩層

とす

岩石の配布最も大なる面積を占むるものは花崗岩なり花崗岩は陰陽分水界たる中國山系の山骨をなし石英斑岩と共に全面積の約四分の一をなす伯州鐵紫水晶其他茶水晶等諸種の水晶は此花崗岩地に産出す之に次きて廣袤の大なる岩石は石英粗面岩安山岩玄武岩火山岩層等の火山岩類にして火山山彙及因伯國境並に因但國境の隆地を占め全面積の約四分の一を

なす高原及廣漠たる原野は多く此火山岩及之に原由せる地に多し古生層をなす岩石の種類には硅岩、粘板岩、砂岩、凝灰岩、及石灰岩を主なるものとす因幡及伯耆兩國の南部に在りて杉檜産地たり

沖積層は千代川、天神川、日野川其他大小河川の沿岸及海濱低地をなす殊に西伯郡弓ヶ濱の地は幅一里長さ約四里に亘る大沖積地たり其造成せられたる原因は中國山系に水源する諸川は粗粒にして風化し易き花崗岩地を流過す而して雨雪多量なるを以て河水の泥沙を流出する事多いため河床昂り遂に河口より夥しく泥沙を海中に放出す是を以て沿岸の海底は爲めに淺きを致し怒濤は之を海岸に打寄せて堆積し或は砂丘をなす而して弓ヶ濱は海中の一部に泥沙沈積し逐次其の大きを増して遂に一島をなしたりしが後其南部は漸次陸地に接續し遂に中海を日本海より遮りて半島形をなしたるものと推測せらる古代には境水道の地島根半島に接續し中外海の聯絡として粟島附近に水道ありし如し現今に於ても尙泥沙の堆積を繼續しつゝあり元弘帝の隠岐に渡らせらるゝに當り車尾より安

して蒸熱高しと雖も鬱蒼たる山岳は時に膏雨を醸し五風十雨良く生産の業に適せり冬季は平均気温四十度を示し疾風雪を飛ばすの日多きに居るも其原因たるや土地固有の気温の支配に依るにあらずして遠く西比利亞大陸の寒風廣漠たる日本海を越へ沿岸近く東方に流るゝ所の黒潮より上騰する多量の水蒸氣を受け之れを凝結して降雪を見るの現象に外ならざるなり然れども雪積むに至れば寒氣漸く弱く随て融雪速かなるを常とし堅氷銀竹の如き主として温度の沈降に基因する現象は稀有に屬せり國誌に徴するに

「百四五十年前までは如何なる所も五六尺以上山谷に在りては丈餘も降りけれども近年其れほどの深雪を知らず平地は大抵二三尺許り深山とてまたに及へることは偶々なり」

とあり而して積雪は爲めに地熱の放散を妨げ大に冬作物の凍害を防ぐに利ありとす如斯氣候概ね濕潤の狀を呈し現に大氣中の湿度は平年百分の七十九を示し随て雨雪なき天氣日數は漸く全年日數の四割強に過ぎす雨

雪の降量に平年二千ミリメートル以上を示せり則此降量は平面積一反歩に對し約十萬九千八百石の給水量に當る

氣象摘要表

平均	空氣溫度(華氏)				空氣溫度(百分中)				降雪水量(純)				快晴				
	冬	春	夏	秋	冬	春	夏	秋	冬	春	夏	秋	冬	春	夏	秋	平均
五七、八	六二、八	七五、〇	五三、一	四〇、五	七九	八二	七六	七七	二、一〇、〇	五二七、一	四八三、三	三六九、一	七三〇、五	三三	三三	三三	二〇五
計	三九	二一	五	〇	一八	四二	四二	四二	一二六	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	二〇五

第十二 交通

北は日本海に面して避難港に乏しく唯西伯那弓ヶ濱半島の北端にある境港は山陰道に於ける唯一の良港にして船舶常に輻輳す境水道を過き中海に入れば米子港あり港口淺きも亦良港の一たるを失はず其他日本海に面する港灣にありては淀江(西伯那赤崎橋津泊)共に東伯那(青谷)賀露共に氣高郡(網代浦富)共に岩美郡等を主なるものとす然れども悉く北方に面するを

來を経て美保關に向はれたるは弓ヶ濱南部の水道を經過せられたるなりと傳ふ

第十 鑛泉

因伯は火山脈に富めるを以て鑛泉の湧出する亦多く左の如し

鑛泉名	郡市村名	泉質	温度(華氏)	摘要
岩井温泉	岩美郡岩井村	鹽類泉	百十七度	鳥取市ヨリ五里
鳥取温泉	鳥取市吉方村	鹽類泉	百十度乃至百二十度	鳥取市元標ヨリ十丁
吉岡温泉	氣高郡吉岡村	鹽類泉及硫酸泉	百十度乃至百三十四度	鳥取市ヨリ二里半
濱村温泉	同 郡正保村	硫酸泉	百六度乃至百九度	濱村停車場ニ接近シ濱村及隣見ノ二ヶ所ニアリ
東郷温泉	東伯郡松崎村	鹽類泉及硫酸泉	百十度乃至百五十度	地ノ湯井ニ淺津村ニモアリ
關金温泉	同 郡矢送村	鹽類泉及硫酸泉	百十、六、度	倉吉停車場ヨリ三里半
三朝温泉	同 郡三朝村	炭酸泉及硫酸泉	百十度乃至百四十五度	倉吉停車場ヨリ約三里三朝及山田ノ二ヶ所ニアリ

第十一 氣候

陸地を距ること約十里の海上に黒潮の暖流西より東に流るゝを以て氣候

比較的溫暖なり氣象區は第四區に屬し地勢峯巒に富み南方を圍むに中國山脈を以てし其支脈北に走りて海に盡き東西の二面を包み而して北一帶海に面するを以て四時の氣流概ね順調なり東風は土俗之を阿由乃風と云ひ春は寒氣を帯ひ夏秋は清涼を送りて良く健康に適す西風は之を久呂波惠と稱し秋候晴日の前表として農民漁夫の喜ぶ所となるも此風位の稍南方に偏するものは裏西と稱へて多くは風雨の前兆と爲り往々農作物を害するの虞あり又其の北方によるを沖西と稱へ空氣の乾燥したるときに起り快晴の天氣之に伴ふも永く繼續することなきを常とす而も冬春の候に於ける北西の風威は屢々不穩の天候を誘起し氣象警報は頻繁に海上を警戒して爲めに漁業海運の便を缺くと雖とも四月より十月に至るまでは概ね北東の和風にして此季節は海上平穩通商貿易の海運に依りて利するどころ多く漁業又時を得て帆影を絶たす一年間漁獲高の約八割は殆んど此季節に於てす

空氣の温度は全年の平均華氏五十七度を示し盛夏の候は平均七十五度に

して蒸熱高しと雖も樽者たる山岳は時に膏雨を醸し五風十雨良く生産の業に適せり冬季は平均氣温四十度を示し疾風雪を飛ばすの日多きに居るも其原因たるや土地固有の氣温の支配に依るにあらすして遠く西比利亞大陸の寒風廣漠たる日本海を越へ沿岸近く東方に流るゝ所の黒潮より上騰する多量の水蒸氣を受け之れを凝結して降雪を見るの現象に外ならざるなり然れども雪積むに至れば寒氣漸く弱く隨て融雪速かなるを常とし堅氷銀竹の如き主として温度の沈降に基因する現象は稀有に屬せり國誌に徴するに

「百四五十年前までは如何なる所も五六尺以上山谷に在りては丈餘も降りけれども近年其れほどの深雪を知らず平地は大抵二三尺許り深山とても丈に及へることは偶々なり」

とあり而して積雪は爲めに地熱の放散を妨げ大に冬作物の凍害を防ぐに利ありとす如斯氣候概ね濕潤の狀を呈し現に大氣中の湿度は平年百分の七十九を示し隨て雨雪なき天氣日數は漸く全年日數の四割強に過ぎず雨

雪の降量に平年二千ミリメートル以上を示せり則此降量は平面積一反歩に對し約十萬九千八百石の給水量に當る

氣象摘要表

平均	空氣溫度(攝氏)		雨雪水量(耗)	天 氣		日 數
	冬	春		快 晴	曇 雨	
冬	四〇・五	七 七	七三〇・五	〇	一 八	七 二
春	五三・一	七 六	三六九・一	五	四 二	四 五
夏	七五・〇	八 二	四八三・三	二 一	三 三	三 八
秋	六二・八	七 九	五二七・一	八	三 三	五 〇
平均	五七・八	七 九	二、一〇〇・〇	計 三四	一 二 六	二 〇 五

第十二 交通

北は日本海に面して避難港に乏しく唯西伯郡弓ヶ濱半島の北端にある境港は山陰道に於ける唯一の良港にして船舶常に輻輳す境水道を過き中海に入れば米子港あり港口淺きも亦良港の一たるを失はず其他日本海に面する港灣にありては淀江(西伯郡赤碓橋津泊)共に東伯郡(青谷)賀露共に氣高郡(網代)浦富(共に岩美郡)等を主なるものとす然れども悉く北方に面するを

以て一旦風雨に際は波濤を防ぐに足らず且海岸淺くして船舶の碇泊に便ならず

港灣浚渫事業

境米子及賀露の三港浚渫の目的を以て明治三十九年八月新たに浚渫船及土砂受船を造り又曳船用小蒸氣船を購入し同九月境港の浚渫に着手し現に同港の浚渫に従事しつつあり追次三港の浚渫を完了せんとす今其港灣別浚渫土坪及其工事豫定期間等を表示すれば左の如し

港名	浚渫後ノ水深		浚渫土坪		期間
	千潮面以下	千潮面以上	坪	方	
境	十八尺	十五尺	五、五〇〇	〇	十六ヶ月
米子	同	同	七、二〇〇	〇	四十一ヶ月
賀露	同	十二尺	〇	〇	六ヶ月

陸路に在つては東南及西の三方にある國境を限れる山脈を貫きて道路を開き以て他管と交通す管内に於ける道路は殆んど普く通したるも現今尙ほ其枝道を開鑿しつつあり

山陰道を貫通すへき山陰鐵道は明治三十五年其の分支線たる縣下境港より米子町(分基點之れより東播但線和田山に至るを山陰東線と云ひ米子以西を山陰西線と云ふ)を経て明治四十年鳥取市に達せり而して鳥取市より岩井及浦富を経て兵庫縣和田山に達し以て播但鐵道に連絡し更に一方福知山に通して山陰を縦貫し交通の便を得るに至るは蓋し數年を出てさるへし

鐵道

郡市名	停車場名	哩	數	累計
鳥取市	鳥取	鳥取ヨリ	二、七	二、七
高取郡	高取		六、三	九、〇
同	同		一、八	一〇、八
同	同		三、二	一四、〇
東伯郡	青谷		三、八	一七、八
同	松崎		三、六	二一、四
同	倉吉		三、四	二四、八
同	山本		六、二	三一、〇

同	同	同	同	播	同	美	同	因
						磨	作	橋
姫	上	久	佐	平	大	坂	駒	智
					原		此間に駒蹄坂あり	
路	郡	崎	川	福	町	根	路	頭
二二六	二二九	二二三	一一八	三二〇	二二七	〇三五	二二〇	二二七
								八〇四
								一〇三四
								一一三三
								一四二四
								一七三五
								一九一七
								二二〇三
								二四二二

岡山街道

岡山街道は鳥取より作州津山を経て岡山に達する通路にして智頭宿津山間には二線路あり途中には物見峠又は馬桑峠あり

物見越線

同	因	國
	橋	名
智	島	宿
頭	取	驛
		名
		里
八〇四		程
		累
		計

馬桑越線

備	同	同	美
前		作	
岡	津	橋	加
山	山	村	茂
			此間に物見峠あり
三五三	二二五	三一〇	六二八
			一四三二
			一八〇六
			二〇三二

鳥取米子間

鳥取米子間には國道貫通す

備	同	美	同	因	國
前		作		橋	名
岡	津	行	智	島	宿
山	山	方	頭	取	驛
					名
					里
三五三	五二七	五二三	八〇四		程
					累
					計
					一九〇九
					一三一七

同	同	美
同	同	作
津	久	湯
山	世	木
四、二九	五、二三	四、三一
一七、二九	一三、〇〇	七、一三

出雲街道(國道)

岡山市より津山、勝山、板井原を経て米子町に達す勝山、板井原の間に四十
曲りあり

同	同	同	美	同	同	同	同	伯
同	同	同	作	同	同	同	同	寄
久	勝	美	新	板	根	江	勝	米
世	山	甘	庄	井	原	雨	尼	口
一、二八	三、二六	一、三三	二、二三	一、三三	一、三三	二、二二	三、一四	四、一四
一七、〇八	一三、一七	九、一七	一、一三〇	七、二一	五、二六	一、一三〇	一、一三〇	一、一三〇

廣島街道

管外より米子を経て出雲隠岐に往復するには此線路に依る
廣島市より可部、吉田、三次、庄原、川島、多里を経て米子に達す多里、川島間に
陰陽山脈あり

同	同	同	同	伯
同	同	同	同	寄
久	勝	美	新	米
世	山	甘	庄	子
一、二八	三、二六	一、三三	二、二三	三、一四
一七、〇八	一三、一七	九、一七	一、一三〇	一、一三〇

ひ津居山に寄港するものごあり共に阪鶴鐵道會社の營む所にして全會社連絡線の航路なり

隱岐航路

隱岐國島後の西郷より境港に達す途中島前知々井港及び美保關を經るものは航海六時間津戸菱別府浦郷知夫崎村美保關に寄港するものは約十時間を要す境西郷間双方隔日の發着とす

大家漁船會社の航路

此の航路は日本海沿岸の諸港と浦鹽間の航路にして西廻り線と東廻り線とあり共に境に寄港す

第十三 通信

縣下には左記郵便局に於て電信事務を取扱ふ

局名	所在地	局名	所在地
島取郵便局	島取市本町三丁目(曾根街道邊)	由良郵便局	東伯郡由良村大字由良宿

岩井郵便局	岩美郡岩井村大字岩井宿	介吉郵便局	同 郡倉吉町大字東岩倉町
浦宮郵便局	同 郡浦宮村	赤碓郵便局	同 郡赤碓町大字赤碓宿
郡家郵便局	入頭郡賀茂村大字郡家村	御來屋郵便局	四伯郡御來屋町大字御來屋宿
若櫻郵便局	同 郡若櫻村大字若櫻宿	淀江郵便局	同 郡淀江町大字淀江宿
智頭郵便局	同 郡智頭村大字智頭宿	米子郵便局	同 郡米子町大字西倉吉町
川瀬郵便局	同 郡川瀬村大字川瀬宿	境郵便局	同 郡境町
賀露郵便局	氣高郡賀露村	海口郵便局	日野郡海口村大字海口宿
吉岡郵便局	同 郡吉岡村大字吉岡村	二部郵便局	同 郡二部村大字二部宿
鹿野郵便局	同 郡鹿野町大字鹿野町	根雨郵便局	同 郡根雨村大字根雨宿
青谷郵便局	同 郡青谷村大字青谷村	黒坂郵便局	同 郡黒坂村大字黒坂宿
橋津郵便局	東伯郡橋津村大字橋津村		

然れども漸次人文の發達に伴ひ電信置局を要する處尠からず

第十四 産業及物産

因伯二州富源の資料なきに非らざるも天興の富源と縣民の財力とに比較すれば寧ろ不振の状況にあるを免れず藩政當時に於ても財政亦豊ならずして主に産米を以て財源となしたるか如し廢藩置縣の後士族授産等のために力を致したること尠なからざりしか爾來養蠶の業盛に起り生糸及蠶種

は其の名聲を博す産牛地の名亦四近に開へ近年優良なる種牡牛の配置に依りて愈々改良の緒に就けり今日に於ては米蠶業及畜産業を以て本縣の主たる産業となすに至れり紙の原料は因幡及東伯の一部に多し然れども其の製品の名未だ汎く市場に開へず林産物は八頭の一部に於て昔より良材を産出し近年造林の業益々發達す鑛山は其の試掘を出願するもの漸く多きを加へたるも日野郡の鐵を除く外未だ其の名現はれたるものあらず日野郡の鐵は隣接せる雲州産と共に雲伯鐵と稱へ品質良好の故を以て兵器其の他の用に供す共に花崗岩中の砂鐵より製煉せらるる水産物は亦運搬機關の備はらざるかため其の需用區域極めて狭かりしも近頃京阪地方との聯絡輸送開け新たに京阪神戸等の市場に販出するに至れり其の他陶器漆器織物等の業ありと雖主として地方の需用に充るに止まるのみ然れども交通機關の發達は自然經濟的狀態に變化の兆を示せるを以て漸く一般に實業に關する注意と奮勵とを促し戦後經營に對し相當の施設企業をなすものあるに至る

縣下に於ける生産物の主なるものは左の如し

品目	産額	價額	主産地
米	五二七、〇三〇	六、一六三、〇八八	平年ノ收穫高凡ソ五十五萬石ニシテ收穫ノ多キハ東伯郡ヲ第一トシ西伯郡ニ次ク米質良好因幡同業組合及地酒米取組規則ヲ以テ米製及俵製ノ改良ヲ志シツテアリ
麥	一七三、八一六	一、三三三、九三三	縣下一般ニ産出セサル所ナシ品質凡テ良好ナリ
大豆	一一、七一八	一、二〇、六二〇	縣下各郡ニ生産シ收穫ノ最も多キハ八頭郡ニシテ西伯日野岩美之ニ次ク品質欲レモ好ナリ
甘藷	六、七三六、三五四	三〇七、九七六	縣下各郡ニ産ス産出高ノ多キハ西伯郡ヲ第一トシ東伯氣高之ニ次ク近年各郡トモ増收ニ進ミツテ
蘿蔔	五、二四六、五二六	九六、九二〇	縣下各郡ニ産ス産出高ノ多キハ東伯郡ヲ第一トシ八頭西伯氣高岩美之ニ次ク近年増收ニ進ミツテ
實類	二六四、七一四	一六六、三五七	西伯ノ主産ニ係リ品質ハ漸次進歩シツテアリト雖モ輸入綿花ノ壓倒ヲ受ケ近年收穫退歩ノ狀況ニア
果實類	四〇九、三九八 五八九	七五、〇九三	縣下各郡ニ産ス近來殊ニ種類推擇ニ意ヲ注キ年々圃圃ノ増設アリテ發達ノ實狀ヲ呈ス將來有望ノ事業ニ屬ス
業煙草	八〇、七六四	五一、四七五	主トシテ日野八頭ノ兩郡ニ産ス年々巡回教師ヲ聘用スル等ヲ獎勵中ニアリ
繭	三〇、五二二	一、一九六、一三九	近來一校長足ノ發達ヲナシ孰レモ甲乙ノ差ナシ各郡市ニ蠶糸同業組合ノ設アリ原蠶種製造所ト相俟ツテ種類品質ノ一定ヲ期シツテアリ
和紙	六九、八二三	二〇一、六一三	製造上改良ヲ加ヘツテハ將來凡レキモノナリ ント六目下製紙同業組合ヲ設立中ナリ

織物	蠶絲	酒	醬油	流産物	水産製造品	牛	豚	牛乳	肉	林産物	楮三極雁皮
五三、五一四	二五、四八四	四一、三九四	一〇、一七三	五六七、四四一	六九、七八五	九、一七五	三八六	八〇九	四七六	用材、薪炭材、 其他雜類	三六五、七九九
一〇二、八八八	一、三九五	一、二五九、九〇九	一一二、七四七	二七、一三一	六〇、六九四	四一四、九九〇	二〇、九九〇	一四、五六二	一七、四八〇	五三、三六三	一〇六、一〇七
<p>品質漸次優良ノモノヲ出ス統中倉吉飛白ハ著名ノモノニシテ他ノ名産地ヲ凌駕スルノ勢ナリ 生産額ハ近年増加シ其ノ品質ハ年々精進シモノヲ名産山陰製糸會社ノ米子製糸會社ノ如キ最モ其ノ名ヲ博ス 醸造商ノ多キハ西伯郡ヲ第一トシ東伯郡及鳥取市等之ニ亞ク年々品質會社ヲ閉キ改良上ノ速進ヲ圖リ酒造組合ハ之ガ改良ヲ努メツ、アリ 釀造法ノ改良ニカメ年々進歩ノ趨勢ニアリ</p> <p>水産試驗場ノ設置以來漁撈製造共ニ大ニ進歩シ近來長足ノ發達ヲナシタリ</p> <p>改良ノ増殖ニカマルコト久シ三十六年ヨリ縣立種畜場ヲ設ケ指導ノ機關ヲラシメ且馬匹ニアリテハ昨年ヨリ種畜場ヲ大ニ改良シ且馬匹ニアリテハモノアリテ種畜場ヲ設ケ其ノ効果大ニ見ルヘキ加シ將來大ニ見ルヘキモノアラントス</p> <p>需用ノ増加ニ伴ヒ牛種及牛舎ノ改良ニカメ漸次發達ノ實績ヲ呈シツ、アリ</p> <p>逐年屠殺ノ數増加シツ、アリ</p> <p>縣立模範林地ヲ設置シ植林指導ノ機關ヲラシメ著々獎勵中將來ニ有望ナリ又木材同業組合ハ之レガ改良ノ努メツ、アリ</p> <p>縣下各郡ニ産山出高ノ多キハ八頭郡ヲ第一トシ氣高、東伯之ニ亞ク年々増收ノ城ニ進ミツ、アリ</p>											

鐵ハ日野、西伯ノ兩郡ニ産シ大ニ改良ヲ加ヘ近來軍用品ヲ出スニ至レリ

第十五 都市區劃及戶口及公共團體
並ニ地目段別

都市區劃及戶口

郡市名	町村役場數	現住戶數	現住人口
鳥取市	—	六、三八四	三一、八〇九
岩美郡	—	七、四二〇	四三、三五一
八頭郡	—	一〇、四四四	六一、九五三
氣高郡	—	八、九六八	五一、〇三四
東伯郡	—	一七、〇五九	一〇〇、一九一
西伯郡	—	二二、六二八	一一〇、七四二
日野郡	—	七、〇四七	三六、五六九
合計	—	七九、九五〇	四三五、六五〇

公共團體

郡市名	町村數	町村組合數	町村學校組合數	水利組合數	普通水利組合數	水害豫防組合數
鳥取市	—	—	—	—	—	—
岩美郡	—	—	—	—	—	—
八頭郡	—	—	—	—	—	—
氣高郡	—	—	—	—	—	—
東伯郡	—	—	—	—	—	—
西伯郡	—	—	—	—	—	—
日野郡	—	—	—	—	—	—
合計	—	—	—	—	—	—

岩美郡	二九	四	四	二	二
八頭郡	三八	六	一	一	一
氣高郡	三三	四	四	一	一
東伯郡	五七	二	一	一	一
西伯郡	四八	一	一	一	一
日野郡	二九	一	一	一	一
計	二三四	五〇	三五	八五	三〇

郡市別民有地段別

郡市名	田	畑	宅地	山林	鹽田	原野	礦山地	池沼	牧場	雜種地	合計
岩美郡	二八、八五七	六、四〇七	一、一〇〇	一、一〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	二八、八五七
八頭郡	二八、八五七	六、四〇七	一、一〇〇	一、一〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	二八、八五七
氣高郡	二八、八五七	六、四〇七	一、一〇〇	一、一〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	二八、八五七
東伯郡	二八、八五七	六、四〇七	一、一〇〇	一、一〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	二八、八五七
西伯郡	二八、八五七	六、四〇七	一、一〇〇	一、一〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	二八、八五七
日野郡	二八、八五七	六、四〇七	一、一〇〇	一、一〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	二八、八五七
計	二八、八五七	六、四〇七	一、一〇〇	一、一〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	二八、八五七

第三章 名所舊蹟

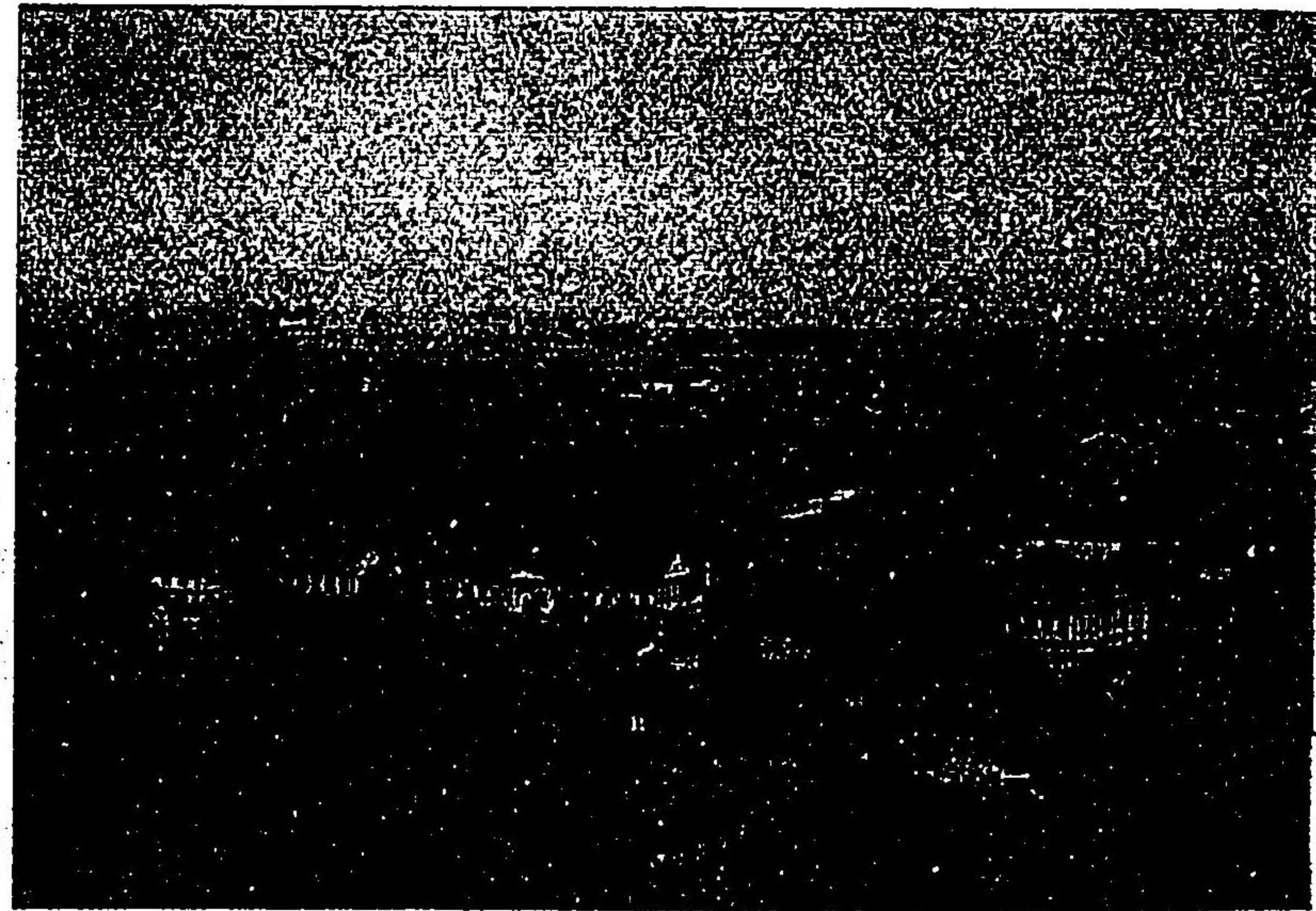
第一 鳥取市

鳥取市は因幡國久松山の麓にあり山陰道中有數の一大都會なり因幡伯耆二國を管轄する鳥取縣廳の所在地にして又歩兵第四十聯隊の衛戍地なり東西三十町南北一里三町面積零方里八分八厘戸數六千三百八十餘人口三萬一千八百餘を有す地勢平坦袋川一名稻葉川は市の一角を環流して西北に向ひ千代川と合して北海に入る久松山は即ち其の東北を擁し山勢突兀遠望略ほ圓錐狀をなす老樹鬱然蒼翠染むるか如し栲路源太の諸山其の東に連なり西は則ち湯所那金の諸山脊背相續く春の櫻花夏の陰翠秋の楓色冬の雪景何れも畫境ならざるは莫し官線山陰鐵道は既に境本市の間に通す其の但馬國和田山に達し山陽道と連絡する將に數年の間に在らんとす

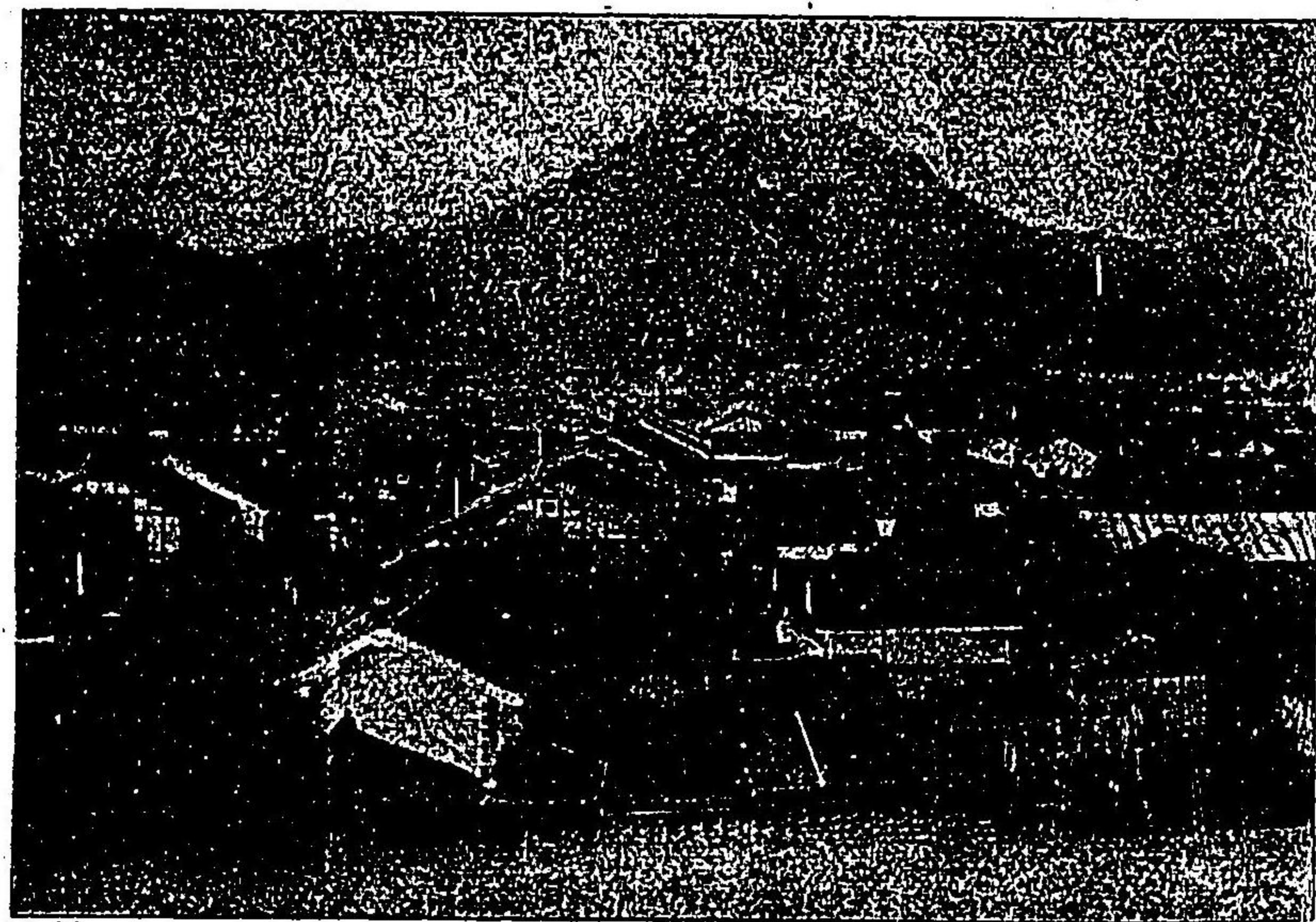
鳥取城趾

鳥取城跡は即ち久松山にあり山高く眺め潤にして南は菅水の諸山より西は三國鷲峰の高嶺を望み北は渺茫たる日本海を下瞰し前には稲葉千代の諸川を控へ岩美八頭氣高の平野湖川盡く一眸の間に集まりて諸所の形勢一々指點すべく山河の景勝絶佳なり

天文十四年布施城主山名誠通其臣田原某をして鳥取城を築かしむ永祿六年山名氏の臣武田高信叛て之に據る天正の初め山名豊國高信を誅し布施より移て之に居る九年羽柴秀吉の包圍を受け守將吉川經家等自殺城陥るの後秀吉之を宮部經潤坊に授く慶長六年徳川氏更に之を池田長吉に賜ふ長吉本城を改築す初め本城の天守閣は久松山嶺にありて三重三十八棟なりしか長吉雷火を虞り二重櫓に改造せり又城の門櫓を高くし瀧池を穿ち繞らして長堤を外郭に築き柳を列植す之を柳堤と稱す又城外に袋川を繞らし三條の通路を開き東を鰻町中を中町西を興次右衛門町となす池田光政入國の後鳥取城の規模狹隘なるを以て更に日置豊前をして城中を擴張せしむ袋川の水路を改め吉方松ヶ崎の邊よ



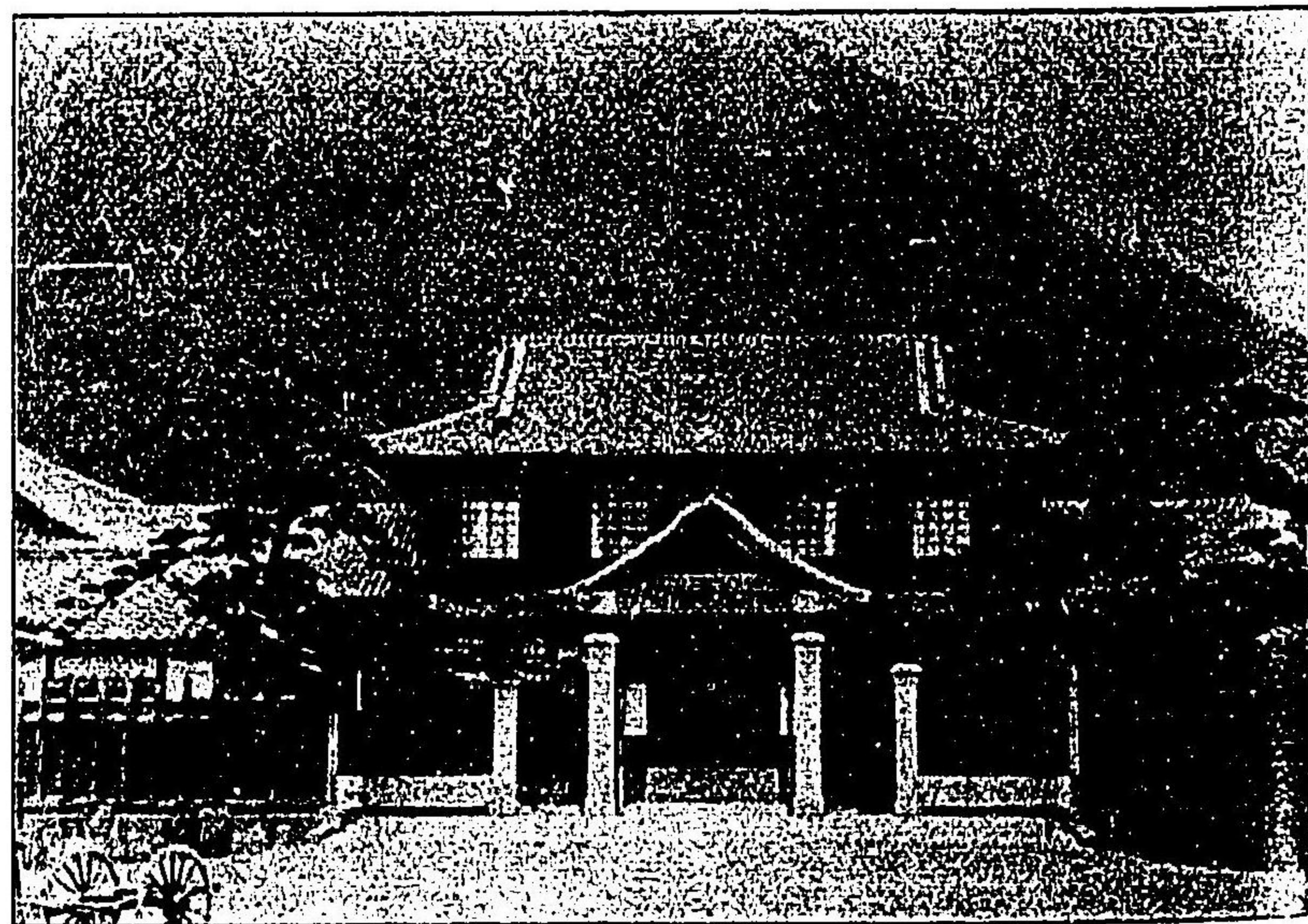
(△望リ 城址) 街市取鳥



(△望ヲカ北東ノ市) 街市取鳥



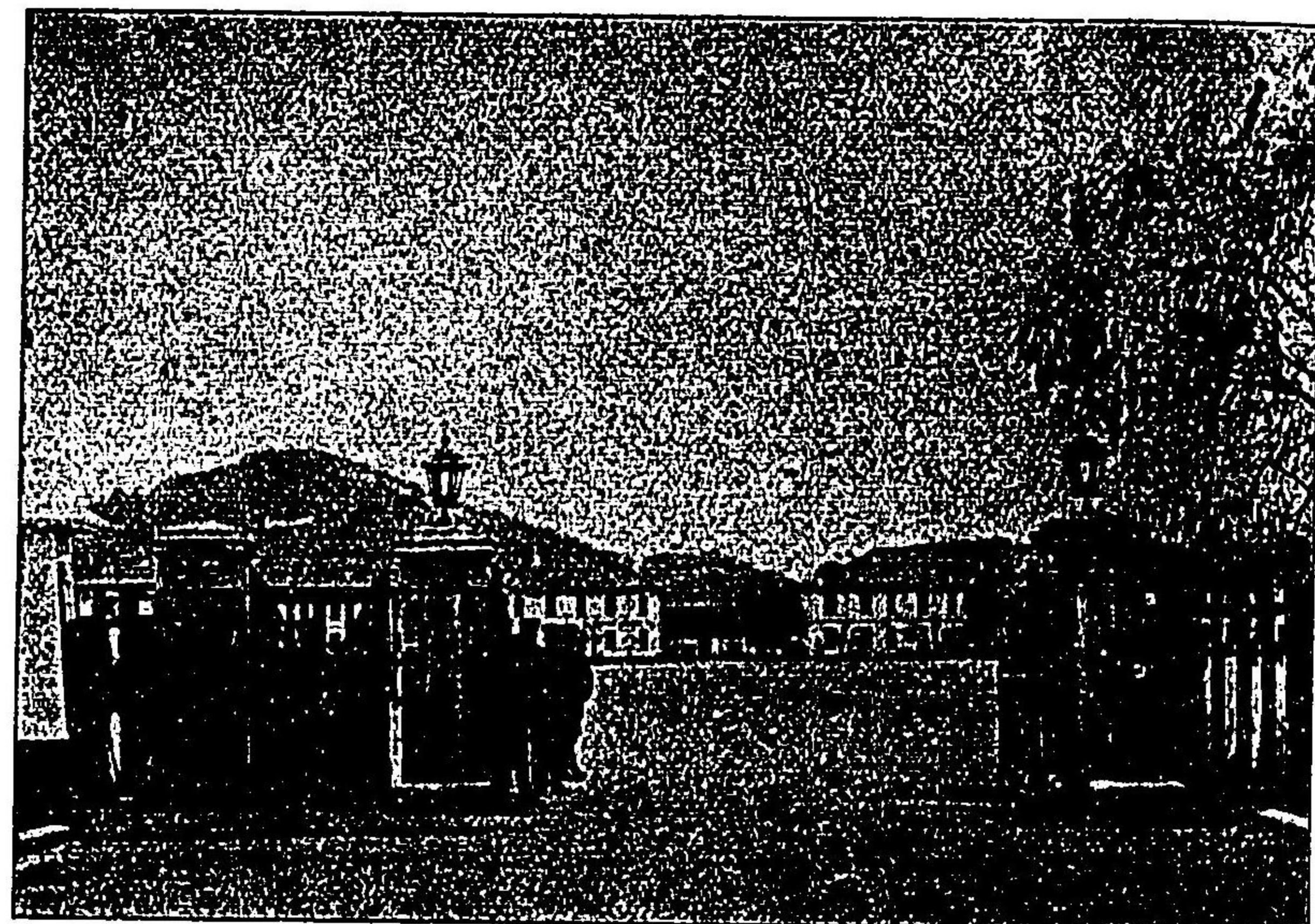
鳥取縣廳



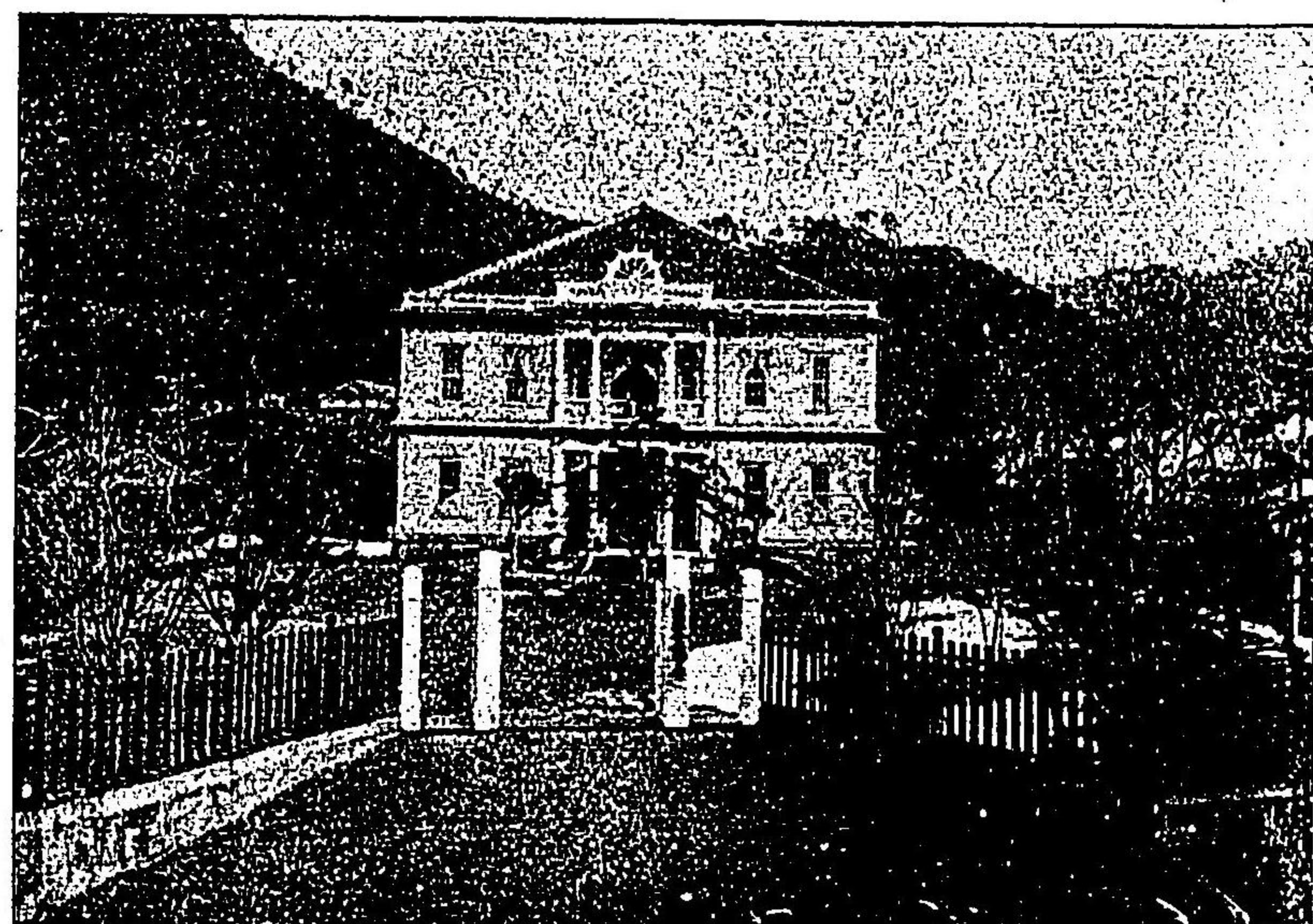
鳥取地方裁判所

鳥取縣廳

鳥取地方裁判所



步 兵 第 四 十 四 聯 隊



烏 取 縣 會 議 事 堂

り湯所平田に至り今の出合橋の畔十四五町許りの所に流出せしむ幅七
間深三間半とす架するに五橋を以てす又柳堤以内を侍屋敷と改め以外
を市廛となし町數凡そ四十を畫す光仲入國後増して四十八町家數凡そ
六千八百に至る貞享三年天主閣雷火の爲に災す元祿五年復た災し中坂
門を延焼す享保元年外城を築く同四年功竣る享保五年四月城南吉方町
より出火し本城外城諸廡舍門櫓盡く延焼し市街の大半烏有に歸せり之
を鳥取の大火とす同六年再び城廓を經始し三年を費して成る明治維新
後池田氏本城を去ると與に城亦廢頽す

吉川經家式部少輔と稱す吉川元春の家臣なり毛利の威を中國に振ふや
鳥取城主山名豊國之に屬す天正九年羽柴秀吉織田氏の命を受けて山陰
を經略するに及て豊國款を秀吉に通せんとす長臣森下道裕中村春次等
之を聽かず豊國遂に奔りて秀吉に投す道裕春次等相議して毛利氏に請
ふに主將を得んことを以てす經家偶々因幡に在りて諸城を檢察す毛利
氏乃ち之に命じて兵を率ひ鳥取を守らしむ城兵四千餘經家才文武を兼

ね智三軍に絶す資性寛厚仁義を以て軍政を行ふ士民心服す秀吉來攻の報あるに及んで經家乃ち鹽谷周防に雁金山を奈佐日本助に丸山を守らしめ壘を築きて本城と相連絡す六月秀吉果して數萬の大軍を以て因幡に入り鳥取城を距る東十餘町なる高山（粟谷の奥本陣山又）に陣し兵を分て鳥取城を圍む城兵殊死して拒き戦ふ秀吉容易に抜く能はず乃ち壘を築き糧道を奪ふて長圍の策をなす城兵漸く苦む既にして宮部善祥坊奮戦して本城雁金山間の一要所を奪ひ以て彼此の交通線を斷つ守將鹽谷去て丸山城に入る二城孤立す秀吉機に乗して肉薄城を圍む十月中旬に及んで城中糧食全く盡き士卒飢れて起つ能はず經家之を視るに忍ひす遂に其の重臣福光小三郎を敵陣に遣はし自殺して城を開き以て士卒の死を宥めんと請ふ秀吉之を義とし答て曰く經家は毛利氏の客將なり罪輕し森下中村の輩は主を逐ひて我に敵す其の罪有す可からず三人自殺せは即ち士卒の死を免せんと經家之に従ふ秀吉淺野長政をして酒肴を贈りて多日籠城の勞を慰せしむ其の書に曰く

御使札之旨令披露畢其城御兩三主以一命可相代衆命之結構秀吉甚以感被申候即柳一荷行器十荷肴五種被送入候御望之儀彌不可有相違之道御兩三人之相心得可被申候恐惶謹言

十一月廿三日

淺野 彌兵衛尉

福光 小三郎殿

回 章 參

經家等服を改めて書簡を拜し酒樽を開きて城兵と訣飲し二十五日山下の寺院に入りて自殺す經家の臣福光小三郎恩從坂田孫次郎之に殉す中村森下從て自刃す堀尾吉晴檢死たり丸山の守將亦自殺す是に於て鳥取城及び丸山城共に陥る秀吉狀を具して經家の首を信長に送る信長之を義とし禮を具して厚く安土の一禪院に葬りしと云ふ經家の靈牌は今猶ほ市中の眞教寺川端一丁目に在り淨土宗にあり其の墳墓と稱せらるるの地は久松山後圓護寺村五段田にあり鳥取城陥りたるの後秀吉宮部善祥坊を留めて鳥取城に據り以て高草八上法美邑美の四郡を治めしむ處

長六年池田長吉(備中守)八上邑美法美巨濃四郡に封せられて鳥取に治するに及んで大に力を城廓の經營に注ぎ爲に城の内外面目を改めしもの渺からず天守閣の如きも亦改構されしなり然れども當時食邑六萬石に過ぎず内外の規模猶未だ宏大ならず元和三年池田光政(新太郎)因幡伯耆の守護三十二萬五千石に封せられて鳥取に治せしより城中城外の規模を擴張せしか繼て寛永九年に至り因備兩國の國替となり乃ち池田光仲備前より因伯太守に移封せられし以來明治の政變に至る迄歴代池田家の治城となりしも惜むへし維新後城櫓を毀壞し城壁を撤去し今は唯た礎石城壕を剩せるのみ

鳥府全城

伊藤 丈庵

白鹿遊來幾十秋

怪松映綠玉城幽

唯今四海爲家日

遠識崎函輪一籌

松城秋月因州一

堀 敦 齋

月出松城宿雨收

滿輪涼氣入初秋

清風白露千門夕

遍放輝光照二州

扇邸

舊藩主居城の中に一殿あり扇御殿と稱す母公柘隱の所たり維新の後之を毀ちしか頃者池田家之を再建し結構壯麗輪煥美を盡くせり

樗谿神社

鳥取市上町字樗谿にあり元藩主池田光仲の願主にて日光東照宮の分靈を請せるもの慶安三年九月の創立に係る維新後藩士等池田忠繼忠雄光仲の三靈を奉祀し明治十一年更に池田慶徳の靈を奉して之を祭る寶物には尊純法親王維東照宮の額狩野守信の畫白鹿の額及同人三十六歌仙の額等あり境内溪深く水清く飛瀑岸に懸り幾百年の老杉古松樽若針立し晝尙暗きの間洞宇參差として隠現す三伏の交人をして炎威の何物たるを覺えさらしむ蓋し獨り鳥取市内第一の境たるのみならず自ら縣下有數の靈地なりとす

題權現堂

和久田 永三後收伯

尊靈一社在城東

寂々山間淡冷中

斷岸掛流如白練

清池無浪似青銅

長藤高架花繁麗

群樹叢生葉蔚葱

景入吟囊空飽愛

幽情更適慰吾躬

鳥取招魂社祭

鳥取市上町字栲絲にあり栲絲神社と接續して自から一區の公園をなせり當社は戊辰の役奥羽に於ける戦死者の靈を祭祀したるに起原し爾後明治十年西南戦役明治二十七八年日清戦役明治三十七八年日露戦役に於ける戦死者及維新前後國事に殉したる志士千四百七十六名の靈を合祀せり舊と邑美郡行徳村字角臺河原にありしか後幾轉して此の地をトせり境内幽邃にして三面山を負ひ春花秋葉騷客の節を曳くもの多し

興禪寺寺

鳥取市栗谷町町にあり黃檗宗にして本尊は釋迦牟尼佛なり舊藩主池田家の菩提寺なりしか今は舊時の壯觀なしと雖も山を負ひ溪に臨みて境内



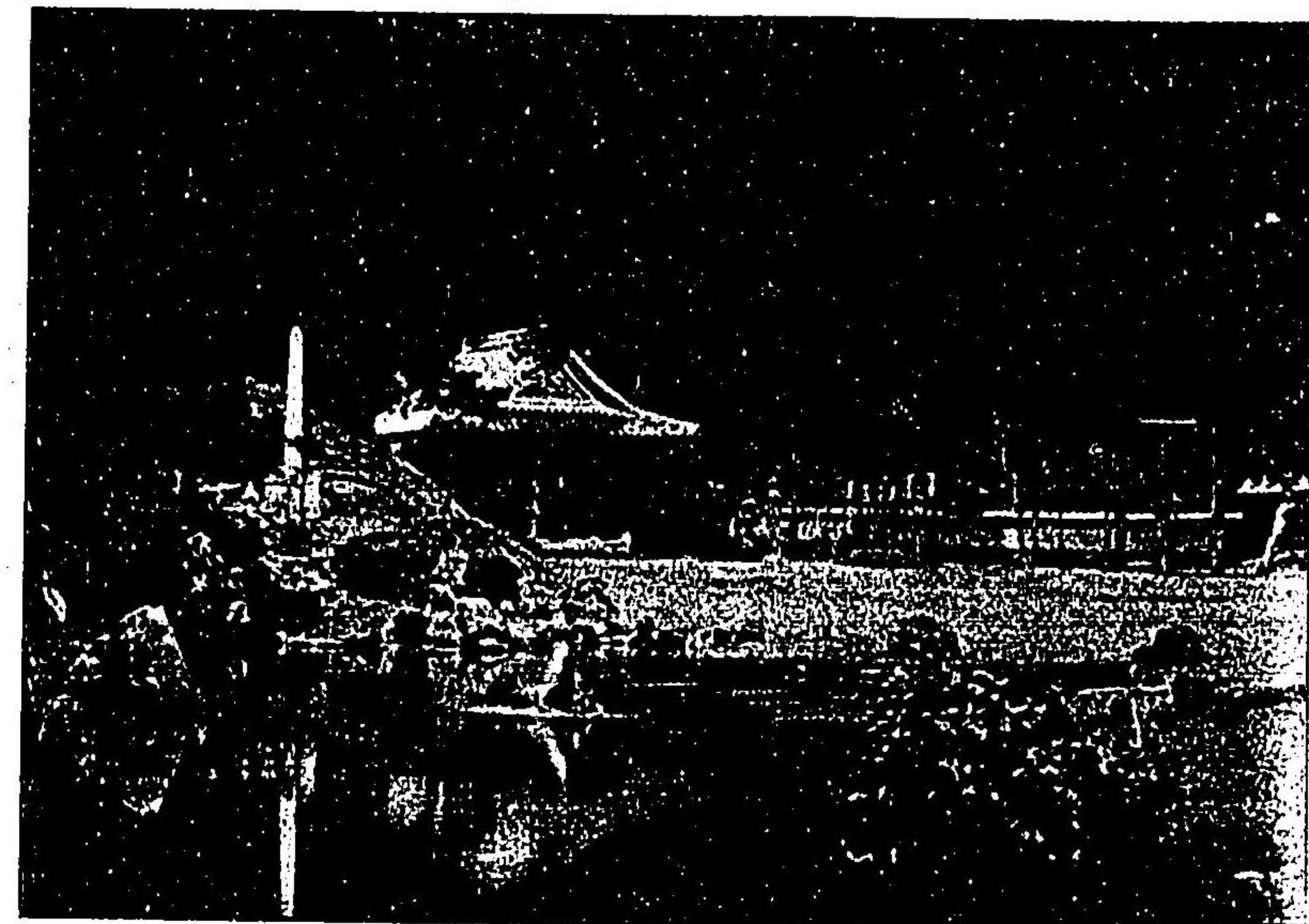
鳥取城舊形



池田侯別邸庭園



縣 社 栲 溪 神 社



鳥 取 招 魂 社

清穆四時の景賞すへきものあり寶物には兆殿司の十六羅漢唐僧の畫幅等最も名あり堂背の邸上に渡邊數馬の墓あり數馬は即ち荒木又右衛門の妻弟にして伊賀の上野に弟仇河合又五郎を討ちしを以て世に知らる寛永十九年十二月二日享年三十五にして歿せり法名して一岳玄了と云ふ

玄忠寺

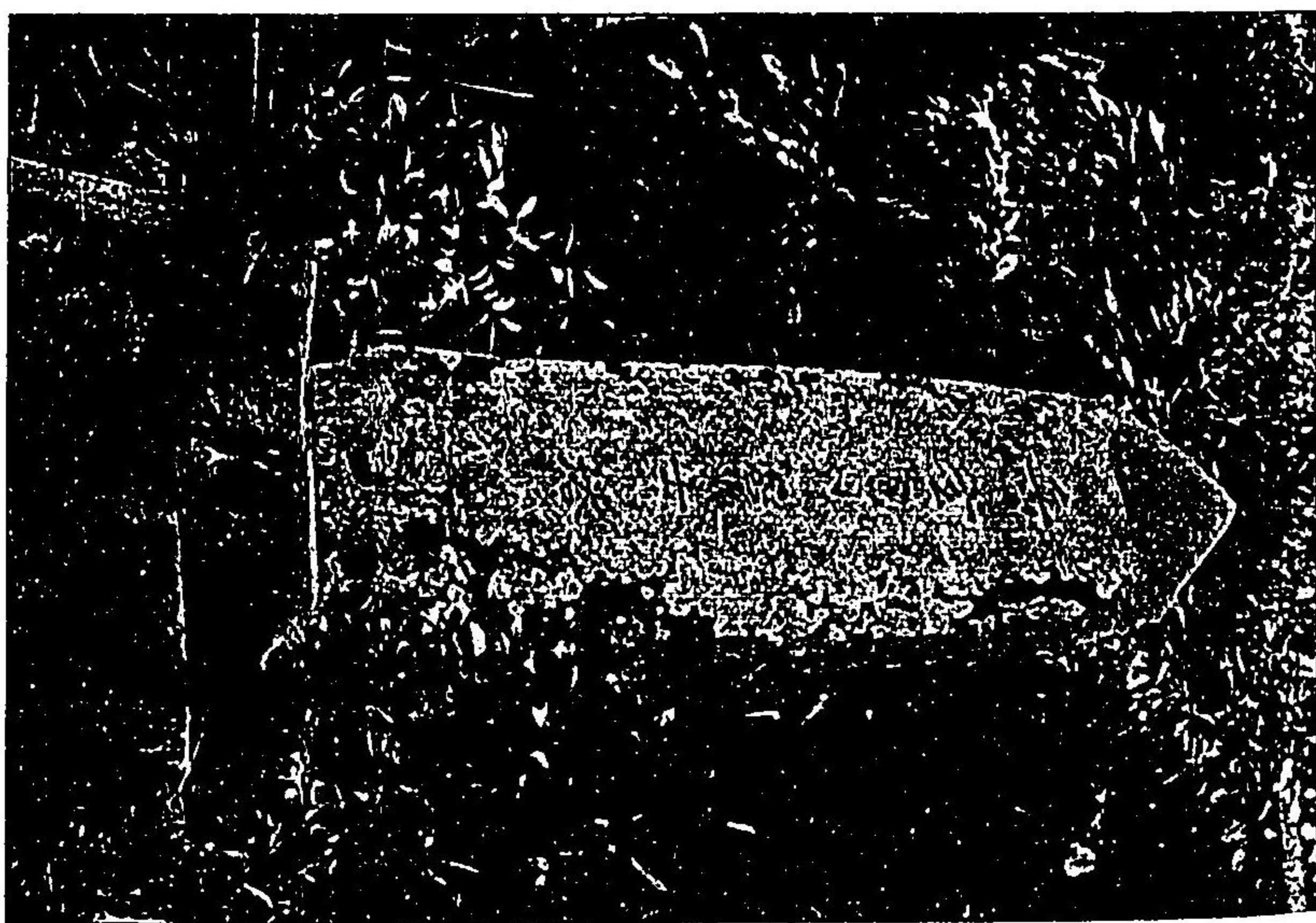
鳥取市新鑄物師町にあり淨土宗本尊は阿彌陀如來にして市内有數の大寺なり寺門の左傍に荒木又右衛門の墓あり畫伯黒田稻草の墓亦寺内にあり

荒木又右衛門は本と伊賀國阿拜郡荒木村の人本姓服部幼にして簪力あり深沈にして大度最も劍術に長し柳生十兵衛宮本無三四に就て奥義を極む郡山侯に仕ふ渡邊數馬は備前藩主池田忠雄の臣にして其の妻弟なり寛永七年七月二十一日數馬の弟源太夫其の宅に於て同藩士河合又五郎の爲に殺さる數馬偶々他にあり變を聞て歸り直に又五郎を

追ふ又五郎在らず。藩主乃ち又五郎の父半左衛門を捕ふ。又五郎既に遁れて東走し、江戸に至り、幕府の旗下安藤治右衛門に頼る。忠雄其の知る所の旗下の士久世安部兩人を介し、安藤に告げて曰く、又五郎を興へすんは半左衛門を刑殺すへしと。安藤等陽はに忠雄の言を聞く爲ねして、又五郎を興へす併せて半左衛門を奪ふ。忠雄大に怒る。池田家親近の諸侯は相結ひて忠雄を助けて、旗下の士亦た相合して安藤等を援く。府下騒然たり。偶々忠雄卒す。嗣子光仲封を因伯二州に移さる。藩士皆鳥取に移る。數馬從はず。必ず又五郎を索めて仇を報せん。とす。往て姉婿又右衛門に諮る。又右衛門乃ち仕を辭して之を扶け、數馬と敵を探るもの。年餘具さに辛酸を嘗む。十一月五日、又五郎將に其の叔父河合甚左衛門等と奈良より江戸に上らんとするを、探知し、又右衛門即ち數馬及び從者岡本武右衛門、岩本孫左衛門を率ひて、先づ伊賀の上野に至り、翌六日、又五郎の來るを待ち進て之を撃つ。數馬終に又五郎を墮す。武右衛門傷を被て死す。數馬又右衛門因て藤堂侯に預けられ、伊勢に在ること五



荒木右衛門の墓



邊數馬の墓

年十五年六月幕府兩人を藤堂侯に賜ふ侯乃ち更に之を數馬の親姻幕府の旗下彦坂平六に與ふ池田光仲請ふて又之を受く同年八月藤堂侯士卒百餘人を付して兩人を伏見の因幡藩邸に送る光仲亦た士卒百七八十人を發し之を伏見より因幡に送る同月十三日鳥取に着す越て十數日同月二十八日又右衛門病て歿す年四十法號して秀譽行念禪定門と云ふ

玄忠秋月玄忠寺八

伊藤丈庵

玉葉雲開萬里風

漸看銀鏡轉晴空

心舟認古柔祇雪

還在一刀兩火中

夏月遊玄忠寺

同

上

青松落影遠欄干

況是方池數尺寬

莫抱華嚴容易讀

高僧元自有桺橙

景福寺

鳥取市新品治町にあり曹洞宗にして本尊釋迦牟尼佛なり山緒に曰貞治

三年開山通幼平尾越中守景勝の請に應じ攝津國六瀬村に草創す平尾氏
恭倣に伴ひ當寺も亦衰ふ時に池田輝政播州姫路に治す老臣荒尾隆重之
を姫路に移す後池田氏封を因伯に移すに及んで荒尾氏も隨て移る故に
當寺も三たひ此の地に移轉すと當寺は市内稀に見る所の大寺なり

吉方温泉

鳥取市吉方村に在り鹽類泉にして温度百二十度明治三十七年十一月同
村池内某鑿井の際期せずして温泉湧出し爾來數處に噴泉を見るに至る
浴客日に賑へり此の地は鳥取の郊外に接し萬頭の田圃を隔て、岩美氣
高八頭諸郡の連山を望み頗る風趣に富めり

第二 岩美郡

岩井宿は但馬街道の宿驛にして且温泉場なれば往古より繁盛の地たり
人口二千百六十餘あり又岩井を距ること約一里の所に浦富村あり是れ
又但馬の濱街道に要衝の地且往古より武門の據つて治を爲したる所に

して舊藩の時にあつては藩老の領地に屬し陣屋を構へたるの地今に舊
規を存す海濱には海水浴場あり夏時客多し人口は千七百九十餘とす

聖神社 (鳥取より十三町)

郷社にして祭神神本太理々神富桑村大字行徳村にあり鳥取に接近して氏
子は鳥取市に多し建築莊麗にして稀に見る所のものなり境内は平坦に
して社木樟樹多し

常忍寺 (鳥取より十二町)

富桑村大字行徳村にあり寛保年間の創立に係る日蓮宗にして本尊は一
尊四菩薩なり寶物中巨勢金岡の筆と傳ふ所普賢十羅刹女像の畫幅は國
寶に編入せられたり

八幡宮 (鳥取より一里十五町)

倉田村大字馬場村にあり郷社にして祭神は品多和氣命帶中津彦命息長
帶姫命にして保食神を合祀せり中世毛利元就以來武門の諸將崇敬の神
にして舊藩主池田氏に在ても亦た歴代之を尊崇せり口碑に據るに壽永

文治の交の勸請に依り社殿頗る壯麗なりしも天正の兵火に焼滅し慶長
中池田氏再ひ之を建てたり

池田家の墳墓 (鳥取より一里十町)

國府村大字奥谷村にあり舊藩祖光仲以下歴代の藩主及家眷一族の墓
駢ひ立ち規模頗る宏大なり

宇倍神社 (鳥取より一里十町)

國府村に在り武内宿禰を祀る國幣中社なり因幡の一の宮にして延喜式
に所謂宇倍の神是なり宿禰因幡の國守たり神明帳頭註に風土記を引
て曰く仁徳天皇五十五年春三月武内宿禰歳三百六十餘歳稻葉園下向於龜
金双履殘隱所不知と今當社の後阜を龜金山と云ふ方五尺許り石垣を築
く之れ雙履の殘跡なりと傳ふ本社は元因幡山上に在り大化四年の勸請
に係り結構宏壯なりしか天正年間山中鹿之助の爲に燬かれ古來の寶藏
悉く鳥有に歸し今存するものなし例祭は四月二十一日にして現今の五
圓紙幣に宿禰の像と共に其の圖を載せたる宇倍神社は即ち之れなり

因幡山附因幡川 (鳥取より一里二十町)

因幡山は在原行平の立わかれ稻葉の山の峯に生ふるまつとし聞かは今か
へり來むの和歌を以て天下に知らる國府村に在りて一に宇部野山と稱
す宇倍神社は其の一角に鎮座せり山嶺に高原あり昔時は松樹鬱叢たり
しも池田氏鳥取城修營の際用材として伐採し一山爲に禿し高原となり
しと云ふ國府村は昔時國廳の存在せし所にして行平因幡の守として此
に在り任滿ちて都に歸る時人に寄するの一短歌を口詠せしなりと傳ふ
因幡山の南麓を流る一川を因幡川と云ふ雨瀧に發し沿道の諸溪流を
集め西北鳥取を貫て袋川となる此の附近の地古時稻葉郷と云ふ

稻葉山懷古

小泉友賢

在君聞昔守因州倭什今爲口實留松朽爲新人永逝嶺頭空剩一茅丘

玉葉集

冬

順徳院

雪の中に冬はいなはの嶺のまつついにのみちぬ色たにもなし

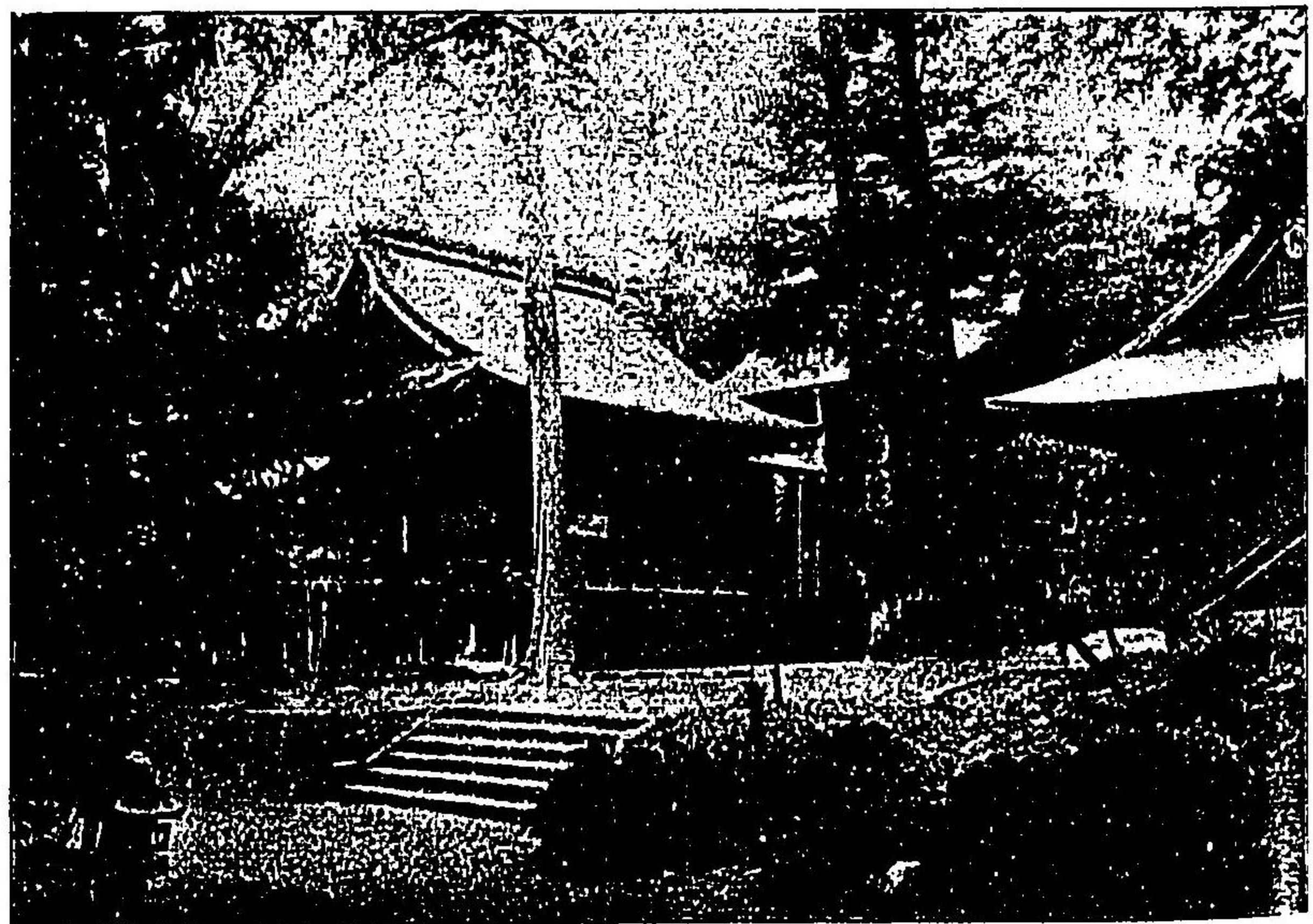
峯に生る松にも今やかようらんいなはの風の夕くれのこゑ

安徳天皇御陵參考地附註來園 (鳥取より二里十九丁)

いなは川いなどし終にいひはてはなかれて世にも住まゝしものを
御陵村大字岡益村に石堂と稱する結構壯大の古墳あり古來安徳天皇の
御陵と稱す此地に傳ふ所の舊記を案するに壇浦の役天皇二位尼及二三
の臣下に護せられ一舟に乗して風濤に任せ隱岐國岩崎浦に漂着す浪
高ふして上るを得ず轉して因幡の沖に抵る風雲簸揚雷霆霹靂して向ふ
所を辨せず因て天皇帶ふる所の寶劍を海に投して以て天に祈る既にし
て風波大に飲まり舟一海港に漂到す之れ因幡の國賀露港なり偶々岡益
光良院の住職宗源和尚其の所を過き帝を見て尋常人に非ざるを察し勸



安徳天皇御陵墓參考地



國幣中社宇倍神社

めて其の寺に迎ふ既にして更に世の視目を怖れ侍臣と相諮て假皇居を八東郡私都地方瓢箪山に設け帝を移して茲に奉す蓋し以て時運の回轉を待んとするなり文治三年八月十三日帝二位尼等に伴はれて岩美郡大茅の郷荒船村の山奥に遊ふ遽かに不豫繼て崩御す壽十歳宗源和尚其の遺骸を光良院に迎へ且つ本寺般若院の長通律師を請して天皇御吊祭の導師となし以て尊骸を寺内に納む石堂即ち之れなりと明治二十八年に至り御陵墓參考地となりて宮内省の主管に歸せり石堂の狀は二層臺座にして下の臺座は方三間二尺高三尺上層は方二間半高一尺二寸厚さ上面二尺三寸なり其の上に無縫塔を安んず長六尺餘にして塔上に天蓋石あり方四尺餘破風形をなせり大臺座の上は盤石を以て三方を圍む其の石堅六尺餘横四尺乃至五六尺宛も屏風を立つるか如し其の構造の偉大一見人を驚かすに足る無縫塔中本と文字を刻しありしと云ふ石堂後に傍へる溪間には五輪塔累々として並立せり傳へて皆平氏遺族の墓と云す石堂の山麓帝池と稱へらるゝ小池あり蓋し天皇洗足の場と云ふ而し

て其の崩御の地は今に崩御の平と稱せり又八東郡には私都村あり行宮の在りし地なりと云ふ姫路村には天皇自社権現あり安徳帝を祀れり長通寺は始め光良院と稱せしか後兵燹に罹り廢寺となり再建の時長通律師か安徳天皇吊祭の導師となりし緣故に依り今の如く改名せりと云ふ舊と天臺宗にして本尊は阿彌陀如來觀音勢至兩菩薩なりしか今は曹洞宗能本山派にて本尊は長通律師の刻せる觀音菩薩なり

非來園は本寺と御陵地との中間にあり溪を渡り山に倚りて公園となせり泉石幽趣に富み眺矚頗る佳なり梅櫻萩楓等多數に栽培せられ鳥取附近の一遊園なり

岡益非來園記

土方久元

鳥取縣因幡國岩美郡岡益之郷有古墳焉傳曰壽永之亂平軍敗績殲于壇浦長門人某以短舸迎天皇天皇與二位禪尼等御之避難於見嶋既而復浮海去爲風濤所漂因幡賀露浦上岸岡益光良院僧宗源適過迎天皇於其郷而恐源兵之追躡遂奉徒瓢箪山營茅茨以充行宮日夕恭事供御無缺居三年

天皇崩焉是爲文治三年八月十三日宗源乃請叡山般若院僧長通爲導師葬梓宮于光良院之域古墳即是後光良院移伽藍於東南五町所更命曰長通寺世香火天皇以到于今云謹按舊史天皇崩于壇浦又閱諸書或曰蒙塵某地或曰潛幸某州諸說不同是以稱其山陵者往々有之如岡益古墳亦居其一而歷年七百文獻闕微非可據哉耆長通寺僧得明與縣志士謀狀其所傳稟白於宮內省因命諸陵寮檢覈其地復命曰墳在郷西林麓大石爲圍如垣墻高六尺方十有二尺中央立石長丈餘自基址至其頂高一丈五尺結構巍然罕見其比蓋亦非尋常之墳壘乃納寮議始爲陵墓參考地頭者縣人相謀卜墳側地若干畝伐荆蕪壘草蕪開塲一區命曰非來之園欲代口碑以貞珉垂之不朽歸文於余顧鄉俗醇厚一意敬之歲時尊拜不怠而此舉出於尊皇之至衷洵可嘉也因叙其梗概而與之云爾明治二十九年某月某日宮內大臣正二位勳一等伯爵土方久元撰

岡益懷古

收野 芝石

茂林深處一荒陵丈大石墻半壞崩云是安徳帝葬此山氣肅々洩骨凝憶起

當年擅浦戰、白旆燦燿從四面、鯨鯢振振吼天驪、平軍膽落皆悽愴、勢如破竹不可當、飛箭雨注刀如電、幾多錦綺漂波間、鮮血光流海色變、可憐平家一門太苦艱、蟬洲無地安玉鑾、僅逃虎口踐間道、躑躅千山萬壑間、物換星移歲七百、俯仰乾坤感今昔、嗚呼人世榮枯何有窮、源家骨肉相食兩無迹。

二位の石船 (鳥取より二里三十町)

登儀村大字新井村にあり新井は二位と訓す二位尼安德帝を奉して岡益に來り天皇崩後遂に殂して茲に葬りしと云ふ岡益を距る少許の地にして數百年を経過せる石棺あり溪頭の岩角に其の一部を顯はせり所謂石船とは之れにして尼を葬りし棺槨なりと傳ふ長六尺横四尺深二尺五寸水常に之に滿つ右方に小石窟あり平家遺族の墓所なりと云ふ又泉塚とも稱せり新井岡益の間掘原橋あり

雨瀧 (鳥取より五里二十町)

大茅村にあり高さ十三丈幅六尺飛流直下岩門を劈ひて來る其の聲轟轟澎湃百雷の墜つるか如く萬濤の崩るゝか如し波沫四散珠飛ひ玉濺く人

をして心魂爲めに戦かしむ真に一大偉觀なり傳へ曰ふ上流更に四十八瀑ありと雨瀧の傍又管瀧布引の二瀑あり布引瀧小と雖水流岩背を傳ふて漸々流下する處繩々澗々真に素絲を繰つるか如し又人目を喜はしむるに足る此の一帶の地楓葉濃丹を染めて碧潭と相映す秋景頗る絶奇獨り夏中避暑に適するのみならずるなり雨瀧の下流は大茅川となり更に因幡川となりて鳥取市を貫通す此の附近上地の溪上には鳥取電燈株式會社の水力發電所あり

衣川長秋雨瀧紀行の歌に

落瀧津たきのしら糸くりかへし見れどもあかす瀧のしら糸

飯田年平

青ふちのみつちのいふきがきくらしをづるも寒き瀧の音かな

小谷古蔭

岩床の昔のむしろに一夜寝むたきの河内は蚊の聲もなし

摩尼寺 (鳥取より一里十八町)

中ノ郷村にあり天臺宗にして本尊は帝釋天なり天長年中の創立に係る

仁明天皇の御宇比叡山第四座主慈覺大師山陰に遊錫して此山に登り佛法弘通の勝地なるを認め岩角を穿ち堂宇を建立し帝釋天を安置し山を喜見と名け寺を摩尼と稱せり爾來堂宇其敷を増し頗る輪煥の美を極めしか天正八年羽柴秀吉の兵燹に罹りて舊觀を失へり後數年今の諸堂を再構す本寺は鳥取附近に於ける最高峰中の山肩にありて渺茫たる北海を下瞰し眺望雄恢因州第一の靈場にして遠近の參詣人四時絶えず或書に據るに摩尼寺は覺寺村より二十二町にあり其の間に糺子落など云ふ名所あり本尊帝釋は承和年中慈覺大師の草創なり諸人常に感應を祈りて仰崇淺からず就中六月二十六日より二十九日迄會式にて參籠の者多し中古陸奥守秀衡病に臥し帝釋に慈救を祈り靈驗に依て伽藍を建て杉松を植て報賽せりと縁記に載す云々又奥の院は本寺の東谷奥にあり仁王門より十三町岩窟の中に地藏を安置す奥の院より三町許り奥に立岩と云ふありて岩下に地藏を安置す其所を賽の河原と云ふ當時帝釋此の岩頭に出現したまふと

又傳説に據るに昔高草郡に長者あり名を産見と云ふ一女子八歳の夏六月忽ち其の所在を失ふ長者之を尋ね求むるに彼の女子龍女と化して海上雲霧の中に浮游すること三日三夜なり晦日に至て立岩の頂に立ち帝釋と現して佛法王法を守らんと云ひ棄て、往く所を知らずと按するに産見長者は即ち伏野長者にして女の死を吊はんか爲め此寺を創建せしものなるへし

本堂の前面に一大枯杉の根株あり即ち秀衡植付の一樹なりと傳稱す藩儒堀敦齋秀衡杉の碑文を撰す此の樹の謂なり又此山麓に小泉友賢の墓あり友賢は稻葉民談記の著者なり

秀衡杉記

堀 敦 齋

舊記載此杉奥州藤原秀衡所遺植也秀衡嘗病篤夢異人來告曰吾梵天帝釋也在因州摩尼寺就祈得生已覺急馳使詣其地祈祀病果瘳秀衡感喜乃復遣人種杉數株于寺境致報謝之意此其遺云樹大數圍枝幹老實數百年外物也近歲雷震其上遂挫折死僅存枯株丈餘耳頃寺主舍公更造伽藍因

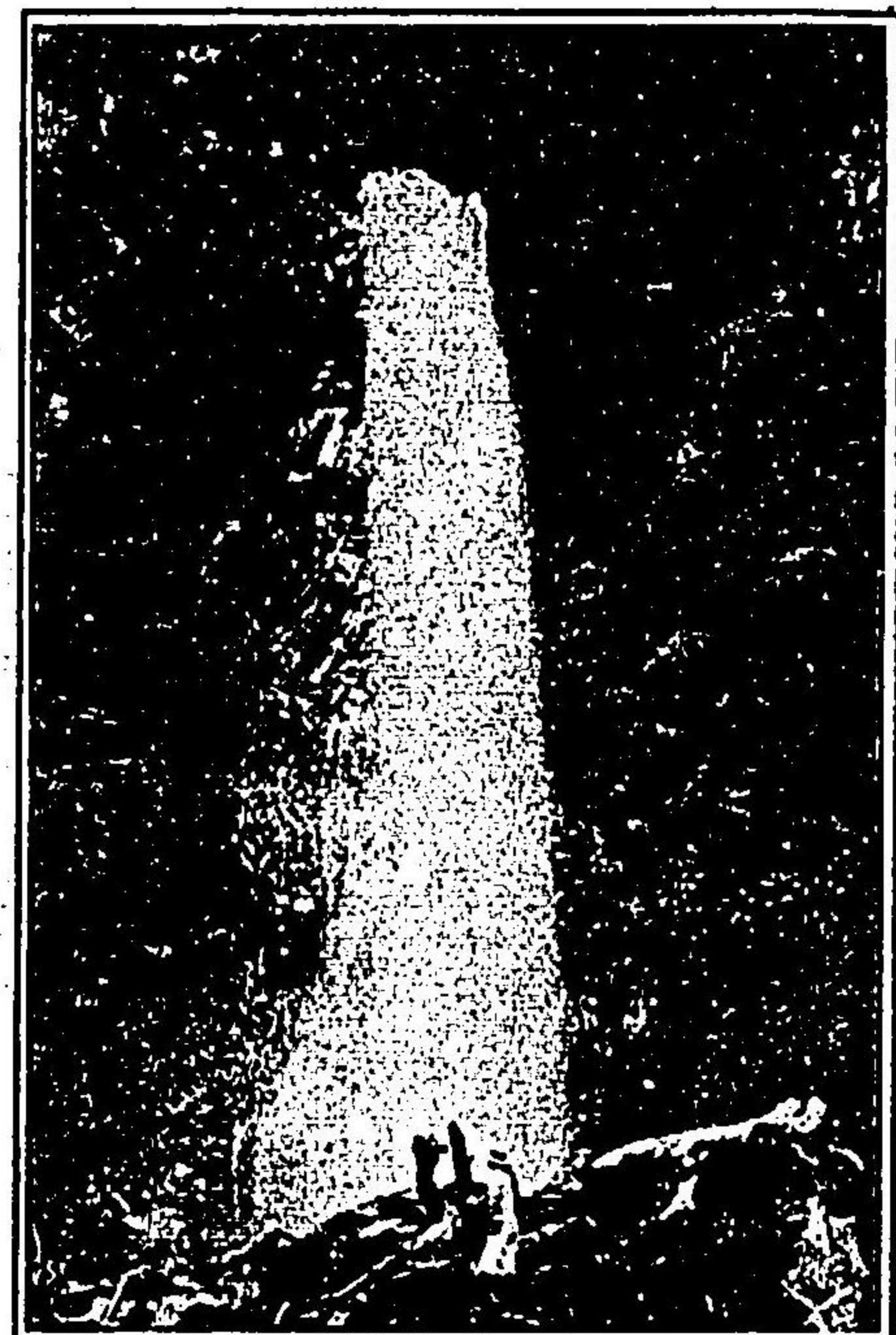
作遮園練之建碑其傍以表焉乞文于予予按舊記所言頗似荒唐然江筆丁松載在前史今年代悠邈既不能徵其必有此事又安能徵其必無此事乎古云疑事毋質且因其所傳以記之記文久紀元辛酉夏五月

岩井温泉 (鳥取より五里十五町)

岩井村にあり何れの時代の發見に係るやを詳にせずと雖延喜式神名記に據れば因幡國五十座の中巨碓郡に御湯神社あり泉質は弱鹽類にして温度百十七度儂麻質斯慢性胃加答兒其の他諸病に著効あり此地や因幡但馬間國道線路の宿驛に當れるを以て交通の便善く且つ東南は蒲生銀山の諸峰屏立し西北は田野千頃望み開豁なり蒲生川の清流宿中を貫通す夏日は杜鵑の聲錦襖子と相和して清趣を添へ風景泉質静養の料たるはさるはなく旅館設備亦完全にして四時浴客輻輳す驛を距る南敷町にして宇治村あり山際に高八九間廣三間可りの一丘あり傳へて冬久子孫の居れる長者屋敷の趾なりと

鏡泉誌に曰く此泉の涌出する所古石井郷と云ひ宇治長者の遺跡あり初

雨 瀧



岩 井 温 泉

め長者の居をトせんとして此の地に來るや偶々神女に逢ふ涌泉の所を指
示して終焉の地と爲さしむ且曰く余は醫王なり汝を俟つこと久しと言訖
りて遂に見えず長者感謝して自から醫王の像を刻し佛閣を造りて之を
安んじ湯榮山如來寺と稱し以て之に報ゆと云ふ抑も長者は山城宇治郷
の人左大臣藤原冬嗣の裔冬忠の第二子冬久にして其の母の己を愛し其
の兄を廢するの意あるを知り伴り狂して家を出て此地に匿れて財を散
し貧困を恤む人皆其の徳に懐く時の帝之を賞し給ひて土地及材木を賜
ふ因て浴場を構造す來り浴するもの多し長者終に壽を以て終はり子孫
連綿たりと

愛岩靈燈長峰翠月蒲流爭釣宇臺黃波養老盤狩長安晚鐘恩趾曉雪島根
納涼

之れを岩井八景と稱す

岩井温泉

小泉友賢

醫沸温泉岩井郷井華清烈暖如湘鶴鹿忽起蒸蒸氣水脈常溫生熱湯曬岫

泉飛秦始祖。華清池浴李三郎。洗腸洗骨有神驗。真登仙域壽無疆。

岩井温泉雜詩本十首

堀 敦 齋

已領温泉勝。更添水與山。雲邊青欲滴。柳蔭自成灣。景以有詩寫。心因無事閑。登仙途咫尺。鶴背穩堪攀。

岩井竹枝詞

做浴湯歌 本十首

同 上

阿三本輕薄。花柳隨處歡。朝來須早返。主人未辨餐。

宿岩井温泉

正 埜 適 處

冠童六七儘隨行。聊試盈々春服輕。已入溪村忘俗務。僅離城市即風情。晴川一帶花神老。綠樹滿山營意驚。今日君恩賜清暇。滄洲咫尺夢魂平。

岩井温泉に因みある古歌ども

世々を経て島根の御湯は今も猶ほさむるときなくわきかへるらしむかしよりさむることもなきとの國の島根の御湯や神ぞ守れる

衣川長秋か岩井紀行の歌に

よの人の病いねねと大汝少彦名のつくらせりけん

島根水 (岩井の水)

本庄村西の山下にあり深さ三尺はかりの廢井なり是れを島根の水と號し又岩井の水と云ふ此地舊き裏海なりしか世を歴ること幾千歳海潮退き平地となる其の井の側に巨岩數多有つて海島の形をなせり島根岩井の名も爰に生するならん今は水涸て搦するはかりなれとも國中名に負へる名水なりと云々因幡誌に見たり

衣川長秋か岩井紀行に

此のあたりに島根の水とて清水あるけるよしかねて聞てしあれば何所ならんと問ひて行ほどに道のかたはらの山のふもとに井の形したるを立よりて見るに名高き島根の水ともいふへきさまならねは此のあたりの田人ともにとひければ此の頃の荒き水に山崩れて井の形も變はれりといへり

汲あけて濁る斗も名にをへる岩井の水はあせにけるかも

金峰神社 (鳥取より五里三十四町)

牧谷村にあり山を權現山と稱す北海に臨める峻峰にして一望以て鯤波

鵬雲の變化を倂瞰すへし本と大和國吉野郡金峰神社を勸請せし者に係り中世佛法盛なりしとき更に藏王權現を勸請し之を分祀す因て改て藏王殿と稱す源頼朝社領三百石を寄附す後文和の比山名氏清戰捷歸國の時治世祈願の爲め三千石を寄附し三十二院を置きしと其の舊趾猶ほ存せり池田家領國の時に於ても崇敬淺からず岩井地方の一名祠なり

浦富海水浴場 (鳥取より五里四町)

浦富村にあり西北には宮島の岬角海に斗出して一小灣をなし中間に孤島突起して海水を兩断し波穏かなるの所即ち海水浴場なり島上一神祠を安んず急階を攀ちて之に登れば老松其の上に蟠踞し綠蔭數畝盛夏猶ほ寒きを覺ゆ島下奇岩怪石星羅棋布す或は龍の如く或は虎の如く千態万様一々名狀すへからす真に好個の海水浴場にして風景の好鮮魚の美以て遊客を樂ましむるに足る

網代海上の美觀 (鳥取より三里十五町)

網代村より海上浦富村に至るの間に於ける島嶼棋布の風景は獨り一縣



摩尼寺



浦富海水

下に冠たるのみにあらず實に天下の奇觀なり網代より舟を倣て網代港の一角を右折して東に進めは無數の大小島嶼相散點し仰けるもの俛せるもの巨濤首を擡けて浮ひ長鯨鬣を振ふて吼ゆるか如く數多の島嶼又た幾處の深洞あり窈冥にして白日尙ほ鬼氣を帶ふ海岸の連山は壁立百仞直に海を壓す景色雄偉人目を愕かす而して菜花島の黄花千貫松の翠嵐は最勝の風光として名あり菜花島は斷岸絶壁より成り層巖の孤島なるに拘はらず暮春の候菜花全島を掩ひ美觀謂ふ可からず二百數十年前の記事にも此島山の頂にいつの世よりや有けん菜の種自ら生ちりて暮春艶陽の比には菜の花爛熳と咲きみたれ彼島山にみちみちすれば海濱の遙望一片の黄雲海潮にうかひ煙霞千里の風景誠にたへなる佳境也とあれは其の菜花發生は極て舊時に在るを知るへし千貫松島は上に奇古なる老松の偃蹇たるあり下には通洞ありて扁舟島腹を穿ちて通過し得へし傳へ云ふ舊時因幡の某藩主該島上の松樹を見て愛賞措かず侍臣に語て曰く能く之を移して我邸園に致すものあらは與ふるに祿千貫を以

てせんと後世因て此の名ありと云ふ此の海上は無数の島嶼列峙し濤勢を殺くに由て海上平隠として舟遊に適す

第三 八頭郡

若櫻は郡の東部に位し播磨街道の宿驛たり往古武門の割據したる地にして宿の西方に鬼ヶ城あり天正の頃は軍馬馳驅の古戰場たりし人口二千九百餘なり賀茂村は郡役所の在る所にして人口は千六百五十餘とす又郡の南に智頭宿あり智頭街道の宿驛にして人口二千六百三十餘是より北に距る二里用瀬宿又二里北に河原宿あり同街道の宿驛なり

賣沼神社 (鳥取より三里二十七町)

賣田村に在る郷社にして祭神は八上比賣命伊弉册尊保食神建御名方神高禰神闇禰神にして式内の神社なり八上比賣は古事記に謂ふ所の稻葉の八上比賣にして大己貴命の妾神なり舊事記にも亦云ふ大己貴命の兄弟八十神相共に欲婚因幡國八上姫大己貴爲奴而行八十神亦負袋而行於

是大己貴以兔爲媒得八上姫八十神大根云々ト命は元と八上郡内の出產なりと云ふ創立年月及勸請原由詳ならずと雖國內有名の舊社なり

和多里神社 (鳥取より三里三十四町)

大御門村に在る村社にして祭神は佐爾陀彦神なり社傳に據れば平城天皇の大同二年和多里山より今の地に遷座せらる延喜式神名帳に所載の神社なり元弘帝既に隱岐より伯耆に遷幸せられ更に船上山より京都に還御さるるや路因幡を経て暫く此の地に駐蹕せらる此の時當社の神主大川左近大夫重宗勅命を以て朝敵退治の祈禱を行へり後名和長年より社領十町六段二十五歩を寄附せしと云ふ

最勝寺 (鳥取より三里四町)

國英村に在り眞言宗にして本尊は樂師如來なり由緒に曰く和銅二年行基菩薩當山に來り本尊樂師佛を草庵に安置す其の後在原行平國守たりし時一字を建立し蝗害退除の祈祭をなす天曆元年慈惠大師來りて伽藍及四十二坊を建立し同年勅を奉して天台宗靈石山最勝寺彌勒院と號す